

339

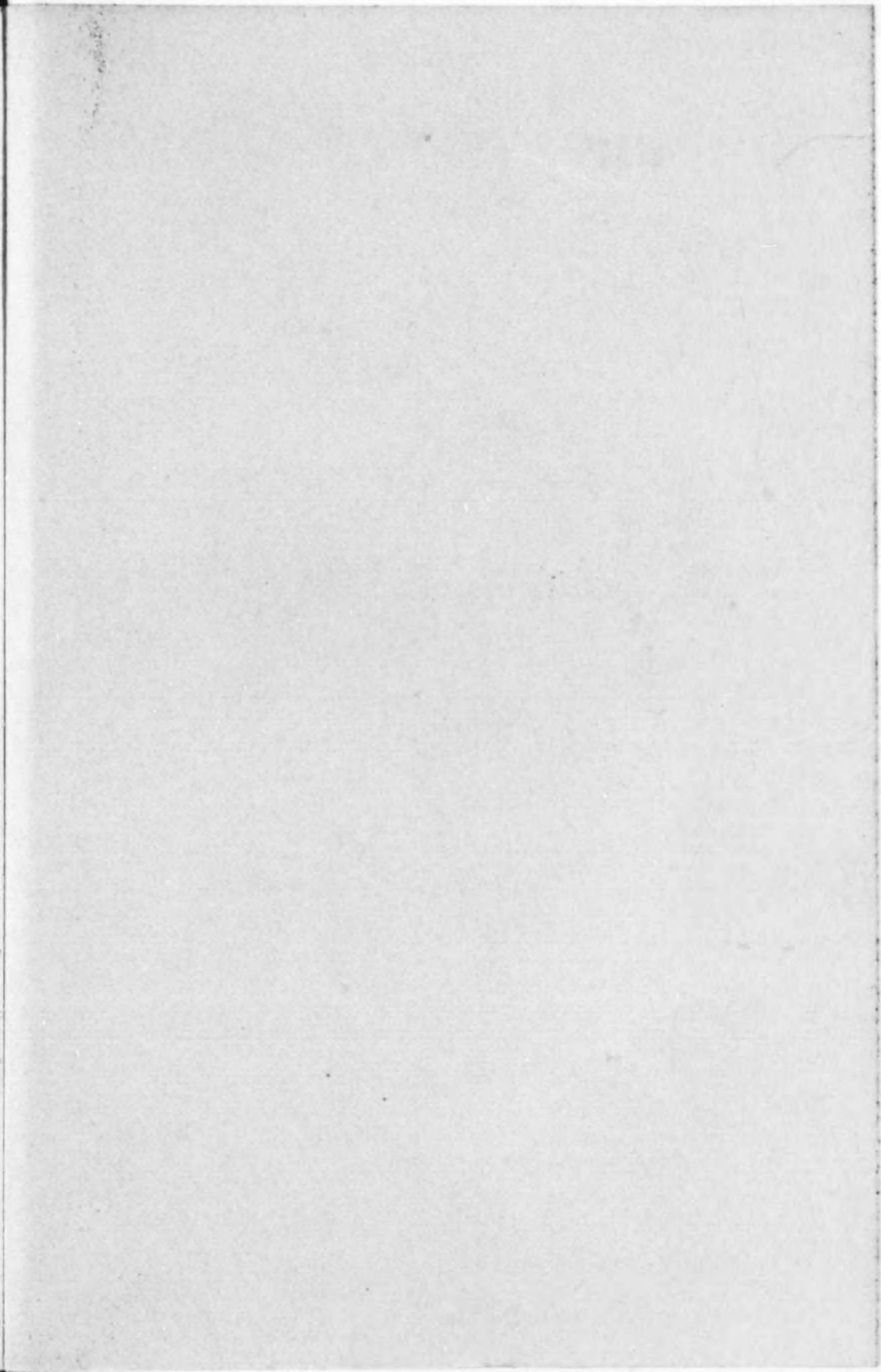
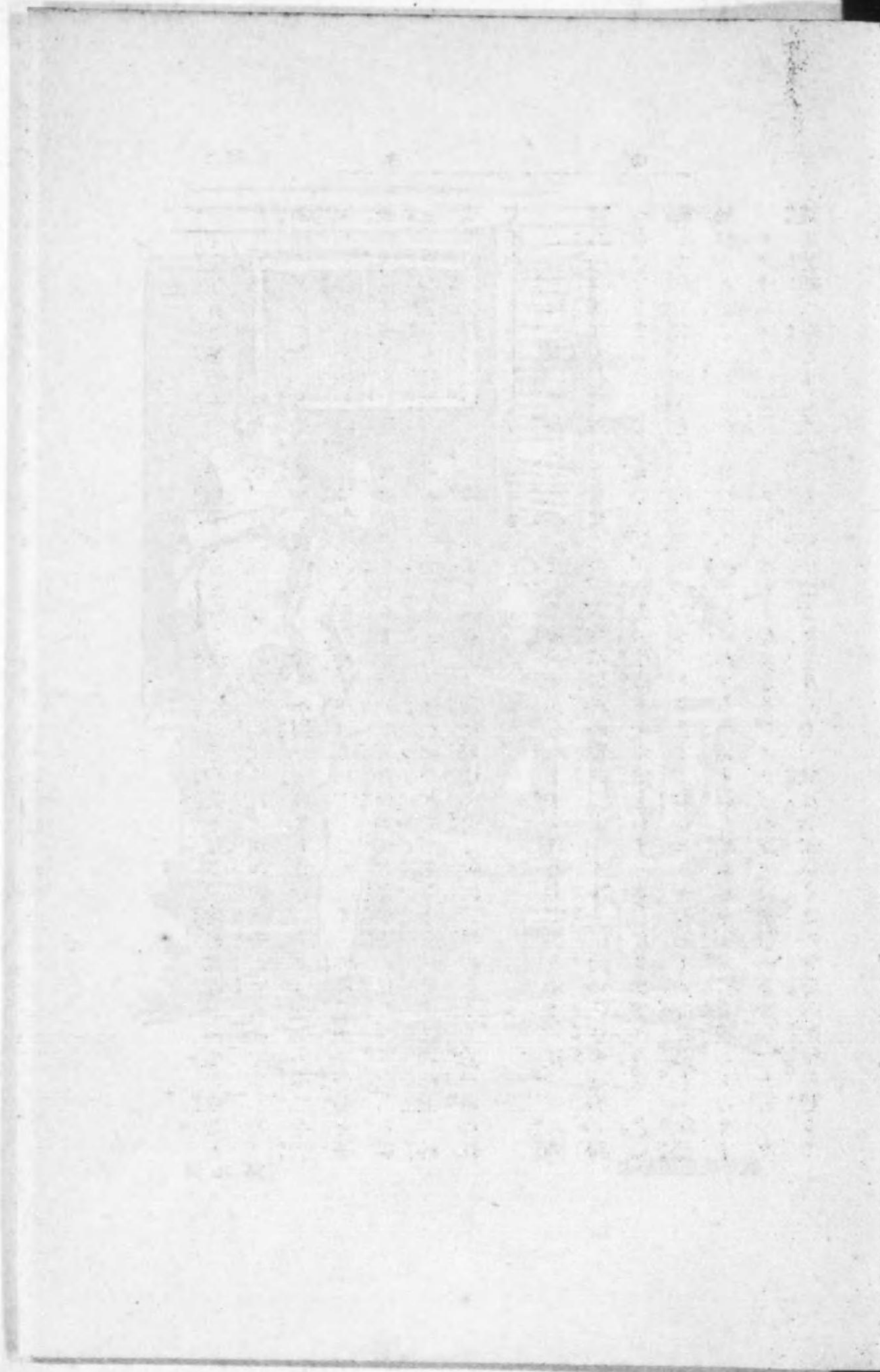
320

莊
命

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14

始





特222
183

J・F・ルサフオード著
明石順三譯

生命

大創造者エホバの御言に基きて全地を樂園と
化し、全人類をして地上に永久の生命を樂ま
せんとの神の御目的を明示す。

發行所 萬國聖書研究會



我が民を慰めよ

第九頁

生命の授與者に在す

神エホバ

に此の書をさし上げ奉る

神の賜物は我等の主イエス・キリストに
於て賜はる永久の生命なり

J・F・ルサフォード

序言

幾千年の長き間、人間は健康、平和、幸福を樂まんが爲に生命を探し求めてゐた。此の秘密の鍵は神エホバのみにあつた。此の秘密が人類に公開されて人々が地上に於ける永久の生命を得るの道が與へられる時は遂に來た。「永久の生命は唯獨りの眞の神なる汝と其の遣はし、イエス・キリストを識るこれなり」とはイエスの御言である。之ぞ即ち永久の生命を得る唯一の道である。神の言は眞理の大寶庫である。ヨブは聖書中に卓出せる人物であつて、ヨブ記は永らくの間に亘り秘密の幕に包まれてゐた。而して此の神秘の書は遂に開かれて研究者の前に其の眞意が示される事となつた。若し人類が身心共に完全なる状態に回復され地上に於て健康、平和、幸福、繁榮の歡喜裡に永久に住むやうになるならば現下の諸難問題は忽ち一掃される筈である。此の祝福は今人類の前に開かる。人間の永久に生きるは、神の備へ給ひし贖ひと復興の道によるにあるのみ。各人は此の事實を知らなければならぬ。父母よ、之を己が愛子に教へよ。此の機會は汝等の前に開かれたのである。

著者誌す

はしがき

此の書はプロバガンダではない。宣傳行為に絶對無關係である。此の書は人間に對して最も重要な事を示してゐる。本書は人間をして地上に永久の生命を得しむる唯一の道を明示す。神エホバは此の地球を人間の住所の爲に創造された。地上に於て人間に永久の生命を與へ得るはエホバのみに在す。本書に示されてある事實は今人間が永久の生命に至る道を知るべき時の到來せるを立證す。此の本は所謂宗教書類ではない。寧ろ宗教の假面を剥いで其の赤裸々の正體を讀者に示すものである。之を讀む者の心は歡喜に躍る。今重荷を背ひて苦惱しつゝある人々に歡喜の贈り物として我等は此の書を提

供す。

發行者しるす

生 命

生命

第一章 復興

今年八十の高齢者ソロモン・イサクソンは猶太人である。彼の生涯は實に慘澹たるものであつた。永年の苦勞で其の身體は衰へ屈んでゐる。其の頭髮も雪のやうに眞つ白である。此の老人は今、表戸口の所に腰を下して讀み慣れたヘブル語の舊約書を讀んでゐる。彼は時々その忠實なる老妻リベカに話しかけて、己が先祖等に就ての記録を説明してゐる。老人はその妻と共に聖地パレスチナを巡禮し、聖都エルサレムを訪れた事がある。智者ソロモンによつて建てられたと稱されてゐる石の城壁は今「悲嘆の壁」と呼ばれてゐる。老人夫妻は其の壁に向つて他の人々と共に悲みの涙を流して來た。老人も他の同胞である猶太人と共に、何

目次

第一章	復興	一
第二章	イスラエル人	三
第三章	組織さる	五
第四章	不忠信	七
第五章	苦難	一〇
第六章	光明	一三
第七章	倍	一五
第八章	骨	一七
第九章	贖ひ	一九
第十章	メシヤ	二二
第十一章	ア	二四
第十二章	聖名の擁護	二六

時は枯木に等しい猶太人にも花が咲いて、彼等が約東の地なるパレスチナを再び所有するに至る事を同じく願つてゐるのであつた。

老人夫妻の住む家の前はその門口に至るまでに少しく空地となつてゐる。門から戸口まで一條の小徑がついてゐるが、其の兩側には美しい草花が咲き亂れて初夏の微風に快い香を弄らせてゐる。薔薇の花片の上に結びし露の珠も未だ解けやらず、蜂 雀は忍冬の花から吸ひ出す蜜の甘味に酔ひ、庭の樹の梢には小鳥が朝の歌を樂しげに歌つてゐる。甚だ平凡ではあるが人の心を惹きつける風景である。門口から一人の青年が入つて來た。元氣よく小徑を傳つて來て、老人の傍まで來ると満面に笑を浮べて「御早う御座います」と挨拶した。老人も挨拶を返したが其の眼にも言にも悲みが満ちてゐた。

「ハハア、聖書を御読みですか。初夏の朝、靜かに聖書を読む……と云ふ譯で全く御樂みてすな」と青年が云ふ。

「お樂み……？」老人は不機嫌さうに答へる。「お樂みどころか、苦しいんだよ、俺は今詩篇の九十篇を妻のリベカに讀み聞かして居ましたのじや。此の言は大昔モーセによつて書かれて、祈としてエホバの前に歌はれたのじやが、これは葬歌のやうに悲しい哀調を帯びてゐる。今も妻に話してゐたのじやが、モーセは我々人間の狀態をよく形容してゐる。若いお方、

貴郎は未だ若い、然しな、何時か年老つて俺のやうになるのもさう遠い事でない。若い間に聖書を學んで置きなされよ。今モーセの言を讀んであげるから年老つた時に思ひ出す爲によく覺へて置きなされ。モーセは人間に就て斯う記してゐますじや、「汝之等を大水の如く流れ去らしめ給ふ、彼等は一夜の寢の如く、朝に萌え出づる青草の如し。朝に萌え出でて榮え、夕には刈られて枯るゝなり。我等は汝の怒によりて消え失せ、汝の憤怒によりて怖ぢ惑ふ。汝我等の不義を聖前に置き、我等の隠れたる罪を聖顔の光の中に置き給へり。我等の諸々の日は汝の怒によりて過ぎ去り、我等が凡ての年の盡くるは一息の如し、我等が年を経る日は七十歳に過ぎず、或ひは壯健にして八十歳に至らん。されどその誇る處は唯勤勞と悲嘆のみ。その去り行く事速かにして我等もまた飛び去れり」(詩篇九十篇五―十節)。

「然し御老人」と青年は云つた。「どうか其の第三節と十二節から十七節迄を讀んで下さい。さすれば其處に希望を掴む事が出来る筈です。失禮ですが私がお讀みしませう、お聴きなさい」「汝人を塵に還らしめて宣はく、人の子よ、歸れと。願はくは我等に己が目を數ふる事を教へて智慧の心を得しめ給へ。エホバよ、歸り給へ。かくて幾何時を歴たまふや。願はくは汝の僕等に保れる聖意を變へ給へ。願はくは朝に我等を汝の憐憫にて飽き足らしめ、世終るまで喜び樂ませ給へ。汝が我等を苦しめ給へる諸々の日と、我等が禍害に罹れる諸々の年

とに較べて我等を樂ませ給へ。汝の御作爲を汝の僕等に、汝の榮光をその子等に顯示し給へ。斯くて我等の神エホバの佳美を我等の上に臨ましめ、我等の手の工を我等の上に確からしめ給へ。願はくは我等の手の工を確からしめ給へ」

「若いお方、貴郎は未だ若い異邦人じやが、それにどうして大昔のモーセの言をよく知つてゐなさるのかな」

「門札で見ますと御老人はソロモン・イサクソンさんとなつてゐますね。其處でイサクソンさん、私のやうな若輩が貴老のやうな經驗に富んだ御老人に巧者振つて智慧をお教へしやうと云ふ譯ではないのですからどうか誤解しないで下さい。唯私は全智者の御言をそのまゝ貴郎方に御傳へするに過ぎないのです。エホバは貴郎方の先祖たちの神です。エホバはアブラハム、イサク、ヤコブ、モーセ、ダビデや智者ソロモンの神でした。今貴老が御讀みになつた詩篇の中には全能の神の智慧が示されてゐます。貴老は「エホバの靈我が中に在りて言ひ給ふ。其の論言わが舌にあり」(サムエル後書廿三章二節)と云つたダビデの言を御記憶でしやう。その同じ靈力がモーセを感動して今貴老がお讀みになつた聖句を書かしたのでです。エホバの靈とは人間の肉眼に見えない力です。神は此の見えざる力を人間の心の上に働かし、その人をして神の書かしめんとする處を自由に書き記されるのです。ダビデが「エホバの靈我

が中に在り」と云つたのは即ち此の見えざる力なのです。モーセも此の神の靈力に感動されて人間に對する神の御目的を記述しました。此の預言が成就して人々が此の預言の意味を諒解する時が必ず來なければなりません。然らざれば此の預言を記録して置く事は絶対に無意義となります。各種の實證は示して今、之等の預言が成就すべき豫定の時が既に到來して、人々が之等を諒解する時になつた事を明かに立證してゐますが、若し之等の預言を正式に諒解し得たならばそれは必ず甚大なる喜びを人間に與へるに相違ないのです。私は此の理由に基いて先程貴老に、聖書をお讀みになつて御樂みでしやう、と申し上げたのです。

若し神がモーセやダビデを用ひて諸々の預言を記述して置かれるとするならば、神は又他の人々を用ひて實際に起きた事相を記録せしめ置き、之によつて之等預言の成就したる事を知らしめらるゝ筈であります。此の預言にしても、又それ等の成就にしても決して人間智の示されたるものではありません。神はその預言に依て、豫定の時至るに及びて人類の上に發生する諸々の事がらを豫告して置かれます。若し此處に種々の出來事が發生し、亦それ等の出來事が預言によつて示されある所に全く一致符合してゐる事を知る時に我々は今、それ等預言の成就すべき時に到達したる事を確實に知る事が出來る譯であります。ヘブル人(猶太人)が永らくの間神の言の保管者であり、又彼等や異邦人(猶太人以外の諸國民)が甚大なる

興味を以て神の御言を読み、それによつて利益を得たと云ふ事は、即ち神がそれを讀む事によつて人間に慰めを與ふるやうにして置かれた事が確かでありませう。

今貴老がお讀みになつた詩篇は預言です。其の中でモーセは神が人間を塵に還らしめられる事を示した後に「人の子よ、汝等歸れ」との神の御言を記述してゐます。「歸れ」とは何から何に歸るのでしやうか。人間が有してゐて後に失つたのは生命です、そして「歸れ」とは即ち死の状態より生命の状態に「歸る」こと、即ち生命を復興される事を意味してゐるのであります。然る時にモーセの祈は神が人間に關する御業を變更されん事を願つてゐます。之は即ち人間を死より復活して彼を永久の生命に導くのは神エホバのみに依る事を示してゐるのであります。過去幾千年間の長きに亘り人間は皆死んで行きました。モーセの此の言に見ても神は人間を死の状態より回復さるる事が明白であります。モーセは第十四、十五節に於て此の希望を表示して居ります。「願はくは朝に我等を汝の憐憫にて飽き足らしめ、世終るまで喜び樂ませ給へ。汝が我等を苦しめ給へる諸々の日と、我等が禍害に罹れる諸々の年とに較べて我等を樂ませ給へ」

神の「憐憫」が正當に行使される時に苦しみの「怒」と死は罷み、生命は與へられて人間は永久の幸福を歡び受ける事となります。モーセの言つた「汝の御行爲を汝の僕等に、汝の

榮光をその子等に顯示し給へ」とは即ち神の御業が、人間を死の状態より引き上げて生命に復興する事を意味してゐるのであります。之は神の忠信なる僕等に歡喜を齎らすと共に、その子等に榮光を顯はし示す事となります。

若し今、貴老が悲歎をお罷めになるならば、貴老はその若き日の有様に歸り、貴老の肉は子供のそれよりも新しくなつて甚大なる歡喜を感じられるは確かであります。私は貴老が神の言、即ち眞理として記録されある聖書を信じてゐられる方とお見受け致します。ヨブの此の言を御記憶になつてしやう、「その肉は小兒の肉よりも瑞々しくなり、其の若き時の形狀に歸らん。彼若し神に祈らば神かれを顧み、彼をして其の御面を喜び見る事を得せしめ給はん。神は人の正義に報いを爲し給ふべし」(ヨブ記卅三章廿五、廿六節)。ヨブは神の指導下に此の預言を記録したのであります。貴老が今お讀みになつた詩篇の中でモーセが祈つたのは即ち此の幸福なる状態を意味してゐるのであります。

私は貴老が、之等の預言は預言者等を通じて示されし神エホバの御言である事を信じてゐられる方であると御見受け致します。貴老の聖書の手垢を見ると大分よく聖書を讀まれた事を立證して居ります。神エホバがモーセやヨブを通じて人間を死より回復して之に若さと健康と生命の祝福を與へんと示して置かれる以上、全知全能の神は必ず此の大仕事を成し遂げ

らるゝのであります。神が他の預言者をして記述せしめ置かれた此の御言を御記憶でしやう
「我この事を語りたれば必ず來らすべし。我この事を謀りたれば必ず爲すべし」(イザヤ書五
十五章十一節。四十六章十一節)。

神は亦預言者ダニエルを通じて地上人間の間に知識が増進し、人々が熱心に眞理の御言を
探らんと努力する時の必ず來るべきを預言して置かれました。日々^{日々}の出來事に見て此の預言
の成就せる事を人々をして悟り知らしめん爲に、神はダニエルを通じて其の時其處には交通
が頻繁となり、知識が増進すべしと告げて置かれました。(ダニエル書十二章四、十節)。私共が
今其の時に住んでゐるは確實であります。之は今更ら貴老に申上げる迄もなく、今日の高速
度の交通機關は貴老方のお若い時代には到底夢想だにせられなかつた筈であります。之等の
機械を發明し、亦之を運用してゐる人々は何れの點より見るもソロモン王程は智慧者ではな
いのです。然らばソロモンや當時の智慧者等は何故之等の驚くべき高速度の交通機關を其の
時に發明しなかつたのでありませうか。即ち其の時には未だ神の豫定されし時が來なかつた
からであります。その豫定の時は遂に到來して幾多の實證は此の眞理の預言が確實に成就し
たる事を私共の眼前に立證してゐるのであります。此の事實を見て之を悟り知る者は皆喜
ぶのであります。多くの書物が刊行されて今發生しつゝある幾多事相を示してゐますが、我

々は之等の事實を預言に當てはめて見る時に今、之等の預言を諒解すべき豫定の時が到來し
た事を明かに立證し得る譯であります。之が即ち今貴老が私に御問ひになつた處の、私が如
何にして聖書を知つてゐるかと云ふ問題に對するお答へであります。私の喜びは實に非常な
ものです。と云ふのは即ち吾に之等の驚くべき眞理を知ること許されたのみでなく、亦之
を他の人々に傳達して、之により悲しめる人々の心を歡喜に變ずるの特權に奉仕してゐるか
らであります。エホバが眞の神に在して、義と愛の偉大なる神であり、諸々の祝福は皆エホ
バのみより出で來ると云ふ事を知るは人々にとつて眞の歡喜を與ふるのであります。若し人
類が苦痛と死の状態より引き上げられて生命と幸福に復歸するとせば、之は人間の前に齎ら
される最高至上の善き福音であるに相違ありません。

「復興」と云ふ事は曾て一度所有してゐたものを或る何かの正當な理由によつて失ひたる後
に、それを再び回復すると云ふを意味してゐます。それを興へし者のみが之を沒收し、而し
て再びそれを回復する事が出來るのであります。ヨブは神の靈導下に斯う記しました。「エホ
バは興へ、エホバは取り給ふなり、エホバの御名は讃むべきかな」(ヨブ記一章廿一節)。神は
その御豫定の時至るに及び、その自ら善しと視給ふ方法によつて復興の祝福を受けるに必要
なる充分の機會を全人類に與へられる事となつて居ります。モーセは斯う記しました。「永遠

より永遠まで汝は神なり。汝は人を塵に還らしめて宣はく、人の子よ、歸れと」(詩篇九十篇二、三節)。之に見るも神は或る正當なる理由に基いて人間を死に遣り、そしてその御豫定の時至るに及びて人間を死より回復される事が明白であります。「歸る」と云ふ事は即ち人間が以前の状態に復歸すると云ふ事を意味してゐるのであります。之は神の元則であります。何故なれば聖書はさう宣言してゐるからであります。之が神の元則であるとするならば、之は又豫定の時至るに及びて全人類の各自に公平に適用さるべきは瞭かであります。何故なれば神は決して人を偏り視る方でないからであります。

復興は人類に對して甚大なる勇氣付けてあります。既に死せる者も、又今正に死なんとしつゝある者も皆この中に抱含されてゐます。お庭の美しい花々を御覽なさい。僅か數ヶ月以前は寒い冬でありました、そしてその樹木すらも全く枯れて死したるものゝやうであつたのです。頓て春が來て之等の樹木は蘇生し、葉を出し、花を咲かすに至つたのであります。之ぞ人類の状態に全く一致してゐるではありませんか、數千年間の永い、暗い冬が人類の上を包んでゐて、其の間に數百億の人間が死んで行き、又今日も多數の人間が死の墓場へと急ぎつゝあるのであります。此の長い死の冬は正に終らんとしてゐます。神の御計畫中の春の季節は今到來しました、此の故に今は神が人類の爲に備へ置き給ひし諸々の祝福に目を覺ます

時であります。猶太人たると異邦人たるとを問はず、人間は皆エホバが唯一の眞の神に在して、生命と諸々の祝福は皆エホバより發する事を喜ばなければなりません。エホバは絶大の生命授與者であります。人間は如何にして義しき道に導かれ行くのでありませうか。神の預言者は斯う記してゐます。「汝の聖言は我が足の燈火、我が路の光なり」(詩篇百十九篇百五節)。即ち人間は神の言を讀んで之を諒解し、神の指導下に聽き従はなければならぬのであります。神は其の御言を豫定の時至るまで諒解し得ざるやうになし置かれたのは明白でありましてその豫定の時至るに及びて「穎悟者」のみが之を諒解し得べしとの旨をダニエルを通じて示して置かれます。(ダニエル書十二章十節)。「穎悟者」とは神の言の眞理を熱心と正直とを以て探り求め、己が歩む道を神の御旨に一致せしむる者の事でありませう。其の人の知識は聖書とその成就せるを立證する實證とより來るのであります。其の時に彼が若し「穎悟者」ならば己が歩みをそれに合致せしむるのであります。之ぞ即ちモーセが其の祈禱の中に示した方則と一致するものではありませんか。「願はくは我等に己が日を數ふる事を教へて智慧の心を得しめ給へ」(詩篇九十篇十二節)。この豫定の時が到來する時に、神の言を諒解し得る者は何れも熱心に之を研究して、神が彼等をして諒解せしむる爲に豫め備へ置かれし全部の方法を用ひ使ふのであります。之に就てエホバの預言者は亦斯う記して居ます。

「我が民よ、我が教訓を聞き、我が口の言に汝等の耳を傾けよ、我は口を開きて譬喩を設け
 往古の幽玄なる語を語り出でん。これ我等が曩に聞きし所、知りし所、また我等が列祖の語
 り傳へし所なり。我等は之をその子孫に匿さず、エホバの諸々の頌美と能力と其の爲し給へ
 る奇しき事跡とを來らんとする世に告げん。そはエホバは證詞をヤコブの中に立て、律法を
 イスラエルの中に定めて、その子孫に知らすべき事を我等の列祖に命せ給ひたればなり。こ
 れ來らんとする代、後に生るゝ子孫が之を知り、自ら起りて其のまた子孫に傳へ、彼等をし
 て神に依り頼み、神の所爲を忘れず、その誠命を守らしめん爲なり」(詩篇七十八篇一―七節)。
 神は人間をして或る時の至るに及びて預言を諒解せしむるやうになされ、其の旨を發表さ
 れましたが、今、各種の實證より見る時に我等は今日其の諒解の時に到達してゐる事を示さ
 れるのであります。之に見るも神はその御言の知識を集合する更に他の方法を備へ給ふ事
 をも知る事が出来るのであります。此の諒解の時に及びて多くの書物が書かれ、聖書に基い
 て基礎的眞理を説明してゐますが、之等の聖書的立證は今我等の眼前に在る事實の光輝に依
 つて見る時に、神が人類の爲に備へ給ふ處の驚くべき祝福の御計畫を明示してゐます。人類
 の不幸なる状態を救済する方法として、今日までに人間の手より提供されたもので成功した
 ものが絶無である事を我々はよく知つてゐます。然し地上全人類の爲に備へられてゐる神の

救済方法は人類を死の状態より引き上げて、彼等に健康と氣力と生命とを復興する事となつ
 てゐます。之等の事實を明示したる多くの書物が既に發行されてゐまして、之によつて神の
 聖書を調べる時に我々は聖書を善く理解する事が出来ます。私は之等の眞理の書物を貴方等
 に傳達する歡喜の特權に奉仕するを許されて居ります。今此處に其等の書物を持參して居ま
 すから之を貴老方の御手許に遺して置き度いのです。私共の福音宣傳の方法は即ち之であり
 まして、此の方法によつて私共は地上全人類の上に来りつゝある復興の祝福に關する神の御
 計畫の福音を皆さんに御傳へしてゐるのであります。

眞理

凡ての正直な人々は皆眞理を探し求めてゐます。然らば人間は如何にして眞理を知り得ら
 れるか。又その眞理なるものは一體何處から得られるか、宇宙には一個の最高權威者があり
 まして萬物の上に位し、萬の善きものは皆此の最高權威者より來るのであります。之ぞ即ち
 天地の創造主なる神エホバであります。(イザヤ書四十二章五節)。エホバは全能の神に在して
 其の御力は無限であります。(創世記十七章一―三節。卅五章十一節)。エホバは萬物の上位にある
 「至高き者」であります。(詩篇九十一篇一節)。神エホバは義と智に在し、愛の完全なる表現
 に在るのであります。「エホバは磐に在して其の御行爲は完く、その道は皆正し。また眞理あ

る神に在して悪しき所なし、唯正しくして直く在す(申命記卅二章四節)。此の故にエホバは眞理の源泉であります。その御言は人間の福利の爲に與へられたる眞理の發表であります。神エホバの總ての道は皆眞實にして義しくあるのであります。(詩篇卅三篇四節)。此の故に聖書中に記されある神の御言を諒解する事は即ち眞理を得ることとなり得ます。眞理は美はしく、皆完全なる一致を保ち、之を諒解する時に快き樂の音を奏し出して人の心を歡ばします。ダビデ王は立琴の名手でありました。ダビデと云ふ名は「神に愛せらるる者」と云ふを意味してゐまして、又事實ダビデは神の御意に適ふ人であつたと記録されてゐます。(サムエル前書十第三章十四節)。此の故に神はその眞理を立琴に譬へられました。聖書は示して、エホバの眞理である立琴は永らくの間用ひられ、それを諒解し、感謝して受け容る時に其の音は聞こゆる耳の所有者に對して甚大なる歡喜を齎らすと教へてゐます。神は此の美はしい御言を聖書中に記録せしめられました。「諸々の民よ、聴け、賤しきも貴きも富めるも貧しきもすべて地に住める者よ、汝等共に耳を聳てよ。我が口は賢きことを語り、我が心は聰きことを思はん。我は耳を譬喻に傾け、琴(立琴)を鳴らして我が幽玄なる語を説き顯示さん(詩篇四十九篇一四節)。「譬」とは比喩若くは隱語を意味します。神は其御言を此の方法で記述せしめられたのでありまして、之はそれを諒解すべき豫定の時至るまで此の言の意味を隠し置かんが爲でありま

す。敵なるサタンも亦エホバの聖名を誹謗する事によつて神の言に就ての意義を多く邪導致しました。神は此の事實を豫知し、豫定の時至るに及びて眞理をその民に復興して之を諒解する事によつて歡喜を興ふるの方法を採られました。復興の仕事の最初の部分は即ち永らくの間隠されてゐた眞理を人々に復興する事であり得ます。之に就ての模圖はイスラエル人がバビロンに囚はれた後に得たる彼等の經驗に由つて示されてゐます。殿の器具類はバビロン人の手によつて運び去られました。エホバは豫定の時至るに及びてベルシャの王クロスを用ひて之等の器具類を殿即ち神の家に納める爲に取り戻されました。之等の器具類はユダの牧伯セシバザル(セルパメル)に交附され、エルサレムが再建されると共に殿の中に再び納める事となつたのであります。(エズラ書五章十四節)。その如く神は其の受膏者を用ひて眞理を其の民に復興せしめられたのであります。此の理由に基いて神の御計畫の眞理は今それが諒解され、感謝して受け容れられる事となつたのであります。神の眞理の回復は即ち復興が神エホバの絶対不變の律法の一なる事を確實に立證してゐます。「復興」と言ふ事は大眞理中の一でありまして、之れは一度は一般に熟知されてゐましたが、其後永らくの間忘れられてゐたのであります。今之を諒解すべき時が到來したのであります。何故なれば今が即ち神の豫定の時であるからであります。

律法

神の律法は義しくして完全であります。エホバの憲法は常に正しくあります。之を諒解し之に聽き従ふ事は常に平和と歡喜とを意味するのであります。(詩篇八十九篇十四節。十九篇七、八節)。イスラエルの民は神の選民でありまして、全人類に對する神の御計畫を豫表する爲に神によつて使用されました。神がイスラエル人に與へられた律法は神の憲法を示すと共に、未來に來らんとする更に善き事を預告してゐるのであります。「復興」は神の律法によつて確定されある所の神の御計畫の重要な一部であります。「復興」は正義の一條件として必要とされてゐます。若し人が隣人の牡牛を盗んだならば彼はそれを被害者の爲に回復する事を強制されます。若し其人が貧しくして被害者の爲に回復する事が不可能である場合には、其人は己自身を賣つて其の悪事の爲に償ひをなし、被害者に對して損害を支拂はなければなりません。

若し人が隣人の家畜を借り受けてゐる中に其の家畜が死んだならば借りた人はその損害を被害者に回復即ち賠償しなければなりません。「若し盜賊の入り入るを見て之を撃つて死なむる時は之が爲に血を流すに及ばず、然ど若し日出てよりならば之が爲に血を流すべし。盜賊は全く償ひをなすべし。若し物あらざる時は身を賣りて其の盜める物を償ふべし。人若

しその隣人より借りたる者あらんに其のもの傷けられ、又は死ぬることありてこの所有主それと共に居らざる時は必ずこれを償ふ(回復)べし(出埃及記廿二章二、三、十四節)。神が與へられし律法によりますと、不注意と故意との何れを問はず、若し人が隣人の財産を火で焼いたならば彼はその全損害を回復、即ち償ふ事を強制されます。「火若し逸びて荆棘に移り、其の積み上げたる穀物或ひは未だ刈らざる穀物或ひは田野を焼かば其の火を焚きたる者必ず之を償ふべし」(出埃及記廿二章六節)。

更に又、神がイスラエル人に與へられし律法は示して、若し人が其の隣人の財産を詐取し若しくは強奪し、若しくは遺失物を拾得してそれを不當に所有せんが爲に嘘言を吐く時は、彼は罪を犯したるものであつて、彼は必ず之を賠償し回復しなければならぬと制定されてあります。「是罪を犯して身に罪ある者なれば、その奪ひし物、その虐げて取りたる物、その預りし物、その拾ひ取りし物及び凡てその偽り誓ひし物を還す(賠償若しくは回復)べし。即ち其の原物を還し、その上に五分の一を之に加へ、その懲祭を獻ぐる日にこれをその本主に付すべし」

(レビ記六章四、五節)。

又その律法の制定によりますと、若し人が他人の家畜を殺したならば必ずそれを賠償即ち回復しなければならぬとなつてゐます。若し人がその隣人を傷くるか、又は殺したならば

人間に對する神の慈愛の賜物は生命であります。子が生れる、やがて成人して浮世の荒波と戦ひ疲れ、病氣となつて衰へ、遂に死にます。多數は若い中に死に、又その外の者も漸く六、七十歳迄生き延びて後に同じく死んで行きます。之を比較すると漸く人類の半數だけが五十歳まで生き得られると云ふ譯になります。多數の人々は若い中に死んで了ひます。神がモーセをして「汝は人を塵に還らしめて宣はく、人の子よ、汝ら歸れ」(詩篇九十篇三節)と書かしめられた時に神は之によつて何を意味されたのでありませうか。何故に神は彼等に「歸れ」と命じられたのでありませうか。此の事に對する正當なる答を得る時に我等は神が全人類の爲に準備し置き給ふ復興の祝福の大眞理を悟り知る事が出来るのであります。而して其の正當なる答は眞理なる神の言の中に明示されてゐます。

神は天地の創造主であります。「地とそれに充つる物は皆エホバの有なり」(イザヤ書四十二章五節。詩篇廿四篇一節)。神は地球を人間の爲に、人間を地球の爲に創造されました、(イザヤ書四十五章十二、十八節)。神は初めに先づ地を創造し、然る後に「エホバ神土の塵をもて人を造り、生氣をその鼻に吹き入れ給へり。人即ち生物(生靈……は曲譯なり)となりぬ」(創世記二章七節)と記されてあります。神が人間に生命を與へられたる方法は之等の言の中に簡明に示されてあります。神は人間に不滅の靈魂を與へられたとは別に記してありません。即ち

神は一個の生物、呼吸する者、有情の者を創造されたのでありまして、之が即ち靈魂と此譯されてゐる處の生物そのものであります。之に一致してヨブは斯く記述してゐます、「エホバは與へ、エホバは取り給ふなり。エホバの御名は讃むべきかな」(ヨブ卅一章廿一節)。モーセも之に一致して、神は人を塵に還らしめ給ふと示してゐます。然らば何故に神は人間に一度與へたる處の地上的生命を取り去り給ふたのでありませうか。

不從

神の律法は行爲の元則でありまして、義しき事を爲すを命ずると共に、惡しき事を爲す者に對して刑罰を準備し置くものであります。刑罰の制定と其の勵行方法を具備しない法律は絶對無効であります。其の違法行爲の大小を問はず罪は即ち罪であります。律法が公平なるものである以上、その刑罰は豫告されある通りに勵行されなければなりません。神は先づエデンと名附けられたる美しい園を設けて其處に人間を置き、之の監理者とされました。之は神の園でありまして、人間に屬する園ではありません。此の故に神は其處に置きし人間の行動を支配する爲に一の律法即ち規則を制定するの正當なる權威を有してゐられました。故に斯く記されてあります、「エホバ神その人に命じて言ひ給ひけるは、園の各種の樹の果は汝意のままに食ふ事を得、然れど善惡を知るの樹は汝其の果を食ふべからず、汝之を食ふ日に

加害者はそれと等しき程度の刑罰を苦まなければならぬとなつてゐます。「人を殺す者は必ず誅さるべし。獸畜を殺す者はまた獸畜をもて獸畜を償ふべし。人若しその隣人に傷損をつけなば其の爲せし如く自己もせらるべし。即ち挫折は挫折、目は目、齒は齒をもて償ふべし。人に傷損をつけし如く自己も然せらるべきなり。獸畜を殺す者は是を償ふべく、人を殺す者は誅さるべきなり。外國の人にも、自己の國の人にも此の律法は同一なり。我は汝等の神エホバなり」(レビ記廿四章十七―廿二節)。

若し人が貧窮の理由によつて其の財産を失ひ、他の人が之を所有する事となる時に、此の人はヨベルの時までのみ之を所有する事が出来るのでありまして、ヨベルの年に於てその財産は之を失ひし本來の所有者の手に還附されます。「その賣りてよりの年を數へて之が餘りの分をその買主に償ふべし。然せばその産業に歸ることを得ん。然ど若し之をその人に償ふ事を得ずば其の賣りたるものは買主の手にヨベルの年まで在りて、ヨベルに及びて返さるべし。彼即ちその産業に歸ることを得ん」(レビ記廿五章廿七、廿八節)。

神の律法は義しくあります、故に神は回復即ち償ひはエホバの義の要求する所である事をその律法によつて確立されたのであります。

憐 憫

回復はその被造物に對する神の憐憫の表示であります。エホバの憐憫は永遠に絶ゆることなしと示されてあります、(詩篇百十八篇一節)。神の此の元則はイスラエルの民に向つて示された神の御行爲によつて明示されてゐます。此の民は神と彼等との間に結ばれし契約を繰り返して破りました。神は其の憲法を彼等イスラエル人に明示する爲と、其の憐憫を表示する爲に己が預言者を彼等に遣はして、彼等が神に回復されん事を勸告されました。「エホバ云ひ給ふ、背けるイスラエルよ、歸れ、我は怒の面を汝等に向けじ。我は憐憫ある者なり。怒を限りなく含み居ることあらじとエホバ言ひ給ふ。エホバ言ひ給ふ、背ける子等よ、我に歸れ背ける子等よ、我に歸れ……背ける子等よ、我に歸れ。我汝の逆遠を醫さん。視よ、我等汝に到る、汝は我等の神エホバなり」(エレミヤ記三章十二、十四、廿二節)。神はその預言者を通じて背ける者に示し、彼等が悔悟するならば彼等に對しても復興の機會を與へんと憐憫に満ちたる聖旨を告げられました。「惡しき者はその途を棄て、邪曲なる人はその思念を棄て、エホバに歸れ。さらば憐憫を施し給はん。我等の神に歸れ、豊かに赦を與へ給はん」(イザヤ書五十五章七節)。即ち此處に人類に對する神の憐憫と慈愛が立證されてあるのであります、生命に對する復興は即ち神の義と憐憫の豊かなる表現であります。

人 間

人間に對する神の慈愛の賜物は生命であります。子が生れる、やがて成人して浮世の荒波と戦ひ疲れ、病氣となつて衰へ、遂に死にます。多數は若い中に死に、又その外の者も漸く六、七十歳迄生き延びて後に同じく死んで行きます。之を比較すると漸く人類の半數だけが五十歳まで生き得られると云ふ譯になります。多數の人々は若い中に死んで了ひます。神がモーセをして「汝は人を塵に還らしめて宣はく、人の子よ、汝ら歸れ」(詩篇九十篇三節)と書かしめられた時に神は之によつて何を意味されたのでありませうか。何故に神は彼等に「歸れ」と命じられたのでありませうか。此の事に對する正當なる答を得る時に我等は神が全人類の爲に準備し置き給ふ復興の祝福の大眞理を悟り知る事が出来るのであります。而して其の正當なる答は眞理なる神の言の中に明示されてゐます。

神は天地の創造主であります。「地とそれに充つる物は皆エホバの有なり」(イザヤ書四十二章五節。詩篇廿四篇一節)。神は地球を人間の爲に、人間を地球の爲に創造されました、(イザヤ書四十五章十二、十八節)。神は初めに先づ地を創造し、然る後に「エホバ神士の塵をもて人を造り、生氣をその鼻に吹き入れ給へり。人即ち生物(生靈……は曲譯なり)となりぬ」(創世記二章七節)と記されてあります。神が人間に生命を與へられたる方法は之等の言の中に簡明に示されてあります。神は人間に不滅の靈魂を與へられたとは別に記してありません。即ち

神は一個の生物、呼吸する者、有情の者を創造されたのでありまして、之が即ち靈魂と曲譯されてゐる處の生物そのものであります。之に一致してヨブは斯く記述してゐます、「エホバは與へ、エホバは取り給ふなり。エホバの御名は讃むべきかな」(ヨブ記一章廿一節)。モーセも之に一致して、神は人を塵に還らしめ給ふと示してゐます。然らば何故に神は人間に一度與へたる處の地上的生命を取り去り給ふたのでありませうか。

不從

神の律法は行爲の元則でありまして、義しき事を爲すと共に、惡しき事を爲す者に對して刑罰を準備し置くものであります。刑罰の制定と其の勵行方法を具備しない法律は絶對無効であります。其の違法行爲の大小を問はず罪は即ち罪であります。律法が公平なるものである以上、その刑罰は豫告されある通りに勵行されなければなりません。神は先づエデンと名附けられたる美しい園を設けて其處に人間を置き、之の監理者とされました。之は神の園でありまして、人間に屬する園ではありません。此の故に神は其處に置きし人間の行動を支配する爲に一の律法即ち規則を制定するの正當なる權威を有してゐられました。故に斯く記されてあります、「エホバ神その人に命じて言ひ給ひけるは、園の各種の樹の果は汝意のままに食ふ事を得、然れど善惡を知るの樹は汝其の果を食ふべからず、汝之を食ふ日に

は必ず死ぬべければなり(創世記二章十六、十七節)。
 神は人間が生命を持続せんが爲には、己が創造者の律法に全く服従するの必要なるを此の律法によつて示されたのであります。神の律法を故意に犯すと云ふ事は即ち人間から生存権が剝奪されると云ふ事を意味してゐます。神は人間をして其の律法を守る爲に甚大なる努力は別になさしめられなかつたのであります。唯或る事を爲すを禁じられただけであります。此の事は極めて些細な事でありまして、アダムは其の命ぜられた事を容易に守ることが出来た筈でした。然し彼の示した意識的の不従順はその生命の賜物に對する彼の感謝の缺如せる事と生命の大授與者に在す神に對する愛と感謝の缺乏してゐる事を明白に立證しました。若しアダムが神の律法を無視して禁斷の果を食して尙ほ刑罰を免がれるとするならば、彼は何等の刑罰を受くる事なくして如何なる惡事をも行ひ得る譯となりません。若しアダムが神を愛してゐたならば彼は神の律法を犯すと云ふが事すらも其の念頭に思ひ浮べなかつた筈であります。アダムは其の行爲によつて己が極めて我利的である事を充分に立證しました。彼は神の承認を受くるよりも寧ろ神の禁じられし所のものを得んと願つたのであります。彼は常に神に對して意識的の不従順行爲をなしたるのみに止らずして、却て其の責任を己が妻に轉嫁し、惹いては彼女を妻として與へし神エホバを批難せんとするの行爲すら示すに至つたので

あります。
 之等の諸種の理由に超えて最も重要な理由は、即ち神はその律法を示して、之を意識的に犯す者に對して刑罰が執行さるべしと聲明されたる點であります。神の御言は絶對不變であります。エホバは完全なる言行一致の神であります。若し神が律法を制定して、之に違反する者に刑罰を附する旨を聲明したる後に、故意の違犯者に對してその既に聲明せる刑罰を執行する事を拒絶し、又は失敗さるゝならばそれは隙かに矛盾であり、言行不一致であります。神がアダムの上に律法の制定しある所を勵行されると云ふ事は此の場合彼に與へられぬ生命を彼から沒收剝奪さるゝ事を意味します。彼の生存権はその授與者なるエホバに對してアダムが服従するといふ點のみに懸つてゐます。その生命の剝奪は即ちアダムの側に於ける不従順の故によるものであります。此の故に神は律法に制定しある處の刑罰を彼の上に宣告されました。神の宣告の御言は明示して、アダムは土の塵より取りてそれに生命が與へられたる者であるから、今、彼の生命は沒收されて彼は土の塵に還元しなければならぬと告げてゐます。(創世記三章十七、十九節)。
 神の判決の執行の期間は約九百三十年續きました。此の判決が下された時にアダムの上から生存権が沒收されました。斯くしてアダムはエデンに於ける神の園から追放され、外部の

不完全なる土壤の中から不完全なる食物を漁り食つて病氣となり、遂に九百三十年の終ると共に彼は死んで了ひました。此の死の判決の執行期間中にアダムの子等が生れ出でました。神はアダムに對し其の生命を子孫に移すの權能を與へられましたが、アダムが此の權能を行使して己が子を生む以前に彼の上から生存權が沒收されて了つたので、彼は當然生存權を子孫に傳へる事が不可能となつたのであります。アダム自身が死の宣告下に在る罪人である以上、彼の子孫も當然の結果として皆罪人として生れ出でたのであります。此の元則に就て神は預言者を通じて斯く示し置かれます。「視よ、我は邪曲の中に生れ、罪にありて我が母われを姪みたりき」(詩篇五十一篇五節)。

此の故に人間の生命は合法的に正しく彼の上から取り去られたのであります。従つて人間は皆生存權なくして生れ出でました。人間は皆神の默許によつて地上に僅かの生命を有し得る事となりました。若し此の人間が永久の生命とその權を有する事とならずならば、之に對して必要なる準備を爲し得る者は神のみであります。神がモーセをして人間に關し「汝等歸れ」と記さしめられし事は即ち神が之に對する準備を爲し給ふ事を明かに立證してゐます。ヨブは「エホバは與へ、エホバは取り給ふなり。エホバの聖名は讃むべきかな」と言つた後に又斯う申しました。「人若し死なばまた生きんや。我は我がいくさの諸日の間望み居りて

我が變更の來るを待たん。汝我を呼び給はん。而して我應へん。汝必ず汝の手の作を顧み給はん」(ヨブ記十四章十四、十五節)。之も亦神の言の一部である以上、神が人間を生命に復興せんとすの御目的を有してゐられる事を明かに立證してゐるのであります。

過去幾千年間の永きに亘つて死は全人類を支配してゐました。此の地上に生れ出でたる者の大多數は今彼等の墓にあります。死は人間の敵であります。何故なれば死は生命の正反對であるからであります。死の來る時に生命は止みます。死の墓場に入つた者は皆絶對無意識の状態に落ちて行つたのであります。故に聖書は斯く明示してゐます。「生ける者は其の死なん事を知る。然ど死ぬる者は何事をも知らず、また應報を受くる事も重ねてあらず、その記憶えらるゝ事も遂に忘れらるゝに至る。凡て汝の手に堪ふることは力を盡して之を爲せ、そは汝の行かんところの墓(陰府……は曲謬なり)には工作も計謀も知識も智慧もあることなればなり」(傳道書九章五、十節)。

此の故に墓に入つた者は皆敵地即ち死の状態に行つたのであります。而して神がその預言者を通じて示し置かれし隱語は今、人々の上に来れる神の光輝によつて諒解さるゝ時となりました。之ぞ即ち神が人間に復興の祝福を與へられる事を明かに立證してゐるものであります。隱語的方法で斯く告げられてあります。「エホバ言ひ給ふ、汝の聲を禁めて哭くこと勿れ

汝の目を禁めて涙を流すこと勿れ、汝の工に報あるべし。彼等は其の敵の地より歸らんとエホバ言ひ給ふ。汝の後の日に望あり、子兒等その境に歸らんとエホバ言ひ給ふ』(エレミヤ記卅一章十六、十七節)。之即ち死者が歸り來りて以前の狀態に復興するゝ事を明白に立證してゐるのであります。

神は其の憐憫と御慈愛を示して復興の機會を萬人に對し一樣に與へられるのであります。此の復興が生命を人間に復歸するゝを意味してゐる事は一點疑ひなき所でありまして、之は神がその預言者を通じて示されたる此の御言に見るも明白であります、「然ど惡人若しその凡て行ひし所の惡を離れ、我が諸の法度を守り、律法と公義を行ひなば必ず生きん、死なざるべし』(エゼキエル書十八章廿一節)。「即ち惡人質物を歸し、その奪ひしものを還し、惡をなさずして生命の憲法に歩みなば必ず生きん、死なざるべし』(エゼキエル書卅三章十五節)。

義務

被造物の方から神に對して如何なる義務をも負はず事は出來ません。然し神は御自身に於て爲さんとする事に就て自ら義務を負ひ給ふのであります。之を換言すると、神が一つの規則を造り、約束をなされた時に神はその規則若しくは約束に準據して自ら義務を負はれるのであります。神がイスラエル人に與へられた律法は、賠償即ち回復の行爲は正義執行の方

法である旨を明示してゐます。賠償即ち回復は取り去られた事物に對する同等同額の價を要求するにあります。若し神が愛を示し、人間の復興即ち回復の「實費」を備へ、之によつて人間を生命及びそれに伴ふ諸々の祝福に回復し、復興するの約束をなさるとするならば神は之によつて自ら義務を負ふ事となります。神が或る事を爲さんと約束される時に神は其の約束を履行すべき義務を自ら負ひ給ふのであります。神は人間を死と墓より贖ひ戻すに必要なる贖價を備へんと約束されました。神はその預言者を通じて斯く示されます、「我かれ等を墓(陰府……は曲譯なり)の手より贖はん。我かれ等を死より贖はん。死よ、汝の疫は何處にあるか、墓(陰府……は曲譯なり)よ、汝の災禍は何處にあるか』(ホセア書十三章十三節)。

人間を死と墓の力より贖ひ、買ひ戻して、死と墓を共に滅ほし盡さんと此の御約束は明かに神が生命に回復するゝ機會を人間に與へらるゝ事を示してゐるのであります。之即ち、人間の切に望む所の生命が復興の祝福を通じて來ることを意味して居ます。之は又同時に、地球は完全なる人間の住所であつて、人間の未來の住所も矢張り此の地球である事を確實に示してゐるのであります。如何なる「人」も天に行く事は不可能であります。若し人が天に行かんとするならば其人は先づ靈者に變化しなければなりません。

神が人間を死より贖ひ戻すと告げられた此の御約束は、同時に人間を生命に復興するの仕

事が一の贖ひ主の役目遂行によつて實現する事を示してゐます。之は即ち又、神が自ら善しと視給ふ時と方法とによつて此の贖ひ主たる者を備へ、之によつて人間を生命に復興するに必要な價即ち贖價を備へらるゝ事を明示してゐます。此の贖價を備へる事によつて、神は生命の復興に對する機會を人間の前に開くべき義務を自ら負はるゝ事となります。

之と共にエホバによつてなされし此の御約束は、今死の墓場にある所の數百億の人間が死より目覺めさせられ、若し彼等が神の示し給ふ所に服従するならば必ず復興の祝福の特權を許される事を明かに立證して居ります。神は人類の爲に贖價を備へる事によつて生命への復興を人類に許すべしとの御約束を立てられました。信仰を有する者は神の御約束に信賴して今貧しくして苦惱しつゝある人類が此の窮乏と死の苦惱下より解放され、復興の方法により永久の生命を得る機會を與へられるその幸福の時を歡び期待するのであります。

神の筆記者として奉仕したる預言者によつて記されたる聖書は普通へブル人（猶太人）の聖書と呼ばれてゐます。之は又「舊約聖書」とも稱されてゐます。此の聖書の中には人間に生命の復興が與へられる事を立證する多くの證據があります。神はその預言者等の口を通じ隠語若くは預言の形式を以て生命の復興の祝福を人間に與ふべき旨を示して置かれました。

地

大創造者エホバは此の言を預言者イザヤをして記さしめられました。「我地を創造りて其上に人を創造せり。我自らの手をもて天をのべ、其の萬象を定めたり。エホバは天を創造し給へる者にして即ち神なり。また地をも造り成して之を堅くし、徒然に之を創造し給はず、これを人の住所に創造り給へり。エホバ斯く宣給ふ、我はエホバなり、我の外に神あることなし」（イザヤ書四十五章十二、十八節）。

「住所」とは永久に住む所でありませぬ。今日地球が未だ人間の眞の住所となつてゐない事は事實であります。今、人間が此の地上に寄る期間は甚だ短期間に過ぎませぬ。人間が千年も生きる事は今は不可能であります。以上の預言者の言が眞實でありとするならば地球が人間の眞の住所となる時が必ず來なければなりません。若し然らずとするならば神の御約束は絶対に無効なるものとなります。神には無効と云ふ事が絶無であります。神が一つの事を成さんと志される時に其の事は必ず成立します。エホバは全能の神に在して其の御力は無限であります。（創世記十七章一節）。神は其の御約束通りに必ず實行されます。（イザヤ書四十六章十一節）。神が地球を人間の住所とすると示されたる以上、此の御目的を實行に移す時が必ず到來しなければなりません。之は即ち人間が生命に復興される時に於てのみ可能であります。アダムが死の宣告を受けた時に神は彼に示して、地は彼の爲に呪はる（未完成を意味す）べ

しと告げられました。(創世記三章十七節)。何故にそれはアダムの爲にでありませうか。何故なれば彼が食物を漁る爲に勞働しなければならぬからであります。苦みつゝ死に行く人間にとつて勞働は大なる恩恵であります。若し人間が怠惰にして毎日何の仕事もなくボンヤリとしてゐるならばそれは彼にとつて甚大なる損失となります。エデンに於ける神の園のみが眞の樂園でありました。地上に於ける其の他の如何なる部分も樂園ではなかつたのであります。神は人間の利益の爲に彼を完全なる場所より放逐されました。爾來幾千年間人間は己がパンを得る爲に荆棘と薊と戦ひつゝ劇しき勞働をして來なければならなかつたのであります。エデンに於ては斯くの如き必要はありませんでした。何故なれば其處では人間の爲に必要なものを充分に地が生産したからであります。エデンが完全なる人間の住所として完全なる場所であり、幸福な所であつたと云ふ此の事實は、即ち復興の時に於て神が全地を美はしくして榮光に満ちたる場所とされると云ふ事を確實に立證してゐます。

過去幾千年間に亘り地上は漸次改善されて來ました。復興事業が全地を全く支配する時に沙漠は皆番紅の如くに咲き輝くのであります。神は全地を榮ある所となさんと約束されてゐます。之即ち完全なる人アダムが失つた所の全部を再び人類の爲に復興さるゝ事を明かに立證してゐるものであります。エホバは斯く云はれます、「我また我が足を置く所を貴くすべし」

(イザヤ書六十六章一節。六十章十三節)。神の代辯者としてモーセが示したる「人の子よ、汝ら歸れ」との聲明は即ち完全なる人間性と完全なる住所とに復歸せしむべく神が人間に向つて發せられた招待であります。

二千餘年以前、神はアブラハムの子孫を選び取つて、彼等を一の民族に編成されました。之即ち神が今日迄に恩恵を示されたる唯一の民族でありました。神は彼等が壓迫の故によつて苦しめられてゐた土地から彼等を導き出されました。神は彼等と一の契約を作り、その律法を彼等に與へられました。又神は彼等に代つて敵と戦ひ、彼等の爲に大なる恩恵を屢々示されました。然るに敵なるサタンの悪しき感化に陥つたイスラエル人(猶太人)は神との契約を破つて神より離反したのであります。神はその憐憫を示して彼等に斯く告げられました、「背ける子等よ、我に歸れ、我汝の逆遠を醫さん」(エレミヤ記三章廿二節)と。神は斯くの如く復興の御目的を啓示されました。神は永らくの間忍耐されました。然るに拘らずイスラエル人はその神との契約を無視して不信の行爲を續けました。彼等の惡が其の頂上に達したる時に神は預言者を通じて彼等に斯く宣告されました、「此の故に主エホバ斯く云ふ、汝等既にその罪を憶ひ起さしめて、汝等の愆著明になりたれば汝等の罪その諸の行爲に顯はる。汝ら既に憶ひ出ださるれば必ず手に執へらるべし。汝刺し透さるゝ者、罪人イスラエルの君主よ

汝の罪その終りを來らしめて汝の罪せらるゝ日至る。主エホバ斯く言ふ、暴徒を去り、冠冕を除き離せ、是は是ならざるべし。卑き者は高くせられ、高き者は卑くせられん。我顧覆す事をなし、顧覆す事をなし、顧覆す事をなさん。權威を持つべき者の來る時まで是はある事なし。彼に我これを與ふ「エゼキエル書廿一章廿四—廿七節」。

此の預言に示されある所に見るも、神は何日かはイスラエル人に復興の祝福を與へんとの御目的を有してゐられる事が明かであります。神がイスラエル人を其の恩恵に回復せんと宣言されたる此の事實は亦死者が生命に復興さるゝ事を示す更に有力なる一證であります。全ての人間が何事にも勝して熱望する處は生命であります。此の故に猶太人と異邦人とを問はず、人類は皆神の言の知識を探り、生命と無窮の歡喜に入るの道を求めるのであります。人間は神の御手に作られし被造物であります。神は人間を完全なる者として創造されました。今、人類の不完全なるは人間が神より離れ去つた結果に因るものであります。此の離反の原因は即ち不從順でありました。罪の爲に人間をして神より離反せしめたる此の事は人間から生命を剝奪する結果となりました。神の恩恵に全く復興されると云ふ事は即ち人間に對する生命の復興を意味します。此の故にモーセの祈禱（詩篇九十篇）は神の恩恵が人間に復歸するを告げる預言でありまして、我等の神エホバの美は我等の上に在り、神は其の御手の

業を己が民の上に必ず確立されるのであります。モーセの祈禱に對する答と其の祈願の成就に就ては全人類の等しく熱心に知らんとする所であります。神の選民としての猶太人が先づこれに大なる興味を繋ぎます。而して後異邦人即ち全地の諸國諸民に及ぶのであります。若し猶太人の復興さるべき事を聖書が明かに立證するならば、此の復興の祝福は異邦人全部にも擴大される事が確實であります。此の故に猶太人問題は全人類に對して最も深甚なる興味を與へる譯であります」。

第二章 イスラエル人

イスラエル人即ち猶太人はパレスチナの土地に甚大なる愛着を有してゐる。數千年間に亘つて此の土地は彼等の先祖たちの土地であつた。彼等は此の土地が彼等の手に全く回復されん事を願ひ求めてゐる。パレスチナの土地を完全に所有し得る正當なる權利は猶太人に屬してゐるであらうか。猶太人はパレスチナの土地の所有權を回收し、其處に永久の住所を築いて平和の中に住むに至るであらうか。

若し之に對する確實なる證據が提示されて、如上の諸問題が肯定されるならば、それは眞の猶太人たる者の心に慰安を與ふる筈である。之は單なる慰めのみには止まらずして、猶太人の間に大なる熱心を惹き起し、パレスチナの所有と再建に向つて非常なる奮發を起さしむる

筈である。又番に猶太人のみに止まらずして、異邦人（猶太人以外の諸國民）もパレスチナの再建に就て甚大なる興味を有するに至るべく、何故なれば此の事の成就する時が來ると云ふ事は即ち全世界の問題に大轉換を招來する事を意味するからである。我等は今、此處に確實なる諸實證を提示して一般の注意を喚起せんとする者である。

土地

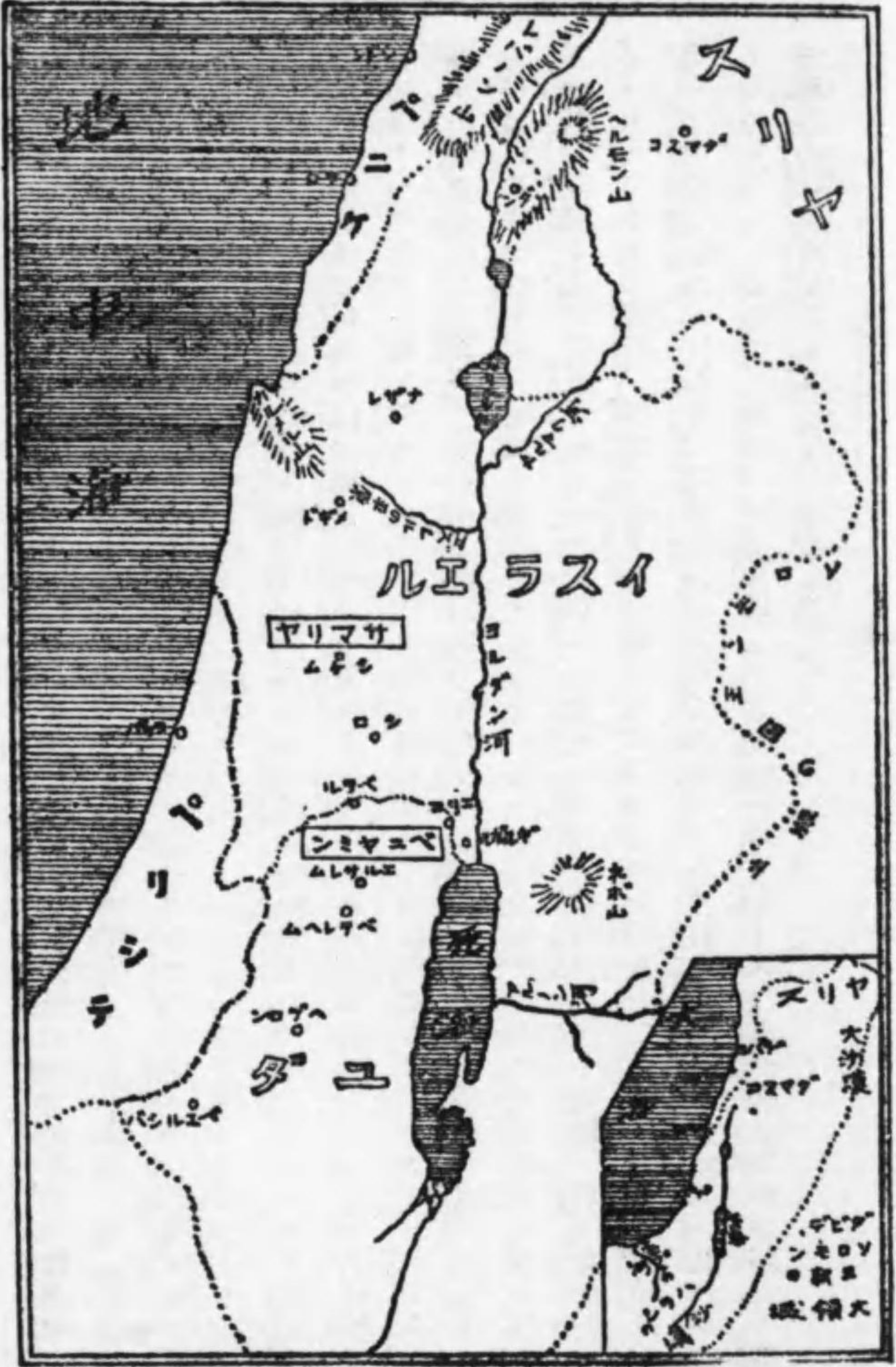
我等が今研究せんとする處のパレスチナの土地は「聖地」として知られたる處の地上の小面積である。之は「聖地」と呼ばれる。何故なれば之は人類の歴史に於ける最も重要な出來事の舞臺として神エホバが特に撰定された所であるからである。神はモーセを通じてイスラエル人に律法を與へられし時に、此の土地に就て斯く示された「地を賣るには限りなく賣るべからず。地は我が有なればなり」（レビ記廿五章廿三節）。此の地は斯くの如くエホバによつて特に撰定されたる土地であるが故に當然「聖地」と呼ばれてゐる（セカリヤ書二章十二節）。

此の土地に與へられたる本來の名はカナンである。之ぞ即ち神がアブラハムに與へんと約束されたる土地であつた。イサク・リーサー博士譯の舊約書によると、此のパレスチナの土地の名は出埃及記十五章十四節に始めて現はれてゐる。之即ち此の土地が當時ペリシテ人の

住所であつた事を示してゐるのである。舊約書中には此の土地がパレスチナの名で數ヶ所に現はれてゐるが（欽定譯出埃及記十五章十四節。イザヤ書十四章廿九、卅一節を參照せよ。尙ほ日本譯及び英語改譯書は共に「ペリシテ人の地」となり居れり）之はヘブル語の「ベリシテ人」より轉換し來れるものである。

本來ベリシテ人の土地は地中海の岸に沿ふたる細長い土地である。埃及とベニケ及び北方諸國とを連絡する街道が此の細長い土地を貫通して走つてゐる。此のパレスチナの名は其の後に至り内地の方に漸次擴大されて猶太人の全地に適用さるゝ様になり、ヨルダン河の東西兩岸一帯を此の名で總稱するに至つた。而して今、此のパレスチナの名稱は一般に「聖地」と呼ばれる處の地上の一面積に適用さるゝこととなつたのである。ダビデ及びソロモンの兩王の統治期間を通じて此のパレスチナ即ち「聖地」は南方は埃及の河と荒野、北と東はレバノンとユフラテの大河、西方は地中海に盡くる全部の土地を包含してゐて、此の總面積は十萬平方哩以上となつてゐる。荒廢に歸する以前の此の土地は非常に豊沃であつて、數百萬の人口を抱容してゐるのである。一旦荒廢したる此の土地も頓て再び豊沃の土地に復歸して數千萬の人口を收容する事となつてゐる。

人



パレスチナ—約束の土地

パレスチナの土地を要求して其處に己が住所を再建せんと欲する者は猶太人である。其處で起る問題は、然らば猶太人とは抑々誰か。

ヤコブはアブラハム（信仰の人と呼ばれし人）の孫であつた。ヤコブは神がアブラハムに與へられた約束に基いてその家督の權を所有する者となつた。神は或る理由の爲にヤコブの名をイスラエルと變更せしめられた、（創世記卅二章廿八節）。ヤコブ（其の時は既にイスラエル）は其の臨終の枕邊に十二人の子等を召し集めて未來に起きんとする事に就て預言した。此の時よりイスラエルの民が始まつたのである、『是等はイスラエルの十二の支派なり。斯くその父彼等に語り、彼等を祝せり。即ち其の祝すべき所に從ひて彼等諸人を祝せり』（創世記四十九章廿八節）。

ユダはヤコブの子十二人の中の一人であつて、彼はユダの支派の首となつた。ヤコブ即ちイスラエルの子孫の全部は其の時より後イスラエル人の名で呼ばれる事となつたが、然しイスラエルの子孫の全部が猶太人と呼ばれる譯ではない。イスラエル即ちヤコブの死後、彼の子孫全部の宗教的希望は一にユダの支派の上に懸つてゐた、何故なればヤコブは其の臨終に際し、ユダの支派に關して特殊の預言をなしたからである。即ち云ふ『ユダよ、汝は兄弟の讚むる者なり。汝の手は汝の敵の頸を抑へん。汝の父の子等汝の前に鞠まん。ユダは獅子の



子の如し。我が子よ、汝は所掠物を裂きて歸り上る、彼は牡獅子の如く伏し、牝獅子の如く躡まる、誰か之を起すことをせん。杖（支配權）ユダを離れず、法を立つる者其の足の間を離るゝ事なくしてシロの來る時にまで及ばん。彼に諸々の民從ふべし（創世記四十九章八―十節）此處に即ち、人々を召し集めて彼等の爲に律法を立つる者がユダの支派の子孫の中より出て來るを示す明確なる聲明がある。ヤコブは神の聖き人の一人であつた、何故なれば彼は神を信じ、神に服従したからである。ヤコブをして此の預言を語らしめたる力は即ち神の力である。故に此の言は即ち神エホバの御言である。神エホバの實在と、エホバが唯一の眞の神に在して、熱心に神に求むる者に對して報賞を賜ふ神である事を信ぜざる限り何人も神を喜ばし奉る事は出來ない。

此の故に猶太人とは即ちヤコブ（イスラエル）の肉の子孫の一人にしてヤコブがユダに關して示したる言に信仰を有する者を謂ふのである。斯かる者は神が古代の聖き人々である預言者等を通じてイスラエル人に示された御約束の全部に信仰を有する者である。

假令其の人がイスラエルの肉の子孫の一人であり、又ユダの支派に屬してゐるとするもそれだけでは眞に一個の猶太人であると云ふ事は出來ぬ。若し彼が、萬民はユダの子孫の「一人」の下に集められると云ふ神の御約束を無視するならば、彼は己が故國と絶縁したる者で

あつて、其の市民たるの關係を自ら斷絶したる譯である。若し英國人が米國に移住し來りて英國王に對する己が關係を排棄して米國に歸化するならば其の人は最早英國人ではなくなるのである。之と同一の理由に基きて、假令其の人がヤコブの肉の子孫の一人であり、ユダの支派の一人であるとするも若し其の人が神の御約束に對する信仰を排棄するならば、其の人は猶太人たるの資格を當然消滅する譯である。イスラエルの肉の子孫であり乍ら神とその御言に信仰を有せざる者は甚だ多いのである。之等の者は聖書の示す意味に於ける猶太人ではない。

イスラエル人の中にも異邦人の中に在るが如き教職者の級がある。之等の殆んきは神の御言に眞の信仰を有してゐない。何故なれば彼等は己が人間的智慧に誇り慢じ、自らを養ひて民を養はず、神の言を排棄してゐるからであつて、之正に預言者エゼキエルを通じて豫示される所の者に該當するのである、（エゼキエル書卅四章一―十節）。又イスラエルの肉の子孫の中にはエホバを唯一の眞の活ける神なりと信じ、モーセや其の他の聖き預言者等は此の全能の神の指導下に於て聖書を記録したと信じてゐる人々の級がある。之等の人々は正規の意味から云つて「正統派」の猶太人と稱する事が出来る。彼等の信條に曰く、

「我は眞の完全なる信仰を以て以下の各條を信ず。（一）神は創造者にして統治者たり、萬物を造れる

者にして總ての事を定めし者なる事、(二)創造者は唯一にして彼のみ我等の神であり、今後も永久に神なる事、(三)此の創造者は我等の肉眼に映ずる有形の者に非ず、故に彼に比すべき形容は絶無なる事、(四)神より以前に存在せし者は絶無にして、彼は永遠に存在する事、(五)此の神のみ崇拜さるべきものにして他には崇拜すべき者の絶無なる事、(六)預言者の言の全部は眞實なる事、(七)モーセの預言は眞實にして、彼は彼の前と後に存在せる全部の智者の中にて最も大なる者なる事、(八)今日我等の手にある律法の全部は我等の君主なるモーセを通じて神より示されたるものなる事、(九)之等の律法は絶對不變にして之等以外には神より何等の律法を與へられざる事、(十)神は預言者の示せる如く「エホバは凡て彼等の心を作り、その爲す所を悉くかんがみ給ふ」者なる事、(十一)神は律法を守る者を賞し、之を破る者を罰し給ふ事、(十二)メシヤは來るべく、その來る事の遲延すとも尙ほ「我は彼の來るまで待たん」、(十三)神の自ら善しと見給ふ時に死者全部は生命に復興さるべく、此の大創造者なる神の聖名のみ永遠に崇められ、記憶され、祝福さるべし、アーメン。

ヤコブの肉の子孫にして斯くの如く神と其の御言に信仰を有する者こそ以上に示したる如くに眞の猶太人である。而して彼等は今、神の御言の預言を詳細に研究する事によつて慰めを受けるのである。

「預言」とは事件の未だ發生せざる以前にそれを預告する事である。預言はそれが成就した

る後か、若くは成就の途上に非ざる限る諒解する事は不可能である。聖書中に記されある預言は古代の聖き人々がエホバの見えざる靈力に導かれて記述したるものである。モーセ、サムエル、ダビデ、イザヤ、エゼキエル、ダニエル其他之等の人々は預言を記す爲に神エホバによつて使用されたる者であつて、其等の預言はそれが成就する時に地上にある人々の福利の爲に記し置かれたるものである。預言が成就したる時に、我等はその成就したる事實を「實證」と呼ぶ。

一例を擧げて見ると、ダニエルは末の日に於て交通が頻繁となり、知識が増進すると預言した(ダニエル書十二章四節)。今我等は高速度交通機關の發達と、幾多發明による知識の増進とを眼前に見るが之等は此の預言の成就したる事を示す處の實證である。

我等が之より提示せんとする結論を支持するものは即ち古代の聖き人々が聖書中に記し置きたる預言と、其の成就したるを示す幾多の實證である。

ソロモンの死後、イスラエルの十二の支派中の十の支派が叛逆し、バレスチナの北部地方に於てヤラベアムを王として一の王國を建設した。之等は普通「イスラエルの家」と呼ばれ一方ソロモンの子レハベアムに忠義なる者として残りたる支派は「ユダの家」と呼ばれた。北の國は先づアツスリヤ人の手に陥ち、後日ユダの家もバビロンに囚はれた。荒廢期間七十

年の終ると共にベルシャの王クロスは神エホバの命を受けて以下の如き詔命を發した、「天の神エホバ地上の諸國を我に賜へり。其の家をユダのエルサレムに建つる事を我に命す。凡そ汝らの申若し其の民たる者あらば、其の神の助けを得てユダのエルサレムに上り行き、エルサレムなるイスラエルの神エホバの家を建つる事をせよ。彼は神に在しませり。是にユダとベニヤミンの宗家の長、祭司レビ人など凡て神にその心を感動せられし者どもエルサレムなるエホバの家を建てんとて起おこれり」(エズラ書一章二、三、五節)。

斯くしてヤコブの肉の子孫にして神と其の御約束に信仰を有する者は皆エルサレムに歸還する事によつて信仰を實行した。爾後之等の者はイスラエル人の名で總稱さるゝに至つた。諸々の支派から歸還した者も多かつたが、その大部分はユダの支派からであつた。此の故に彼等は正當なる意味に於て猶太人と呼ばれる。何故なれば彼等はユダの支派に就て神が示されし預言の約束に彼等の信仰を繋ぐからである。

或る人々は誤説を立て、英國や米國を形成するアングロサクソン人種は此の時エルサレムに歸還しなかつたイスラエルの十の支派の子孫であつて、神の恩恵を受けつゝある人々であると主張してゐる。斯かる説は聖書より何等の支持を受けず、又事實無根の想像談議に過ぎない。クロスの勅命を受けても尙ほエルサレムに歸還せざりし者等は己が信仰の缺如して

ゐる事を自ら立證して、神の民たるの資格を自然的に喪失したのである。アングロサクソン人種は神の御約束に對して何等信仰を有せず、特にシロの統治下に萬民が集められると云ふ約束を少しも信じてゐない。のみならず、假りに十の支派の大部分がアングロサクソン諸國の民衆を形成してゐるにしても、彼等は神の民と呼ばれる譯にはいかない、何故なれば彼等は神とその御言の御約束に信仰を有せずしてその民から離反したる者であるからである。神の御約束を排棄したる十の支派の全部は自動的に異邦人となつて了つたのである。

イスラエルの家なる名稱は初めに十の支派の上に特に用ひられたのであるが、後にはバビロンの囚はれからエルサレムに歸還したる者全部の上に用ひられる事となつた。又ユダの家なる名稱はユダの肉の子孫にして其の支派に就て特に示されたる神の御約束の上に信仰を固く持する者の上に用ひられてゐる。イスラエルの全家に來る祝福がユダの支派より出づる裔を通じて來る事が明かなる時、此の救ひ主に關してなされたる神の御約束を信するイスラエル人の全部のみが猶太人の名を以て呼ばれるのである。

聖書は明示して此の救は猶太人の救である事を教へてゐる。何故なればシロと呼ばれるメシヤの出で來るはユダの支派からであつて、彼は地上全人類に對する救ひ主たるべく、其の救を先づ初めに猶太人に、次で異邦人全部に及ぼすからである。信仰なくして神を喜ばし奉

る事は不可能である。エホバと其の御言に信仰を有せずして如何なる者も其の御手より祝福を受ける事は絶対不可能である。

約 東

神は地の創造者に在す。地とそれに充つる物は皆エホバの有なり(詩篇廿四篇一節)。神はパレスチナを猶太人に回復せんと約束された。パレスチナの再建は今既に開始されて、目下進展中である。之ぞ即ちエホバの預言の成就として爲されつゝある事が確かである。此の事實は實に我等が注意を拂はなければならぬ事であるのみならず、苟くもエホバを神なりと信する者は皆最も深厚なる興味を有する所である。神を信じてゐた預言者等を通じて語り示し給ひし者は即ち此の絶大の神エホバであつた。そして今、パレスチナに關する其の御言は着々と成就の途上にある。之等の預言の成就する今日此の時に、地上に生れ合せし者の特權の如何に大なるものなるかは到底筆舌のよく盡し得る所ではない。頓て猶太人は世界的重大問題の中心となるべく、而して猶太人の歴史は地上に在る如何なる小説や物語にも遙かに勝つて妙に奇しきものとなるのである。

神の御約束は人間が勝手に想像し、考へるやうには都合よく成就しない。此の故に多くの人は神の御約束に對する信仰を失つて了ふのである。人々よ、全能の神エホバの御約束は

その御豫定の時至るに及びて必ず成就實現すべき事を確と心に刻みつけ置け。神エホバは其の預言者を通じて斯く示し給ふ、

「我エホバは變らざる者なり……我に歸れ、我また汝等に歸らん。萬軍のエホバ之を言ふ」(マラキ書三章六、七節)。「我は神なり、我の外に神なし。我が謀許は必ず立つと言ひ、すべて我が喜ぶ事をなさんと言へり……我この事を語りたれば必ず來らすべし。我この事を謀りたれば必ず成すべし」(イザヤ書四一六章九一十一節)。「如此我が口より出づる言も空しくは我に歸らず、我が喜ぶ所を成し、我が命じ遣りし事を果さん」(イザヤ書五十五章十一節)。

地上諸國民の中で猶太人は神エホバと其御言に信仰を保つべく最大の理由を有してゐる。猶太人の如くに神エホバより恵まれたる國民は他に絶無である。神はその聖名を宣揚するに必要なる機會を彼等に與へられた。神はその聖名を崇め尊くする者を又尊き者となし給ふ。神は今、全地に其の聖き御名を成されんとす。全地の人々よ、特に猶太人たる者よ、汝等目覺めて奮ひ立て。

カルデアのウルの地にテラと名附くる人が其の子アブラムと住んでゐた。テラは子のアブラムと嫁サライとを連れてハランに旅立ちした。アブラムが七十五歳になつてハランの土地に住んで居た時に神は彼に向つて斯う告げられた、

「爰にエホバ、アブラムに言ひ給ひけるは、汝の國を出で、汝の親族に別れ、汝の父の家を離れて我が汝に示さん其の地に至れ。我汝を大なる國民と成し、汝を祝み、汝の名を大ならしめん。汝は福祉の基となるべし。我は汝を祝する者を祝し、汝を誼ふ者を誼はん。天下の諸々の宗族汝によりて福祉を得んと」(創世記十二章一―三節)。

此の時は人間創造の時から未だ餘り多くの時代が過ぎてゐなかつた。後日モーセは、神が最初の人アダムを完全な人間として創造し、地上に人類を繁殖するの權能を彼に與へられた事を記録した。アブラムは其の祖父等から聞いて、アダムが完全なる人間として創造された事、神の律法に違犯して死の宣告を受けた事等に就て學び知つたに相違ない。而して又アブラムはアダムの全子孫が此の死の宣告下に在りしアダムから生れ出でし事を知り、ダビデの證言の如く人類は皆罪に生れ、邪曲の中に孕まれたる事を諒解したのである。アダムは人間は皆死につゝある事、そして其の死は人祖アダムの罪の結果なるを知ると共に、神が何れかの時に於て、何等かの方法を用ひて人間を死より贖ひ出し、神の義しき律法に服従する者を完全なる状態に復興せんとすの神の御約束を諒解したに相違ない。それと同時にアブラムは己自身が何かの方法によつて此の人類祝福の仕事に密接なる關係ある事を悟り知つた、何故なれば神がさう彼に約束されたからである。アブラムは神を信じた、そして彼は神に喜ばる

る者とされた。後に神はアブラムに約束して彼に土地を與へ、彼を多くの國民の父となさんと告げられた。モーセは此の御約束を記録して云ふ、

「エホバ、アブラムに言ひ給ひけるは、汝の目を擧げて汝の居る處より西、東、北、南を瞻望め、凡そ汝が觀る所の地は我之を永く汝と汝の裔に與ふべし。我汝の裔を地の塵沙の如くなさん。若し人地の塵沙を數ふる事を得ば汝の裔も數へらるべし。汝起ちて縱横に其の地を行き巡るべし。我これを汝に與へん」(創世記十三章十四―十七節)。

神が此の約束をアブラムになされし時に彼には未だ嗣子が無かつた。然る時に神は異象の中にアブラムに現はれて斯く示された。

「天を望みて星を數へ得るかを見よと。又彼に言ひ給ひけるは、汝の裔(子孫……は誤譯なり)は斯くの如くなるべしと。アブラム、エホバを信ず、エホバこれを彼の義となし給へり」(創世記十五章五、六節)。

アブラムが神を信じて神に喜ばれし事を立證する證據が即ち此處にある。此の理由に基いて神を喜ばし奉らんとする猶太人は何れも神を信じなければならぬ事が瞭かである。神より祝福を受けんと望む者は何れも神の御言が眞實なる事を信じなければならぬ。然る後に神はアブラムの信仰を固く築かんが爲に彼と一の契約を作られた。即ち記さる、

「又彼に言ひ給ひけるは、我は此の地を汝に與へて之を有たしめんとて、汝をカルデヤのウルより導き出せるエホバなり。彼言ひけるは主エホバよ、我如何にして我が之を保つことを知るべきや。エホバ言ひ給ひけるは、三歳の牝牛と三歳の牝山羊と三歳の牡羊と山鳩及び雛き鴿を我が爲に取れと、彼乃ち是等を皆取りて之を中より割き、其の割きたるものを各々相對はしめて置けり。但し鳥は割かざりき。鷲鳥その屍體の上に下る時はアブラム之を驅ひ拂へり。斯くて日の没る頃、アブラム深く睡りしが、其の次に暗きを覺えて懼れたり。時にエホバ、アブラムに言ひ給ひけるは、汝確に知るべし。汝の子孫他人の國に旅人となりて其の人々に服事へん。彼等四百年の間之を惱まさん。又その服事へたる國民は我これを審判かん。その後彼等は大なる財寶を携へて出でん。汝は安然に汝の父祖の所に行かん。汝は還歸に達りて葬らるべし。四代に及びて彼等こゝに歸り來らん。そはアモリ人の惡未だ貫盈さればなりと。斯くて日の没りて黑暗となりし時、烟と火焰の出づる爐その切り割きたる物の間を通過れり。是の日にエホバ、アブラムと契約をなして言ひ給ひけるは、我この地を埃及の河より、彼の大河即ちユフラテ河まで汝の子孫に與ふ」(創世記十五章七—十八節)。

其の後に發生せる實證は、アブラムの子孫が永らく埃及の地にありて壓迫下に苦みたる後甚大なる財産を持ちて救ひ出されて再びカナンの土地に歸還するに至る神の預言の確實に成

就せるを立證してゐる。之等の事は皆確實に發生を見た。アブラムは神の此の御言に見て、彼は一度死して後に、豫定の時に死より甦らされて之等の御約束の全部を成就される事を諒解したに相違ない。又神がアブラムに與へんと約束されたる土地の境界が此處に明示されてゐる。

それより十五年後に神はアブラムの名をアブラハムと改稱された。此のアブラハムの名は「多くの國民の父」と云ふを意味す。此の時に神は彼に斯う告げられた。

「我汝と我が契約を立つ。汝は衆多の國民の父となるべし。汝の名を此の後アブラムと呼ぶべからず、汝の名をアブラハム(衆多の人の父)と呼ぶべし。そは我汝を衆多の國民の父となせばなり。我汝をして衆多の子孫を得せしめ、國々の民を汝より起さん。王等汝より出づべし、我わが契約を我と汝及び汝の後の世々の子孫との間に立て永遠の契約となし、汝及び汝の後の子孫の神となるべし。我汝と汝の後の子孫に此の汝が寄寓れる地即ちカナンの全地を與へて永久の産業となさん。而して我彼等の神となるべし。神またアブラハムに言ひ給ひけるは、然ば汝と汝の後の世々の子孫わが契約を守るべし。汝等の中の男子は皆割禮を受くべし、是は我と汝等及び汝の後の子孫の間の我が契約にして汝等の守るべきものなり」(創世記十七章四—十節)。

神が此の約束をアブラハムに與へられた時に彼には未だ子が無かつたが、彼は神が彼の爲に一人の嗣子を必ず備へ給ふ事を信じてゐた。神は斯く二十五年間に亘つて彼の信仰を試みたる後、彼が百歳になつた時にイサクが生れ出でた。神は屢々アブラハムの信仰に報賞を與へられた。之ぞすべての猶太人並びに、神は己に忠信なる者に必ず報賞を賜ふ方であると云ふ事を信する者に與へられある處の教訓である。

「信仰」とは神の言と聖旨に關する知識を得て、神の御約束に絶對信頼し、其の聖旨に己自身をして合致せしむる事を云ふ。此の故に人々は其の信仰を有する以前に先づ神の御言に關する知識を得なければならぬ事となる。今日地上に在る猶太人は皆エホバの御計畫に關する知識を得て之を知り、それに信頼するの必要を生じて來た。之が即ち信仰である。

其の後二十五年が又過ぎた。其の時に神はアブラハムの上に嚴しき試みを與へられた。アブラハムが其の子イサクを愛して、全人類に對する祝福の御約束が此のイサクを通じて來る事を信するには無論其處に充分の理由があつた譯である。神はアブラハムの信仰を試みんとて彼に命じ、イサクを携へてモリアの山に行き、其處にて彼を燔祭として獻げよと示された。アブラハムは神を絶對信頼するが故に何等躊躇する所なく、直ちに神命に従つた。彼は示された所に至り、其處にて祭壇を築き、イサクを縛りて其の上に横たへ、刀を執つて今や正

に己が愛する獨子を殺さんとした。

之ぞ即ちアブラハムの信仰に對する試みであつた。而して彼は雄々しく其の試みに直面した。神は此の時、其處で彼の信仰に報賞を與へられた。

「時にエホバの使者天より彼を呼びて、アブラハムよ、アブラハムよと云へり。彼言ふ、我此處に在り。使者云ひけるは汝の手を童子に按くるなかれ。又何をも彼に爲すべからず。汝の子即ち汝の獨子をも我が爲に惜まざれば、我今、汝が神を畏るゝを知ると。茲にアブラハム目を擧げて視れば、後に牡綿羊ありて其の角林叢に繋りたり。アブラハム即ち行きて其の牡綿羊を捕へ、之を其の子の代に燔祭として獻げたり。アブラハム其の處をエホバエレ（エホバ預備給はん）と名づく、是によりて今日も猶ほ人々山にエホバ預備へ給はんと云ふ。エホバの使者再び天よりアブラハムを呼びて言ひけるは、エホバ諭したまふ、我已を指して誓ふ汝この事をなし、汝の子即ち汝の獨子を惜まざりしに因りて、我大に汝を祝み、又大に汝の裔（子孫……は誤譯）を増して天の星の如く、濱の沙の如くならしむべし。汝の裔は其の敵の門を獲らん。又汝の裔によりて天下の民皆福祉を得べし。汝我が言に従ひたるによりてなり」と創世記廿二章十一—十八節。

神は單にその爲さんとする事をアブラハムに告げられたるのみに止まらず、其の約束の上

に誓まで加へて、アブラハムの裔を増して天の星の如く、濱の沙の如くになし此の裔を通じて地上全人類が祝福されるであらうと示されたのであつて、神はアブラハムの従順なりしを嘉して斯く約束されたのである。

アブラハムは百七十五歳の時に死んだ。神はアブラハムに土地を與へんと約束され、その約束の上に誓をすらかへられてゐる。然るに彼は生きてゐる間にその足を入るゝ寸尺の土地をも所有してゐなかつた。神の御約束は眞實ではなかつたのか。然らず。唯アブラハムがそれを嗣ぐべき時が未だ到らなかつたからである。神の御約束は確實である、故に何時かの未來に於て彼を死より甦らせ、その約束の土地を彼とその信仰を保つ子孫とに與へんとするのが即ち神の聖旨であつたのである。其の時は遂に到來したのであつて、我等は引き続き之より研究せんとするのである。斯くて猶太人は之によつて慰めを受ける事となる。

イサクはヤコブを生んだ。此のヤコブは神の豫定と、契約とによつて神がアブラハムに與へられし約束を保つ家督の權を繼承する者となつた、(創世記廿五章廿三、卅一、卅三節)。ヤコブはイスラエル十二の支派の先祖となりし十二人の父であつた。神はアブラハムに與へられたる約束をヤコブにも繰り返された、即ち記さる、

「エホバ其の上に立ちて言ひ給はく、我は汝の祖父アブラハムの神、イサクの神エホバなり

汝が臥すところの地は我之を汝と汝の子孫に與へん、汝の子孫は地の塵沙の如くなりて西、東、北、南に蔓がるべし。又天下の諸々の族、汝と汝の裔によりて祝福を得ん。また我汝と共にありて凡て汝が行く處にて汝を護り、汝を此の地に率き返るべし。我は我が汝に語りし事を行ふまで汝を離れざるなり」(創世記廿八章十三—十五節)。

ヤコブの愛子ヨセフは埃及に賣られ、其の地に於て大支配者となつた。後にヤコブとその子等は埃及に移住した。ヤコブの臨終が來た。此の時が即ちイスラエルの民の發端であつた。何故なればヤコブの名が神の命によつてイスラエルと變更されたからである。此の時にヤコブは神の靈導下に於て己が子十二人を枕頭に集めて彼等に關する預言をなした。此處で、アブラハムに對する約束は更に具體的なるものとなつた。神エホバは此の時に此の祝福がユダの裔を通じて來る事を特に示された。斯くして「救ひは猶太人より出づるが故なり」の記録は確實となつた。之即ちアブラハムの信仰を有して神の御約束に絶対信頼する者は己自身祝福を受けると共に、亦他に祝福を與ふる器として用ひられる事を明かに示してゐるのである。神の言がユダに關して斯く示されたのは即ち此の時であつた。「杖(支配權) ユダを離れず、法を立つる者その足の間を離るゝ事なくしてシロの來る時にまで及ばん、彼に諸々の民従ふべし」(創世記四十九章十節)。

「シロ」とは「静穩」と云ふを意味し、即ち平和、安然、幸福を意味してゐる。之即ちメシヤに與へらるべき稱號の一であつて、此のメシヤこそ神の代表者たるの權威をもつて人類に對する祝福の仕事を完成する處の者である。

此の預言に見るも、神がアブラハムに與へられし祝福の約束はメシヤの來る時に實現するものであつて、メシヤは約束に因るアブラハムの裔であつて、之はユダの支派を通じて來る事が明瞭である。然し此の約束の祝福が來る前に、猶太人は先づ長期間の試煉を受けなければならぬのであつて、此の試煉が最後に於て善き結果を彼等に與ふる事となり、之によつて煮

いては地上全人類に對しても善果を與ふる事となるのである。

猶太人は過去千數百年間に亘つて全く火の如き苦痛の試煉を受けたが、此の大苦難期間を通じて猶太人が善く己等を護り、他の人々より離れて特殊の位置を保ち續けて來た事は全く驚嘆すべきものである。全部の猶太人よ、雄々しかれ、而して今、神がアブラハム、イサク、ヤコブ及びイスラエルの全家に向つて預言者等を通じて示されし御約束の絶對確實にして、完全に成就實現すべきものなる事を確かに知れ。猶太人が之を悟り知るべき時は今既に近づき、彼等の受けし大苦難の試煉は彼等に向つて善果を必ず與ふべく、嘗に彼等猶太人のみならず、地上に在りてアブラハムの信仰を固く有つ所の全部にも善き物を與ふべし。



過越節

第三章 組織さる

ヤコブの子等は彼の死後も引き續き埃及に住んでゐた。ヨセフの生存中はイスラエル人は埃及人から好遇されてゐたが頓て形勢の一變する時が來た。

「ヨセフその兄弟等に言ひけるは、我は死なん。神必ず汝等を顧み、汝等を此の地より出して、そのアブラハム、イサク、ヤコブに誓ひし地に到らしめ給はんと。ヨセフは、神必ず汝等を顧め給はん、汝等我が骨を此處より携へ上るべしと言ひてイスラエルの子孫を誓はしむヨセフ百十歳にして死にたれば之にくすり塗りて櫃に收めて埃及に置けり」(創世記五十章廿四—廿六節)。



埃及に於けるイスラエル人の奴隸生活

今日全人類の壓迫さるゝ一模圖

「此處にヨセフの事を知らざる新しき王埃及に起りしが」(出埃及記一章八節)此の新しきパロ即ち埃及王はイスラエル人を虐待した。彼は彼等の乳兒を殺戮した。モーセが生れたが、神は奇蹟的に嬰兒モーセを助け護り、彼を王の家に於て成人せしめられた。モーセは父祖等に與へられし神の御約束を學び知ると共に己が兄弟等が迫害され、虐待されつゝあるを見て、自らパロの娘の子と呼ばれて此の強大なる埃及國で不義の榮華を樂むよりも寧ろ己が同胞と苦みを共にせん事を希つた。斯くして彼は埃及を捨て去り、神の聖旨を爲さん事を求めたのである。

埃及王の惡しき支配下に置かれしイスラエル人の苦痛は益々増し加はつた。神はモーセを召して斯く示された、

「我は汝の父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり……エホバ言ひ給ひけるは、我真に埃及に居る我が民の苦患を視、また彼等がその驅使者の故を以て號ぶところの聲を聞けり。我彼等の憂苦を知るなり。我降りて彼等を埃及人の手より救ひ出し、之を彼の地より導き上りて善き廣き地、乳と蜜との流るゝ地即ちカナン人、アモリ人、ベリジ人、エブス人の居る處に至らしめんとす。今イスラエルの子孫の號叫我に達る。我また埃及人が彼等を苦むるその暴虐を見たり。然ば來れ、我汝をパロに遣はし、汝をして我が民イスラエルの

子孫を埃及より導き出さしめん(出埃及記三章六—十節)。

神はモーセに語り、彼に埃及王パロの前に顯はれてイスラエル人の解放を要求せよと示された。アブラハム、イサク、ヤコブに向ひ「全能の神」の名を以て顯はられし神は今、始めてエホバの御名を以てモーセの前に顯はれて、斯く告げ給ふた。

「我また彼等(イスラエル人)と我が契約を立て、彼等が旅して寄り居たる國カナンの地を彼等に與ふ、我また埃及人が奴隸となせるイスラエルの子孫の呻吟を聞き、且つ我が契約を憶ひ出づ(出埃及記六章四、五節)。

パロはイスラエル人の上に重荷を益々増し加へた。神は埃及人の上に幾多の災禍を加へられた。然るにパロ王はイスラエル人を解放して行かしむる事を拒絶した。然る後に長子墜殺の災禍が埃及人の上に臨んだ。此の時に始めて過越の節が制定された。即ち神とイスラエル人との具體的の交渉が始まつたのは此の時からであつた。神はイスラエル人に示して、毎年一月の十日に疵なき牡の當歳の羔羊を執れと命じられた。その羔羊は同月の十四日まで守り置かれて其の日に之を屠り、其の血を彼等の住む家の門口の兩の柱と鴨居に塗り、羔羊その者は之を火に焼いて酔入れぬパンと苦菜を添へて食ひ盡し、家の者は何れも腰を引きからげて靴を穿き、杖を執る事となつてゐた。其の日の眞夜中、神の天使は埃及全地を行き巡りて

埃及に在る人間と獸類の長子たる者を悉く殺し盡くしたが、唯命ぜられたる通りに門口に血を塗り居たるイスラエル人と其の長子のみは救はれた。

イスラエルの子孫は神の此の命に服従して神の御約束に對する彼等の信仰を示し、斯くて彼等の長子は皆死の手より免るゝ事を得たのである。此の神は埃及人の長子たる者はパロ王のそれより最も卑しき僕の長子に至るまで之を盡殺された。其の時埃及及全地に甚大なる悲鳴、慟哭あり、王は早速イスラエル人を國內より追ひ出した。イスラエル人は埃及人の手から金銀財寶衣服類を借り受けた。其の時イスラエル即ちヤコブの子孫にして、徒歩にて紅海に進發せる者は六十萬以上と知られてゐる迄に繁殖してゐたのである。パロ王は長子を撃ち殺されし悶々の情に堪え切れずイスラエル人を撃滅すべく大軍を率ゐて殺到した。

モーセとアロンがパロ王の前に出で、イスラエル人を解放して去らしめよと要求した時にパロ王は言つた、「エホバは誰なれば我その聲に従ひてイスラエルを去らしむべき。我エホバを識らず、又イスラエルを去らしめじ」(出埃及記五章二節)。埃及人がイスラエル人を烈しく壓迫した時に神はモーセに告げられた、「我がパロと其の戰車と騎兵とによりて榮譽を得ん時埃及人は我がエホバなるを識らん」(出埃及記十四章十八節)。然る時に神はイスラエルの陣營の殿軍となり給ひ、雲の柱と火の柱とを以て彼等を掩護された。神はモーセをして其の手を

紅海の上に伸ばさしめ、強き東風を起して海を兩分され、兩側の巨大なる水壁の下に顯はれし陸地の上を歩みてイスラエル人は無事紅海を渡つた。埃及の軍勢がイスラエルを追撃して同じく紅海の底を渡らんとした時に大水壁は兩側から漲り落ち、彼等は鉛の如くに水底に吞まれて全滅して了つた。神は斯くの如くにして御自身がイスラエル人に對する神であり、強き楯であり、保護者である事を顯はし示されたのである。

彼等が無事に彼岸に達し得たる其の時に、モーセと民の全部はエホバに對する讚歌をうたつて歡び踊つた、「我が力、我が歌はエホバなり。彼は我が救拯となり給へり。彼は我が神なり。我これを頌美へん。彼は我が父の神なり。我これを崇めん。エホバは軍人にして其の名はエホバなり」(出埃及記十五章二、三節)。

神は今イスラエル人に信仰の訓練を與へ始められたのである。彼等が埃及人の手より奇蹟的に救ひ出されたる此の事實は彼等の神エホバに對する信仰を確立するに充分であつた。信仰と忠信は人間の學ぶべき最も困難なる教訓である。報賞と祝福は其の人の信仰の程度に従つて與へられるのである。

シナイ山に於て

イスラエル人は埃及人の手の下より救ひ出されて三ヶ月後にシナイの荒野に達し、シナイ

山の麓に天幕を張つた。神はモーセと語り、埃及に於てイスラエル人と神との間に作成されたる契約を批准し確立せんが爲に彼をシナイの山に召し上げられた。

「契約」とは二者以上の間に締結されし一種の嚴肅なる約束にして、双方共に熟慮の上、或る事を爲し、若しくは或る事を爲さざる旨を同意表明する方法である。シナイ山に於て批准されたる律法の契約に於て、神はイスラエル人の爲に或る事を爲し、又イスラエル人は神より提示されたる事の全部を實行せんと約束する事となつた。神はイスラエル人の爲に中保の役目を勤めしモーセを通じて彼等と語られた。神は此處でイスラエル人に示し、若し彼等が契約に忠信であるならば彼等は神に對して一の聖き民たるべしと告げられた、(出埃及記十

九章三、八節)。

「爰にモーセ登りて神に詣るに、エホバは山より彼を呼びて言ひ給はく、汝かくヤコブの家に言ひ、イスラエルの子孫に告ぐべし。汝等は埃及人に我が爲したる所の事を見、我が鶯の翼を伸べて汝等を我に至らしめしを見たり。然ば汝等若し善く我が言を聞き、我が契約を守らば汝等は諸々の民に愈りて我が寶となるべし。全地は我が有なればなり。汝等は我に對して祭司の國となり、聖き民となるべし。之等の言語を汝イスラエルの子孫に告ぐべし」

而して後、神は三日後に降りて民に律法を與ふるが故に彼等を準備せよとモーセに告げら

れた。三日目に民はシナイの山麓に集合した。彼等の前に電光閃き、雷鳴轟き互り、山嶺に密雲濃く垂れてラツバの音愈々高く鳴り響き、全山震ひ動きて民皆恐れ戦く。其の時エホバは彼等に語り給ふた。此の大震動の眞只中に於て神はモーセを通じて律法、即ち憲法をイスラエルの民に與へられた。即ち曰く、

「神の一切の言を宣べて云ひ給はく、我は汝の神エホバ、汝を埃及の地、その奴隸たる家より導き出せし者なり。

汝我が面の前に我の外何物をも神とすべからず、汝自己の爲に何の偶像をも彫むべからず。又上は天に在る者、下は地にある者、並びに地の下の水の中にある者の何の形状をも作るべからず、之を拜むべからず。之に事ふべからず我エホバ、汝の神はねたむ神なれば我を惡む者に向ひては父の罪を子に報ひて三四代に及ぼし、我を愛し、我が誠命を守る者には恩恵を施して千代に至るなり。

汝の神エホバの名を妄りに口にあげべからず。エホバは己の名を妄りに口にあげる者を罪せではおかざるべし。

安息日を憶えて之を聖潔すべし。六日の間勞らきて汝の一切の業をなすべし。七日目は汝の神エホバの安息なれば何の業務をも爲すべからず。汝も汝の子息、息女も汝の僕、婢も汝



シナイ山に於けるモーセ

の家畜も汝の門の中に居る他國の人も然り。其はエホバ、六日の中に天と地と其等の中の一物の物を作りて第七日に息みたればなり。是を以てエホバ安息日を祝ひて聖日とし給ふ。

汝の父母を敬へ。是は汝の神エホバの汝に賜ふ所の地に汝の生命の長からん爲なり。

汝殺すなかれ。

汝姦淫するなかれ。

汝盜むなかれ。

汝その隣人に對して虚偽の證據を立つるなかれ。

汝その隣人の家を食るなかれ。又汝の隣人の妻及びその僕、婢、牛、驢馬並びに凡て汝の

隣人の所有を食るなかれ。

民みな雷と電光とラツバの音と山の煙れりとを見たり。民これを見て懼れ戦きて遠く立ち

モーセに云ひけるは、汝我等に語れ、我等聽かん。唯神の我等に語り給ふことあらざらしめ

よ。恐らくは我等死なん。

モーセ民に言ひけるは恐るゝ勿れ、神汝らを試みんため、又その畏怖を汝等の面の前に置

きて汝等に罪を犯さざらしめん爲に臨み給ふなり。是に於て民は遠く立ちしが、モーセは神

の在す所の濃き雲に進みいたる。

エホバ、モーセに言ひ給ひけるは、汝イスラエルの子孫に斯く言ふべし。汝等は天より我が汝等にも言ふを見たり。汝等何をも我にならべて造るべからず。銀の神をも、金の神をも汝らの爲に造るべからず。汝土の壇を我に築きて、其の上に汝の燔祭と酬恩祭と汝の羊と牛を供ふべし。我は凡て我が名を憶えしむる所にて汝に臨みて汝を祝まん。汝若し石の壇を我に造るならば琢石をもて之を築くべからず、其は汝若し鑿を之に當てなば之を汚すべければなり。汝階段より我が壇に昇るべからず、是汝の耻づる處の其の上に露はるゝ事なからん爲なり。(出埃及記廿一章一―廿六節)。

神がイスラエル人に示せる各種の律法の條文は出埃及記廿一章と廿二章に記されてある。其處で起る問題は何故に神はイスラエル人と契約を結ばれたか、と云ふ事である。神は今その御目的の爲にイスラエル人を一の民族として組織された。神は約束を示して、ユダの支派より偉大なるメシヤが出現して、萬民は彼の下に統率せらるべく、メシヤは神がアブラハムに與へし約束に従つて萬民祝福の事を成就すべしと告げられた。神は勿論、人間の弱き事を知悉し、又神と契約を結んだ猶太人が特に「敵」より攻撃の的とされる事をよく知つてゐられた。律法は彼等猶太人を導く師傅となり、教師となり、彼等を護りて地上の他の人々より離反し置き、豫定の時至るに及びて出現し來るメシヤを受け容るゝに必要なる準備を彼等

に爲さしむる仕事をなす爲に與へられたのである。それと共に律法は彼等が供ふる處の祭物の眞の意味を教ふるの役目を務めたが、豫定の時至るに及びて彼等は充分にそれを知るに至る事となつてゐる。獸類の祭物は單に未來に來る更に善き祭物を示す處の模型即ち前影であつたに過ぎないのである。

律法の示す所は要するにイスラエルの民は唯神エホバのみを崇拜すべく、エホバ以外の者を崇拜してはいけないと云ふ事を教へたのである。何故に此の點が律法の中で特に高調されたか。若し神エホバが全能者にして愛の神であるとするならば、何故に其の律法の中で斯くの如き點を特に高調されなければならなかつたか。神は單にイスラエル人の崇拜を得んどの我利的目的で此の律法を制定されたのか。否、神は我利的目的で此の律法を制定されたのではない。神は之が猶太人に對する利益となり、惹いては地上全人類の爲に利益となる爲に此の律法を制定されたのである。以上に對する正當なる答を得る事は神がイスラエル人を特に取り扱はれたる目的と、全人類に對する祝福の御目的を諒解する上に最も必要なる事である。

敵の組織制度

神が人間の住所として地の基を据ゑられた時に、「晨星相共に歌ひ」喜んだ、(ヨブ記卅八章四一七節)と記録されてある。聖書は示して、此の二個の「晨星」は天界に於ける二個の大能

の靈者なるミカエル(ロゴス)とルシファアを意味してゐると告げてゐる。我等は今、此處でルシファアに關する研究をなし、後にロゴスの上に及ばんとす。

ルシファアは神に對する叛逆の子であつた。そして一方ロゴスは「忠信にして眞實」と呼ばれてゐる。此の預言が人間の住所たる地球の基の据ゑられる事に關して示される以上、我等は之を人間の創造に關聯して調べて置く必要がある。

モーセが神の靈導を受けて記述したる創世記の記録によると、神が地球を創造されたる時に、其の一部を特に美はしき所となし、それをエデンと呼ばれたとある。神はエデンの地域の東部に一の園を設け、その創造されし人間の男女を神の園の中に置かれた、(創世記二章八―十五節)。神は人間に對して己が種類に従ひ子孫を繁殖するの權能を與へ、豫定の時至るに及びて人間を全地に満たすべき方法を執られた。

ルシファアは人間の監督者たる高き位置に任じられた。彼は人類を監督し、彼等に對する神の聖旨を執行すべき事を命ぜられた。斯くしてルシファアは神と人間の双方から信頼される場所に置かれたのである。預言者エゼキエルはルシファアに關して述べ、彼は「神の園エデンに在りき」と示し、又彼に就て「汝は膏を、がれしケルビムにして掩ふ事をなせり。我汝を斯くなせしなり。汝神の聖き山にあり、又火の石の間に歩めり。汝はその立てられし日

より遂に汝の中に悪の見ゆるに至るまでは其の行ひ全かりき」(エゼキエル書廿八章十四、十五節)と記してゐる。此の「掩ふ事をなすケルビム」とは即ち彼ルシファアが信任と權威の位にありし事を明示す。

最大の犯罪とは即ち故意に信任を裏切り、他に害を興ふる事である。斯かる行爲は全く叛逆であつて、其の者を悪逆行爲者たらしめ、兇惡不埒の徒たらしむ。ルシファアは人間が己よりも高位者を崇拜すべき者として創造されし事を知つてゐた。彼は人間がエデンの美を享樂して彼の創造主にして保護者なる神エホバを崇拜する者なるを知つてゐた。彼は又人間が子孫繁殖の權能を興へられて地上に人類を満たす事を知つてゐた。ルシファアは當然神に歸すべき人間の崇拜を自ら横取りせんとの野望を抱くに至つた。而して若し人間をして神より離反せしめたならば、アダムとエバ及びその全子孫は總てルシファアを崇拜するに至り、斯くして彼自身は至高き神エホバの如くなり得ると彼は考へた。神の預言者はルシファアに關して云ふ、

「あしたの子ルシファア(明星……と日本語に譯さる。英語欽定譯を見よ)よ、如何にして天より墮ちしや。諸々の國を倒しし者よ、如何にして斫られて地に倒れしや。汝前に心の中に思へらく、我天に昇り、我が位を神の星の上に擧げ、北の極なる集會の山に坐し、高き雲漢に登

り、至上者の如くなるべし」と(イザヤ書十四章十二—十四節)。

彼は其の惡しき野望を遂行せんが爲に嘘偽と欺瞞の言行を用ひ、遂に殺人の結果を惹起するに至つた。故に彼は人間の歴史の最初より嘘言者であり、殺人者であつた。彼はエバを欺かんが爲にエデンの園の中に在りし蛇を使用して彼女と語つた。神はアダムとエバに示してエデンの園に在る或る樹の果を食ふべからずと示し置かれた。ルシファアは彼一流の狡猾と奸黠な方法を以て人間を欺かんが爲に先づエバに接近して斯く告げた「神眞に汝等は園の諸の樹の果は食ふべからずと言ひ給ひしや、婦蛇に言ひけるは、我等は園の樹の果を食ふ事を得、然ど園の中央にある樹の果をば神汝等之を食ふべからず、又これに捫るべからず、恐らくは汝等死なんと云ひ給へり」(創世記三章一一三節)。

而して今、ルシファアは己が惡しき野望を遂行せんが爲には先づ神エホバを以て嘘言者となし、己自身を人間の保護者と見せかけねばならぬと考へた。故に彼はエバに向つて斯く云つた、

「汝等必ず死ぬる事あらじ。神汝等が之を食ふ日には汝等の目開け、汝等神の如くなりて善惡を知るに至るを知り給ふなり。婦樹を見れば食ふに善く、目に美はしく、且つ智慧からんが爲に慕はしき樹なるによりて遂に其の果實を取りて食ひ、亦之を己と憚なる夫に與へけれ

ば彼食へり(創世記三章四一六節)。
 ルシファアが蛇を通じて爲したる狡猾なる悪手段に陥つたエバは神の律法を犯して果實を食ひ、アダムも此の犯罪行爲に参加するに至つたのである。

審判

エホバは絶対不變にして首尾一貫の神に在す。神は御自身に反する事が不可能であり給ふ。神は其の律法を犯す場合に對する刑罰が死である事を聲明されたる以上、エホバは律法が犯されたる時に其の刑罰を必ず勵行さるゝのである。神はその下されし審判の明言(創世記三章十四一廿四節)に基いて婦の裔と蛇の裔との間に怨恨が置かれる事、神の豫定の時至る時に婦の裔は蛇の裔を砕く事、婦は苦痛の裡に子を生み出す事、人間は此の後己が顔に汗して食物を食ひ、その己が取りて造られし所の土の塵に還元すべき事を制定された。神は此の判決即ち宣告を勵行する爲にアダムとエバとをエデンの園より追ひ出し、彼等が園に歸り來りて生命の樹の果を食ひて永久に生きざるやうにその歸途を遮断して了はれた。彼等はエデンの外不完全な土壤を耕作して不完全なる食物を漁り求めつゝ漸次弱つて遂ひに死んで了つた。ルシファアの名は「光を持つ者」と云ふを意味す。而して今、悪しき者と化したる彼は爾後神によつて四種の名稱を以て呼ばれる事となつた、即ち老蛇、龍、サタン、悪魔の四名稱

がそれである。「老蛇」とは欺く者と云ふを意味し、義を行はんとする者を欺かん事を常に求む。「龍」とは呑み食ふ者と云ふを意味し、彼は義の道に歩まんとする者を呑み食はんと常に窺ふ。「サタン」とは仇する者若くは敵對者と云ふを意味し、總ての義しき事と義しき者に敵する者である。「悪魔」とは誹謗する者を意味し、彼は主として神エホバ及び神と一致調和せんとする者を誹謗せん事を常に努む。彼に對する神の宣告は神の豫定の時至るに及びて彼は必ず撃滅さるべしとある。預言者エゼキエルとイザヤは之に就て明示して云ふ、

「汝その美麗の爲に心に高ぶり、其の榮耀の爲に汝の智慧を汚したれば我汝を地を擲ち、汝を王等の前に置いて觀物とならしむべし。汝正しからざる交易をなして犯したる多くの罪を以て、汝の聖き所を汚したれば、我汝の中より火を出して汝を燒き、凡て汝を見る者の目の前にて汝を地に灰となさん(エゼキエル書廿八章十七、十八節)。「汝は陰府に落され、坑の最下に入れられん(イザヤ書十四章十五節)。

神にはサタン即ち悪魔を即座に撃ち滅ぼす事は極めて容易であつたが、神の智は更に有効なる方法を選ばしめたのである。サタンが執る道は總ての義しき者の信仰を試むるであらう事を知つてゐられた神は、サタンをして人々の信仰を試むる事を默許し置かれた。人間がその自由意志を行使し得るの道は斯くして開かれたのである。人間は悪しき道に従ひ行くか、

それとも義の道に歩むかの何れかを自ら探擇する事が出来るやうになつたのである。敵なるサタンは悪しき道を示し、一方神は善にして義なる道を指示される。人間は各自その自由意志を行使し得る機会を與へられるのである。而して若し彼が悪しき道に従ひ行くならば其の結果は不幸に終り、又若し善の道に従ひ行くならば必ず神より祝福を受ける事となるのである。

エデンの時より今日に至るまでサタンは義を行はんと努むる人々の總らゆる方面に敵對行為を續けて來た。神に服従せんとする者はサタンより特に規はれる的となつた。アベルが神に奉仕せんとした時にサタンはその兄弟カインをして彼を殺害せしめた。其の時以後今日に至るまで敵なるサタンは人々の心に殺意を植ゑ附け、互ひに殺し合はしめて、苟くも神を信じ之に奉仕せんとする全部の者を打ち滅ぼさんと努めて來たのである。

敵なるサタン即ち惡魔は天界の天使の多數を誘つて神より離反せしめたが、爾後之等の天使等はサタンを首領と戴く惡鬼の全軍を形成するに至つた。サタンは悪しき天と惡しき地とを以て成る己が惡組織制度を構成した。『天』とは人間の肉眼に見えざる支配權を意味し、一方『地』とは地上人類の間の諸政府を以て成立する組織制度を表象してゐる。

ノアの時代に於てサタンは全ての人々を神エホバより離反せしめ、唯ノアと其の家族のみ

が神に對する忠信と眞實とを持續した。神は大洪水を以て地上萬物を滅ぼし、唯ノアの一家八人のみを救はれたが、之に依て神は己が悪を喜び給はざる神にして、他の萬物の上に權力を有し給ふ神なる事を顯示されたのであつて、斯くして人類が神を信じ、エホバが活ける眞の神なる事を知り得るに至るの方法を執られたのである。アブラハムの時代に於いても極めて少數者のみが神を信じた。アブラハムはその少數者の一人であつて、斯くして彼は神の承認と恩恵を受けたのである。

人々をして直接的にも間接的にも惡魔を崇拜せしむる事は彼サタンが常に執り來れる政策であつた。そして若し人類をして彼を直接崇拜せしむる事が困難ならば、彼は其處に幾多の偶像を設けて兎にも角にも神エホバ以外の者を崇拜せしむる方法を常に執つて來たのである。敵なるサタンはアブラハムの子孫以外の諸國諸民を組織して彼と彼の代表者を崇拜せしめて來たのである。

イスラエル人が埃及に居住してゐた時、イスラエル人以外の地上全人類は悉く敵なるサタンの支配下にあつた。バロは地上に於けるサタンの最高代表者であつた。聖書は示して、バロはサタンの一模型であり、又埃及はサタンの支配下に在る惡しき世の一模型であつた事を教へてゐる。イスラエル人が埃及に於いて受けたる大迫害は彼等が神の民であつたが故であ

つて、敵なるサタンはイスラエル人を滅ぼさんと試みた、何故なれば神は「約束の裔」が豫定の時に於てサタンの頭を砕くべしと宣告して置かれたからである。神エホバは奇蹟的の力を顯はし示してイスラエル人を埃及から救ひ出されたが、之即ちエホバは全能者に在して、彼等を完全に救ひ出し得るの大能者に在す事を示されたのである。

神はイスラエル人をシナイ山に迄導き、彼處にて彼等に律法を與へられたが、此の律法は彼等を監督すると共に、敵なるサタンの奸計より彼等を保護する役目を務めた。同時に律法は彼等を教へ、彼等が律法に服従する限り彼等を導く處の師傅たるの役目をつとめた。斯くして神は偉大なるメシヤの來る時まで彼等を導かれたのであつて、此のメシヤの許に萬人が集められて約束の祝福を彼より受ける事となるのである。然しイスラエルの民は間もなく惡魔に祭物を獻ぐる習慣に陥つた。其の時に神はモーセに告げて、民はエホバに祭物を獻ぐべき旨を示された、「彼等が其の慕ひて淫せし魘魅(惡鬼)に重ねて犠牲を獻ぐべからず。是は彼等が代々永く守るべき例なり(レビ記十七章七節)。

斯くして彼等イスラエル人が何故にエホバ以外の神を拜してはならぬと命ぜられたかと云ふ問題に答へられたる譯である。神はサタンが地上の諸國諸民の全部を惡しき道に邪導しつゝある事を見らるゝと共に、イスラエル人にとつての安然なる道は彼等が神エホバに忠信な

る状態に止まつてゐるにある事を知つてゐられた。斯くて神はイスラエルに示して、彼等が唯一の眞の神なるエホバのみを崇拜すべきを命じ給ふたのであつて、之は即ち彼等の利益となる爲であつたのである。神がイスラエル人に律法を與へられたのは即ち神の愛の發露であつた。

神の組織制度

聖書中には各處に明示して、天界には神エホバに忠信なる聖き天使の大軍がある事を教へてゐる。之等は神の義なる組織制度の肉眼に見えざる部分を形成してゐる。イスラエル人が一の民族に編成されて、神エホバとの契約關係に入つた時に、同民族は神の組織制度の一部となつた。イスラエルは聖書中にシオンの名で屢々現はれてゐる。何故なればイスラエル人は永らくの間に亘つて此の地上に於ける神の組織制度の見ゆる部分を形成してゐたからである。

ダビデはイスラエルの王であつた。彼は神の聖意に適ふ人であつた。ダビデの名は「愛せらるゝ者」と云ふを意味す。彼は來らんとする大メシヤの一模型であつた。彼の子ソロモンは富と榮光の中に統治の權を行使する榮光位に於けるメシヤの模型であつた。一の邑(時には「都」又は「城」とも譯さる)は一の組織制度即ち政府を表象するに屢々用ひられる。「爰に

ソロモン、エホバの契約の櫃をダビデの城(邑)即ちシオンより昇き上らんとてイスラエルの長老と諸の支派の首、イスラエルの子孫の家の長等をエルサレムにてソロモン王の所に召び集む(列王記略上八章一節)。

聖書は示して、神はシオンに住み給ふと記さる、「シオンに住み給ふエホバに對ひて讚め歌へ、その事迹を諸々の民の中に宣べ傳へよ(詩篇九篇十一節)。「エホバはシオンを撰びて己が居所にせんと望み給へり(詩篇百卅二篇十三節)。斯くの如くシオンは神エホバの住所とされてゐる。神は美麗の極なるシオンより光を發ち給へり(詩篇五十篇二節)。

イスラエルが神に一致して地上に於ける唯一の政府として神より扱はれ居たりし時に、之は正當にシオンと呼ばれた、何故なればイスラエルは神エホバの見ゆる部分を形成してゐたからであつて、之に見るも神が何故にその完全なる律法を以てイスラエルの周圍を包み、之を保護されたかと云ふ理由が明瞭である。イスラエル人は他の如何なる民族にも勝して神の豊なる恩恵を受けた。何故なれば神は彼等を己が民として選ばれたからである。

神がイスラエル人に向つて示されてゐた大教訓は其の結果に於て全人類に向つて、サタンは敵なる悪しき者なる事、サタンの示す道は破滅の道にして何者と雖も意識して之に従ひ行く時は結局破滅される事、エホバは偉大なる義者に在して、智と義と愛と力の神に在し、永

久の生命と幸福の道を備へて、何者にもエホバの示し給ふ義の道に従ひ行く時には之等の祝福が必ず約束されあるを教ふる事となるのである。神は預言者を通じて斯く示し給ふ、「エホバは己を愛しむ者を凡て護り給へど、悪しき者を悉く滅ぼし給はん(詩篇百四十五篇廿節)。

此の故にイスラエルの民は千八百年間の永きに亘り、全人類に此の大教訓を與ふる處の資料として用ひられたのである。此の全期間を通じてサタンは常にイスラエルを引導し彼等を神エホバより離反せしめんと努めて來た。而して今、猶太人は神が彼等の福利の爲に忍耐と御慈愛を以て彼等を取り扱ひ給ひたる御目的を悟り知るべき時が到來したと共に、嘗に彼等のみならず、惹いては地上全人類が、人々を高くするは唯義のみによるとの此の重要な教訓を學び知るべき時が來たのである。

此の故に神より導かれてゐた間のイスラエル人即ち猶太人は一の模型的民族であつた。彼等の受けし律法も一の模型であつて、未來に來るべき更に善き事を表象したのである。モーセも明示して彼自身は大メシヤの單なる模型に過ぎないと告げてゐる。「汝の神エホバ、汝の中、汝の兄弟の中より我の如き一個の預言者を汝の爲に興し給はん。汝等之に聽く事をすべし……我彼等兄弟の中より汝の如き一個の預言者を彼等の爲に興し、我が言をその口に授けん。我が彼に命ずる言を彼悉く彼等に告ぐべし(申命記十八章十五、十八節)。預言者イザヤ

も示して彼自身と彼の子等は未來に來る者の模型であると告げてゐる。『視よ、我とエホバが我に賜ひたる子等とはイスラエルの中の豫兆なり。奇しき標（模型）なり。こはシオンの山に在すエホバの與へ給ふ所なり』（イザヤ書八章十八節）。預言者ゼカリヤも亦示して神はイスラエルを模型的民族として用ひられたと告げてゐる、（ゼカリヤ書三章八節）。

イスラエル人は未來に來るべき更に善き事を豫影する爲の模圖として使用されたと云ふ此の事實を知る時に、人間はその猶太人たると異邦人たるとを問はず、何れも皆絶大の興味を以てイスラエルの律法を研究し、又神が如何にして彼等を取扱はれたるかを學ぶべきである、昔イスラエルの上に發生したる事は皆模型となり、見本となるのであつて、之等の事の記録されあるは今日此の時、神の恩恵が猶太人の上に復歸する其の時に於て此の地上に生存し、永久の生命を求むる人々の爲に特に利益となるのである。サタン即ち惡魔が永らくの間己の組織制度を有して神と總ての義しき事に敵對してゐたる事と、イスラエル人が神の組織制度の一部であつた事を學び知る時に、我等は今、何故にサタンは常にイスラエルの民を滅ぼし盡さんと努力してゐたかとの理由を明かに知る事が出来るのである。我等は斯くの如くイスラエル人の歴史に關する出來事を明かに諒解し得るのであつて、此の外には之を諒解する道は絶無である。それと共に我等は亦、惡魔の奸策に陥つたる者は皆神の恩恵を失ふ事と、

神の恩恵を受けんと欲する者は惡魔と其の組織制度より絶對に離反して、熱心に神を求めて之に服従しなければならぬと云ふ事を悟り知り得るのである。神は人間の心の中に惡意を置かれるが如き事は絶無である。神は決して人間に惡事を爲さしめられない。サタン即ち惡魔が神の敵であり、惡の元兇であると云ふ事が明かになる時、人間の心に惡意を植ゑ付け、人間をして總ての惡事をなさしむる者は即ち此の惡魔である事が明白である。

カインがアベルを殺害したる時より後今日此の時に至るまで人間をして總ての殺人行爲と惡事をなさしめたのは即ち此のサタンであつた。『義は國を高くし、罪は民を辱む』（箴言十四章卅四節）。事實は示して、神はイスラエルの民に對し彼等が義しき道に従ひ行きて、他の諸國の上に高く引き揚げらるべき好機會を與へられた事を立證してゐる、（出埃及記十九章五、六節）。然し彼等イスラエルは惡の元兇サタンに誘はれて罪に陥り、神の御前に汚穢となり終つた。斯くしてイスラエルの歴史は全地の諸國諸民の前に一の紀念塔として立つてゐるのである。

第四章 不忠信

エホバのみ眞の唯一の神に在す。神はシナイ山に於てイスラエルの民に向つて特に此の點を教示された。エホバと云ふ名はその民に對する御目的を意味す。神は此の名によつて御自身をモーセとイスラエルの民に顯はされた。神の御目的は彼等を義しき道に導きて生命に至るの道を示さんとするにあつた。若しイスラエル人が其の契約を忠實に履行したならば彼等は生命を得ることとなつたのである。『汝等我が例と律法とを守るべし。人若し之を行はざれば生命を得ずべし。我はエホバなり』(レビ記十八章五節)。

神はイスラエル人に對して『汚れなき信心』(改譯ヤコブ書一章廿七節)を樹立された。即ち彼等はエホバのみを唯一の眞の神として他に如何なる神をも崇拜してはいけなかつたのであ

る。悪鬼たちの頭なる敵サタンは此の世の諸國に對する見えざる支配者として彼等の間に嘘偽の宗教を樹立し、悪鬼たちを崇拜せしめた。

神はイスラエル人に律法の明文を與へて、之を彼等に對する保護の楯とされた。此の律法に何人にも悪鬼崇拜に陥る者は嚴罰に處せらるべしと制定してゐる。(出埃及記廿二章十八節レビ記廿章廿六、廿七節。申命記十八章九—十四節)。イスラエル人が得たる經驗はエホバに對して忠實と忠信を守るべき事の必要なるを彼等に示した。悪しき者サタンは忠信なる猶太人を嫌忌し、その全力を盡して彼等を滅ぼさんとした。サタンの絶えざる努力は彼等を神エホバより離反せしむるにあつた。ヨシユアの時代にはイスラエル人は神に忠信であつた。然しヨシユアの死後彼等は神を忘れ始め、遂に罪に陥つた。

『イスラエルの子孫、エホバの前に惡しき事を爲してバアリムに事へ、曾つて埃及の地より彼等を出し給ひし其の先祖の神エホバを棄て、他の神即ち其の四圍なる國民の神に従ひ、之に跪づきてエホバの怒を惹き起せり。即ち彼等エホバを棄て、バアルとアシタロテに事へたれば、エホバ烈しくイスラエルを怒り給ひ、掠むる者の手にわたして之を掠めしめ、且つ四圍なる諸々の敵の手に之を賣り給ひしかば彼等は再び敵の前に立つ事を得ざりき』(士師記二章十一—十四節)。

「彼等の爲にエホバ士師を立て給ひし時に方りてはエホバ常にその士師と共に在し、其の士師の世に在る間はエホバ彼等を敵の手より救ひ出し給へり。此は彼等己を虐げ苦む者ありしを呻き悲めるによりてエホバ之を哀み給ひたればなり」(士師記二章十八節)。其の時に神は異邦人がイスラエル人の近くに住所して彼等を試むるを默許して置かれた。

「エホバが凡てカナンの諸々の戦争を知らざるイスラエルの者どもを試みんとて遣し置き給へる國民は左の如し……イスラエルの子孫はカナン人、ヘテ人、アモリ人、ベリジ人、ヒビ人、エブス人のうちに住み、彼等の女を妻に娶り、また己の女を彼等の子に與へ、且つ彼等の神に事へたり」(士師記三章一、五―七節)。

神は再びイスラエル人の上に大艱難の到来するを放任し置き給ひ、彼等がエホバに向つて救ひを叫び求めた時に、彼等の叫びを聞き容れて彼等を敵の手より救ひ出された、(士師記三章九、十節)。爾後イスラエルは屢々その契約に不忠實なる行爲を示してそれに對する懲罰を受けたが、彼等がエホバに向つて救ひを求むる時に、神は彼等を敵の手より救ひ出されたのである。(士師記四章一―十五節。六章七節)。

然る後に神は、神に忠信にして眞實なる士師サムエルを起用し給ひ、彼の忠信を愛で、イスラエルを敵の手より救ひ出し、士師サムエルの奉仕中は常に彼等を安全に守られた。

イスラエルが神に對する忠信を示せる時に神が必ず彼等を救はれたるは注意すべき點である。神が此の事をなされし御目的は、御自身が唯一の眞の神なる事を彼等に教示するのみに止まらずして、エホバが彼等に對する眞の唯一の友なる事と、サタンが常に彼等の敵なる事を教示するにあつた事は一點の疑ひなき所である。神がイスラエル人の爲に示されし御仁慈の事實は聖書中に記録されてゐるが、今二三を摘録して見る。

ギデオンは神に奉仕して其の援助を祈り求めた。彼は三百の小軍を率ひてミデアン人二十萬の大軍に當つたが、神は此の大軍に同志討せしめて彼等を潰滅せしめられた。斯く神はギデオンに恩恵を與へられた、何故なれば彼はエホバの聲に聽きて従ひ、惡魔と其の組織制度を拒絶したからである。(士師記六章十一―四十節。七章一―廿五節)。此の大戦に於てギデオンと其の小軍は唯燈火を高くさゝげて斯く叫んだのみであつた、「エホバの劍、ギデオンの劍なるぞ」と。而して神は其の他の事を御自身の手にて爲し給ひ、ミデアン人の大軍を全滅に歸せしめられたのである。

ヨシヤバテが王たりし時、アンモン、モアブ及びセイル山の人々の強大なる聯合軍はイスラエルを撃つべく進軍して來た。ヨシヤバテは此の大軍に敵對する事の困難なるを知つてゐた。斯くて彼はイスラエル人の老弱男女をエルサレムに在る殿の前に集合せしめた。彼はイ

スラエル全家の代辯者として殿の前に立ち、エホバに斯う祈つた。「我等の先祖の神エホバよ、汝は天の神に在すに非ずや。異邦人の諸國を統べ給ふに非ずや。汝の手には能力あり、權勢ありて誰も汝を禦ぐこと能はざるに非ずや。ユダの人々はその小さき者及び妻子と共に皆エホバの前に立ち居れり」(歴代志略下廿章六、十三節)。

其の時神エホバはヨシヤバテの祈願を聞き、レビ人ヤハジエルをしてヨシヤバテに向ひ、「此の大衆の爲に懼るゝ勿れ」と告げ、安んじて戦ひに出でよと示された。「此の戦には汝等戦ふに及ばず。ユダ及びエルサレムよ、汝らは唯進み出でよ立ち、汝等と共に在すエホバの救拯を見よ。懼る勿れ、慄く勿れ、明日彼等の所に攻め出でよ、エホバ汝等と共に在せばなり」(歴代志略下廿章十七節)。

然る後にヨシヤバテは神命に従ひてエホバの爲の歌手を撰び、敵前に進ましめてエホバの恩恵と善き事を讃頌せしめた。翌日彼等は戦線に進發したが、之等の歌手は神を讚美する歌をうたひ始めた。「其の歌を歌ひ、讚美をなし始むるに當りてエホバ伏兵を設け、彼のユダに攻め來れるアンモン、モアブ、セイル山の子孫を惱まし給ひければ彼等打ち破られたり」(歴代志略下廿章廿二節)。

更に他の場合に於て、ヒゼキヤ王の統治第十四年の時、アツスリヤの王セナケリブはエル

サレムの都を攻めんとて大軍を率ひ進撃して來た。アツスリヤ王は傲慢不遜の異邦人にして惡魔を崇拜する者であつた。己が手下に大軍を率ふる此の傲慢なる異邦人の王は、ヒゼキヤに軍使を遣はして全能の神エホバを侮辱した。ヒゼキヤは此の事を聞くと共に己が衣を裂き麻布を着、灰を被りてエホバの家に行き、畏れ慄き、己が僕を預言者イザヤの許に遣はした。其の時にイザヤは預言した、

「汝等の君に告げよ、エホバ斯く言ひ給へり、曰く、アツスリヤ王の僕等我を罵り汚せり。汝等その聞きし言によりて懼るゝ勿れ。視よ、我かれが意を動かすべければ、一の風聲を聞きて己が國に歸らん。彼を其の國にて劔に倒れしむべし」(イザヤ書卅七章六、七節)。

アツスリヤ王は再びヒゼキヤに書を遣りて彼のエホバに對する信頼を弱らしめんと企てた。「ヒゼキヤは使者の手より書を受けて之を讀めり。而してヒゼキヤ、エホバの殿に登り行きエホバの御前に此の書を展ぶ。ヒゼキヤ、エホバに祈りて言ひけるは、ケルビムの上に坐し給ふ萬軍のエホバ、イスラエルの神よ、唯汝のみ地の上に萬の國の神なり。汝は天地を造り給へり。エホバよ、耳を傾けて聽き給へ。エホバよ、目を開きて視給へ。セナケリブが使者として活ける神を誇らしめし言を悉く聞き給へ。エホバよ、實にアツスリヤの王等は諸々の國民と其の地とを荒らし毀ち、彼等の神たちを火に投げ入れたり。之等のものは神に非ず、



ギデオンの小室

“エホバの劔、ギデオンの劔”

人の手の工にして或ひは木或ひは石なり。斯かるが故に滅ぼされたり。されば我等の神エホバよ、今我等をアツスリヤ王の手より救ひ出して、地の諸々の國に唯汝のみエホバなることを知らしめ給へ。(イザヤ書卅七章十四—廿節)。

其の時にイザヤは預言して王ヒゼキヤに示した、「此の故にエホバ、アツスリヤの王に就て如斯言ひ給ふ、彼は城に入らず、こゝに箭を放たず、楯を城の前に並べず、壘を築きて攻むる事なし。彼はその來りし道より歸りて此の城に入らず。我已の故によりて、僕ダビデの故によりて此の城を守り、此の城を救はん。これエホバ宣へるなり」(イザヤ書卅七章卅三—卅五節)。

夜の静寂はエルサレムの聖都を深く包んだ。然しその住民は誰も睡らなかつた。彼等は聖都の城門に間近く連戦連勝の強大なる敵軍が陣營を布いてゐる事を知つてゐた。此の恐るべき大軍の前にあるイスラエルの軍勢は強風の前に置かれたる糠殻の如きものに過ぎなかつた。彼等はエホバの御手以外には彼等を此の強力なる敵軍の手より救ひ得る者の絶無なるを知つてゐた。神エホバはヒゼキヤ王の哀願を聴き容れ給ひ、民は今、神の御救ひを待つ。彼等の待ちつゝある間に神エホバは其の聖名と、愛する僕ダビデの爲に偉大なる事を爲し給ふた。而して悪魔と彼の天使等はサタンの僕なるセナケリブと其の大軍を援助する爲にその一指だ



ギテオンの小隊

第九五頁

「アホアホ銀、ギテオンの銀」

命

生

(98)

人の手の工にして或ひは木或ひは石なり。斯かるが故に滅ぼされたり。されば我等の神エホバよ、今我等をアツスリヤ王の手より救ひ出して、地の諸々の國に唯汝のみエホバなることを知らしめ給へ。(イザヤ書卅七章十四―廿節)。

其の時にイザヤは預言して王ヒゼキヤに示した、「此の故にエホバ、アツスリヤの王に就て如斯言ひ給ふ、彼は城に入らず、こゝに箭を放たず、櫓を城の前に並べず、壘を築きて攻むる事なし。彼はその來りし道より歸りて此の城に入らず。我已の故によりて、僕ダビデの故によりて此の城を守り、此の城を救はん。これエホバ宣へるなり」(イザヤ書卅七章三―廿五節)。

夜の静寂はエルサレムの聖都を深く包んだ。然しその住民は誰も睡らなかつた。彼等は聖都の城門に間近く連戦連勝の強大なる敵軍が陣營を布いてゐる事を知つてゐた。此の恐るべき大軍の前にあるイスラエルの軍勢は強風の前に置かれたる糠殻の如きものに過ぎなかつた。彼等はエホバの御手以外には彼等を此の強力なる敵軍の手より救ひ得る者の絶無なるを知つてゐた。神エホバはヒゼキヤ王の哀願を聴き容れ給ひ、民は今、神の御救ひを待つ。彼等の待ちつゝある間に神エホバは其の聖名と、愛する僕ダビデの爲に偉大なる事を爲し給ふた。而して悪魔と彼の天使等はサタンの僕なるセナケリブと其の大軍を援助する爲にその一指だ



も動かす事が出来なかつた。

夜の帷が頓て消え去れる時、城門の外は岡と云はず、野と云はず、其處にセナケリブの大軍十八萬五千人の死屍が累々と横たはつてゐた。イスラエル人は一矢だに放たなかつた。唯天の神即ちアブラハムとイサクとヤコブの神エホバが彼等をその敵の手より救はれたのである。記録に曰く、「エホバの使者出て來り、アツスリヤの陣營の中にて十八萬五千人を撃ち殺せり。早晨に起き出て見れば皆死にて屍となれり」(イザヤ章卅七章卅六節)。

之等の外、エホバが其の民イスラエルを護られたる事跡は聖書の中に多く記録されてゐる。エホバはイスラエル人をして御自身が全能の神なる事、天地の大創造主にして其の御力は無限なる事、イスラエル人に對する友にして救ひ主たり、如何なる大敵の手からも容易に彼等を救ひ出し得る全能者に在す事を學び知らしめんが爲に之等の事を爲されたのである。之等の驚くべき救ひを示されあるに拘らずイスラエル人は屢々サタンの奸策に陥つては神エホバより離れ遠ざかつたのである。

之等の事を此處に示すは敢て猶太人を誹謗するが爲に非ずして、彼等の目的即ち唯一の目的が神エホバを信じ、その御聲に服従する事のみ懸つてゐる事を立證せんが爲である。其の律法の中に於て神はイスラエル人に示し、彼等が律法に反する場合に苦むべき艱難を豫

め警告して置かれた。即ち神は示し給ふ、

「汝等己の爲に偶像を作り、木像を彫刻むべからず。柱の像を建つべからず。また汝等の地に石像を立て、之を拜むべからず。そは我は汝等の神エホバなればなり。汝等わが安息日を守り、我が聖所を敬ふべし。我はエホバなり。」

汝等若し我が法令に歩み、我が誠命を守りて之を行はば、我その時候に雨を汝らに與ふべし。地はその産物を出し、田野の樹木は其の果を結ばん。是を以て汝らの麥打は葡萄を斂むる時にまで及び、汝等が葡萄を斂むる事は種播時にまで及びん。汝等は飽くまで食物を食ひ、汝等の地に安泰に住む事を得べし。我平和を國に賜ふべければ、汝等は安じて寝ることを得ん。汝等を懼れしむる者なかるべし。我また猛き獸を國の中より除き去らん。劔汝等の國を行きめぐる事もあらじ。汝等は其の敵を逐はん。彼等は汝等の前に劔に殞るべし。汝等の五人は百人を逐ひ、汝等の百人は萬人を逐ふらん。汝等の敵は汝等の前に劔に殞れん。我汝等を眷顧み、汝等に子を生む事多からしめて汝等を増し、汝等と結びし我が契約を堅うせん。汝等は舊き穀物を食ふ間にまた新しきものを獲てその舊きものをいだすに至らん。我わが幕屋を汝等の中に立てん。我が心汝等を忌み嫌はじ。我汝等の中に歩み、また汝等の神とならん。汝等はまた我が民となるべし。我は汝等の神エホバ、汝等を埃及の國より導き出してその奴



エホバ神、エルサレムをアツスリヤの手より救ひ給ふ

諒たる事を免がれしめし者なり。我は汝等の梘の横木を碎き、汝等をして眞直に立ちて歩く事を得せしめたり。

然れど汝等若し我に聴き従ふ事をなさず、この諸々の誠命を守らず、我が法度を蔑如にし、また心に我が律法を忌み嫌ひて我が諸々の誠命を行はず、却て我が契約を破ることをなさば我も斯く汝等に爲さん、即ち我汝等に驚惶を蒙むらしめん。瘡癩と熱病ありて目を壊し、靈魂を慙れ果てしめん。汝等の種播く事は徒然なり。汝等の敵これを食はん。我わが面を汝等に向けて攻めん。汝等はその敵に殺されん。また汝等の惡む者汝等を治めん。汝等はまた追ふ者なきに逃げん。汝等若し斯くの如くなるも猶ほ我に聴き従はずば、我汝等の罪を罰する事を七つの時(七倍……は誤謬)重くすべし。

我汝等の崇邱を毀ち、汝等の柱の像を斫り倒し、汝等の偶像の屍の上に汝等の死體を投げ棄て、我が心に汝等を忌み嫌はん。また汝等の邑々を滅ぼし、汝等の聖所を荒さん。また汝等の祭物の馨しき香を聞がじ。我その地を荒すべければ汝等の敵の其處に住める者これを奇しまん。我汝等を國々に散らし、劍を抜きて汝等の後を追はん。汝等の地は荒れ、汝等の邑々は亡びん(レレ記廿六章一—十八、卅—卅三節)。

然るに彼等は此の眞の神なるエホバを棄て、敵なるサタンの中に陥り、エホバとの契約

を繰り返しては破つたが、エホバは預言者エレミヤを通じて彼等に斯く示し給ふた。

「視よ、我北の諸の族と我が僕なるバビロンの王ネブカデネザルを招き寄せ、此の地とその民と其の四圍の諸國を攻め滅ぼさしめて之を詫異物となし、人の嗤笑となし、永遠の荒地となさん、とエホバ言ひ給ふ」(エレミヤ記廿五章九節)。

ゼデキヤはイスラエルの最後の王であつた。彼は神の御前に悪しき事を爲した。彼はエホバより遣されし預言者を嘲笑し、預言者を通じて示されしエホバの御言を排棄して之を曲用した。歴代志略下卅六章十二—十六節。然る時にエホバは預言者エゼキエルを通じてイスラエル人に最後の宣告を示されたが、此の時は紀元前六〇六年であつた。その宣告に云ふ、

「此の故に主エホバ斯く言ふ、汝等既にその罪を憶ひ起さしめて汝等の懲著明になりたれば汝等の罪その諸ての行爲に顯はる。汝等既に憶ひ出さるれば必ず手に執へらるべし。汝刺し透さるゝ者、罪人イスラエルの君主よ、汝の罪その終を來らしめて汝の罰せらるゝ日至る。主エホバ斯く言ふ、冕旒を去り、冠冕を除き離せ。是は是ならざるべし。卑き者は高くせられ、高き者は卑くせられん。我顛覆す事をなし、顛覆す事をなし、顛覆す事をなさん。權威を持つべき者の來る時まで是は有ることなし。彼に我之を與ふ」(エゼキエル書卅一章廿四—廿七節)。

然る後に神エホバはカルデア人の大軍をイスラエルの上に攻め來らしめられた。敵軍はエルサレムの城壁を破りて攻め入り、神の殿とその附近を焼打ちし、イスラエル人をバビロンに捕へ移した。又ゼデキヤの子等をその父の眼前に殺戮し、彼の兩眼を抉して彼を鎖に繋ぎバビロンに連れ去つた。之ぞ即ちイスラエルに對する警告として與へられありし預言の成就であつた。(列王記略下卅五章六、七節。歴代志略下卅六章廿一節)。

何故にイスラエル民族は陥落したか。即ち彼等は神エホバに不忠信であつたからである。イスラエル人の一部が七千年後にバビロンよりエルサレムに歸還した事は事實であるにしても、其の後の彼等には王もなく、又己が故郷の地を全く所有する事も許されなかつた。爾來彼等は常に他國に隸屬し、紀元七三年に至りて羅馬の軍隊の手によつて完全に顛覆され、彼等の有せし最後の城塞がパレスチナから影を没して了つたのである。

然らばイスラエル人は永遠に神より棄てられて了つたか。否、斷じて然らず。神が預言者エゼキエルを通じて彼等に示されし宣告に特に注意せよ、即ち云ふ「我顛覆す事をなし、顛覆す事をなし、顛覆す事をなさん。權威を持つべき者の來る時まで是は有ることなし。彼に我之を與ふ」(エゼキエル書卅一章廿七節)。此の示しによるも、神が或る條件の下にイスラエルを復興せんとすの御目的を實行さるゝ時まで、或る期間を豫定し、其の全期間を通じてイスラ

エルの民族を顛覆して置かれると云ふ事が明かである。然らばそれは何時までか。即ちシロと呼ばれる所のメシヤが来て、創世記四十九章十節に示されある如く萬民を己が許に集め來らしむるの預言が成就する時までである。此の時にモーセを以て摸型とする所の實體たるメシヤが己の民に臨むのである。(申命記十八章十五―十八節)。「其の時汝の民の爲に立つる所の大なる君ミカエル(メシヤ) 起ち上らん(ダニエル書十二章一節)。この時こそ即ち神の恩恵がイスラエルの子孫に復歸する時である。

イスラエル人が神より棄てられたのは彼等の不忠信に基く事が明かなる時、彼等は如何にして又神の恩恵に復歸し得らるべきか。即ち彼等が神と其の御言を信じてそれに全く従ふ事である。彼等が神エホバに不忠信となりし原因は抑々何なりしか、即ち「此の世の神」と呼ばるゝサタンが彼等の眼を盲まして、神エホバが彼等に告げ給ひし大真理の前にその目を閉ざしめたからである。然し此の盲目状態は永遠に存続するのではない。而して大メシヤが彼等に臨みて、此の不信の盲目状態を彼等の上より取り去り、ヤコブの子孫より不虔を除き去る時にイスラエルの家は救はれて神の恩恵に復歸される事となるのである。

第五章 苦 難

神エホバは何が人間に對する最良の教訓であるかを知り給ふ。エホバは之等の教訓を與ふるに最も有効なる方法を使用し給ふのである。或る者は、神の保護下にある者は絶対に罪を犯す事が出来ないと主張し、又或る者は若し神が人間を愛さるゝならば神はその人間をして絶対に罪を犯さしめざるやうになされると力説する。神にして若し斯かる方法を執られんか人間は單なる自働機械となり終り、自ら正邪善惡を判別して其の結果を経験するの機會を有する事が不可能となる。人間の眼界は制限されてゐる。神の智は無限である。此の故に神はその預言者を通じて斯く力強く示し置き給ふ、天の地より高きが如く我が道は汝等の道よりも高く、我が思ひは汝等の思ひよりも高し(イザヤ書五十五章九節)。

神はイスラエル人をして正當なる教訓を學ばしむる爲に彼等の上に長い困難の經驗の臨むのを放任して置かれた。彼等の受けし教訓は亦地上全人類に利益を齎らす事となる。敵地に囚はれの身となつたイスラエル人は河の堤に慰安を探し求めた。其處には最早舌の争ひもなく、鎖や武器の殺伐なる響もなく、彼等は己等の上に落ち來りし大なる艱難を思ひつゝ沈み切つてゐた。四圍の事物は住み慣れし故郷のそれとは全く違つてゐた。此の異郷に囚はれた彼等は最早指導者なく、祭物なく、儀式なく、己が神の恩恵から全く見捨てられた者であつた。彼等の大なる長き「苦難」は今之より始まらんとす。それが何時まで續くかは彼等もそれを知る事は出來ぬ。彼等は曾つてエホバの御手より受けし祝福の數々を思ひ出した。彼等の前途は暗澹として全く荒寥たるものであつた。大なる悲歎は今彼等の上に襲ふて來たのである。彼等は皆泣いた。

彼等の間には音樂の名手も多く居たに相違ない。彼等の舌は歡喜の歌聲に冴え、彼等の熱練せる右手は立琴の絃の上に自由に躍り動いた。イスラエル人は皆神の民として他の人々の如く善く歌ひ、善く琴を彈ずる事が出來た。彼等の心は讚美に躍つた。神エホバは彼等に歡喜の歌を與へられた。神の靈を有する者のみこそ眞の音樂を作り得るのである。

ダビデは琴（立琴）の名手であつた。彼は神の聖意に適ふ人であつた。そのダビデの子孫

が「俘囚人」の間に多數居たのである。レビ人も亦其處に居た。バビロンの兵士等は、猶太人の管絃樂に和したイスラエルの善き歌手の歌は非常な聞物である事を知つてゐた。バビロン人は河畔に屯する俘囚人等の動靜を看視してゐたに相違ない。彼等は猶太人が泣いてゐる時にその傍に來て云つた「我等に歌を聞かせよ。否、悲歎の歌ではない、猶太人特有の歡喜の歌を聞かして貰ひ度い」と。之等のバビロン人の兵士等はエルサレム附近に陣を構へてゐる間に猶太人の歌を屢々耳にしたに相違ない。

此の要求に應ずる事は猶太人にとつて不可能であつた。彼等の悲歎は餘りにも深かつたのである。彼等は悲し氣にその立琴を汀の柳の樹の枝に掛けた。彼等は己が心の中の思ひに奇しくも和す流の悲し氣なる水音に凝つと聞き入つた。苦みの涙は止め度もなく彼等の頬を傳はつて流る。詩篇記者は此の場景を詩的辭句を以て預言して云ふ、

「我等バビロンの河の邊に坐り、シオンを想ひ出て涙を流しぬ。我等その傍の柳に我が琴をかけた。そは我等を擲にせし者我等に歌を求めたり。我等を苦むる者我等に己を喜ばせんとて、シオンの歌ひとつ謳へと云へり。我等外邦に在りて如何でエホバの歌を歌はんや」(詩篇百卅七篇一―四節)。

然らばイスラエル人の精神は全く打ち壊れたか。彼等は全く絶望したか。否、詩篇記者の

示した預言は彼等が未だ全くは其の望を失はず、己が故郷の土地に忠實ならんとの決意を有してゐた事を示してゐる。更に續く、「エルサレムよ、若し我汝を忘れなば我が右の手に其の巧を忘れしめ給へ。若し我汝を思ひ出でず、若し我エルサレムを我が凡ての歡喜の極みとなさずば我が舌を我が腰につかしましめ給へ」(詩篇百卅七篇五、六節)。故郷の土地は彼等イスラエル人にとつて地上に於ける最も懐しい所であつた。彼等は己が故郷に忠實ならんと決意した。然る後に詩篇記者は神に對する祈願を記して云ふ、「エホバよ、願はくはエルサレムの日にエドムの子等が、之を拂ひ除け、其の基までも拂ひ除けと言へるを聖意にとめ給へ」(詩篇百卅七篇七節)。エドム人は何を爲したか。エドムとは惡魔の組織制度の一部であつた。惡魔はエドム人の偽宗教を用ひてイスラエル人を義しき道より離反せしめた。其の時に彼等は神に叫んでバビロン人に返報せん事を願つた。

「滅ぼさるべきバビロンの女よ、汝が我等になし、如く汝に報ゆる人は幸福なるべし。汝の嬰兒をとりて岩の上に擲つ者は幸福なるべし」(詩篇百卅七篇八、九節)。

預言者エレミヤは彼の哀歌の中で配流のイスラエル人に就て示して云ふ、

「エルサレムは甚しく罪を犯したれば汚穢れたる者の如くなれり。前にこれを尊びたる者もその裸體を見しによりて皆これを賤しむ。是もまた自ら救き、身を背けて退けり。その汚穢

これが裾に在り。彼その終局を思はざりき。此の故に驚くまでに零落たり。一人の慰むる者だに無し。エホバよ、我が艱難を顧み給へ。敵は勝ち誇れり。敵すでに手を伸べてその財寶を悉く奪ひたり。汝さきに異邦人等は汝の公會に入るべからずと命じ置き給ひしに、彼等が聖所に侵入するをシオンは見たり。主我の中なる勇士を悉く除き、節會を催して我を攻め、我が若き人を打ち滅ほし給へり。主酒醉を踏むが如くにユダの處女を踏み給へり。

之が爲に我なげく。我が目や我が目には水流る。我が靈魂を生かすべき慰むる者我に遠ければなり。我が子等は敵の勝てるによりて滅び亡せにき。シオンは手を伸ぶれども誰もこれを慰むる者なし。ヤコブに就てはエホバ命を下してその周圍の民を之が敵とならしめ給ふ。エルサレムは彼等の中において汚れたる者の如くなりぬ。エホバは正し。我その命令に背きたるなり。一切の民よ、我に聽け、我が憂苦を顧みよ。我が處女も若き男も俘囚れて往けり」(哀歌一章八―十、十五―十八節)。

異邦人の時

神はユダの子孫を通じて此の地上に其の民を建設された。猶太人は其の民であり、エホバはイスラエルの神であつた。他の諸國諸民は異教徒であり、異邦人であつて彼等の神はサタンであつた。ゼデキヤが顛覆されて猶太人がバビロンに囚はれて後、此の模型的王國は消滅

した。此の時より後「異邦人の時」が始まり、異邦人に依る統治が開始されたのである。爾後世界の統治権を握つて建てられたる國はバビロンにして、其の見ゆる王はネブカデネザル、又見えざる眞の首位者はサタンであつた。此の時より後敵サタンは全世界の神となつたのである。神エホバは不忠信の故を以てイスラエル人の上より恩恵を除き去ると共に、サタンの統治に對して何等の干渉を加へられなかつた。「異邦人の時」の開始七十年後にイスラエルの「遺残者」なる少數者がパレスチナに歸つた。然し以前の如き榮光と權威は最早イスラエル人の上に決して許されなかつた。爾來猶太人は引き続き異邦人の世界強國の支配下に置かれ最初にバビロン、次にメデア・ペルシャ、續いてギリシヤ、其の後に羅馬の支配を受けたのである。

エホバは預言者ダニエルに向つて之等の諸世界強國に關する異象を示し、之等を「獸」なる象徴的辭句を以て形容して置かれた。「獸」とは政治と商業と宗教の三權者を以て形成される一の我利的世界強國を象徴す。此の形容は如何にも妥當である、何故なれば之等諸國は彼等の主公サタンの支配下に於て何れも惡徳兇暴の限りを盡したからである、(ダニエル書七章二一節)。

紀元六九年に羅馬人の軍勢はパレスチナに於ける猶太人を攻撃し始め、七三年ニサンの月

の十五日にパレスチナの最後の城塞が陥落した。其の時多數の猶太人は虐殺され、生き殺れる者も追はれて地上の諸國に散つて了つた。斯くして過去千幾百年の永い間、猶太人はその歡迎せざる異邦人の諸國に於て全く筆舌に盡し難き迫害と苦難を受けたのである。猶太人の大部分は獨逸、ルーマニア、波蘭及び露西亞に流れ行き、特に露西亞にはその多くが移り住んだ。之等諸國に於て過去の永い年月、猶太人が受けた苦難は餘りに恐ろしくして人語の善く盡し得る所ではない。然かも歴史の明示する所によると猶太人に對する主なる迫害者はクリスチャンと自稱してゐた所の者等であつた。之等自稱クリスチャンが執つた惡しき道は、キリスト教と云ふものをして多數の心直き人々の前に最も嫌忌すべく厭はしきものと化せしめたのである。之ぞ即ち敵なる惡魔の兇惡なる感化に基くものであつた。

以上の諸國に於て猶太人は不動産を所有する權を有せず、選舉、被選舉權を與へられず、商業取引を爲すを許されず、甚しきに至つては行商すらも許されないのである。彼等の財産は奪はれ、其の家は破壊され、處々方々と追ひ廻はされて、彼等が恰も野獸でもあるかの如くにその怒れる敵側より狩り出された。露西亞、ルーマニア其の他歐洲諸國に於ける迫害は過去五十年間に其の絶頂に達したのである。

過去千幾百年の長い年月は猶太人にとつて全く暗黒の夜であり、恐るべき苦難の連続であ

つた。此の大迫害の眞只中に於て猶太人は結束した。彼等は又此の大迫害の最中に最大の法律家、最も卓出せる政治家、最も俊敏なる資本家、最も優れたる詩人や哲學者等を彼等の仲間から輩出した。然し之等の此の世的に優れたる者は概して神に對して少しも信仰を有してゐなかつた。そして貧しくして虐げられてゐる者等の中に、神がアブラハム、イサク、ヤコブ及び預言者等になされた御約束に最大の信仰と信頼を有してゐる者が多いのであつた。

苦難の理由

此處に猶太人の受けし無数の迫害や艱難を並べ立て、見ても何等の益を得ない。之等の事は猶太人自身がよく知悉してゐる。其處で起る問題は、何故に神は之等の迫害を猶太人の上に許して置かれたか、と云ふ點である。神の預言者エレミヤは此の問題に答へてゐる。エルサレムと共に其の居民に就てエレミヤは預言して云ふ、

「萬軍のエホバ、イスラエルの神斯く言ひ給ふ、視よ、汝の目の前、汝の世に在る時に我欣喜の聲と歡樂の聲と新郎の聲と新婦の聲とを此の處に絶えしめん。汝この總ての言を斯の民に告ぐる時、彼等汝に問ふて、エホバ我等を責めて此の大なる災禍を示し給ふは何故ぞや、また我等に何の惡しき事あるや、我が神エホバに背きて我等の爲せし罪は何ぞやと言はば、汝彼等に答ふべし。エホバ言ふ給ふ、是汝等の先祖我を棄て他の神に従ひ、これに事へ、之

を拜し、また我を捨て我が律法を守らざりしに因る。汝等は汝等の先祖よりも多く惡をなせり。視よ、汝等は各自自己の惡しき心の剛愎なるに従ひて我に聽かず。故に我汝等を此の地より逐ひて汝等と汝等の先祖の識らざる地に至らしめん。汝等かしこにて晝夜他の神に事へん。是我が汝等を憐まざるによるなりと(エレミヤ記十六章九—十三節)。

斯く神は彼等に示して、彼等の上に臨みし大苦難の理由は彼等が神エホバに不忠信にしてサタンの惡しき感化の下に陥り、惡鬼崇拜の惡に走りたる結果に因るものなりと告げてゐられる。

其處で起る他の重要な問題は、然らば猶太人の上に臨みし此の耻辱の除かれる事ありて神の恩恵はその民なる猶太人に全く復歸する事の果して有りやと、云ふ點である。神が猶太人を棄て、彼等の上に苦難の來るを放任して置かれたる理由は即ち彼等に信仰の缺如したるが故であつた。然し彼等の中には信仰を有する者もある。猶太人の苦難の全期間を通じて神に信仰を固く保つてゐた者も相當にあつた。過去永年の間に亘り、猶太人は時を定めてエルサレムの悲歎の城壁に集まるを許され、其處にて神に歎き叫び、神の恩恵と憐憫の猶太人の上に復歸せん事を切に祈り求めたのである。彼等の苦惱は彼等の希望を熱禱と化した。彼等はその祈願の神に聽き容れられん事を永らくの間待ち受けてゐた。神はその預言者を通じて

て、何れかの時に於て彼等の苦難が終り、彼等は己が故郷に連れ歸られて其處にてエホバの御手に盡きざる永遠の歡喜を受けんと預告して置かれた、預言者の其の言に云ふ、

「エホバ言ひ給ふ、然ば視よ、此の後イスラエルの民を埃及の地より導き出だせしエホバは活くと云ふ事なくして、イスラエルの民を北の地とその凡て逐ひやられし地より導き出せしエホバは活くと云ふ日來らん。我彼等を我がその先祖に與へし彼等の地に導き歸るべし。エホバ言ひ給ふ、視よ、我多くの漁る者を呼び來りて彼等を漁らせ、またその後多くの獵人を呼び來りて彼等の諸々の山、諸々の岡及び岩の穴より獵り出さしめん。我が目は彼等の諸の道を變る。皆我に隠るゝ所なし、又その惡は我が目に匿れざるなり。我先づ倍して其の惡と其の罪に報いん。そは彼等その汚れたる者の屍をもて我が地を汚し、その惡むべきものをもて我が産業に満たせばなり」(エレミヤ記十六章十四—十八節)。

然し此の預言者の言に見るも、彼等猶太人がその故郷の土地に連れ歸らされる以前に先づ「漁る者が彼等を漁り」、又「獵人」が野獸を逐ひ出す如くに彼等を狩り出さんと示してゐる此の預言の成就せるは容易に看取し得られる所である。猶太人の上に有さるゝ神の御目的に就て絶對無知なるキリスト教會制度は猶太人を改宗して彼等を己が教會制度に入會せしめんと試みた。此の仕事に於てキリスト教會制度は全く失敗した、何故なれば猶太人が之等の偽

制度に參與して汚さるゝは神の聖旨ではなかつたからである。猶太人を改宗せしめんとする此の誤つた行爲は猶太人をして聖書より離反せしむるに至つたのである。眞に聖書を諒解するクリスチャンは猶太人を改宗せしめんと企つるが如き愚擧は敢てなさないのである。

然る後に「獵人」が來て猶太人の散在する諸國より彼等を狩り出し、到る處に於て大迫害を加へた。猶太人の大部分は預言中に「北の國」と示されある處の露西亞に住んでゐた。猶太人に對し最も大なる「狩り出し」と迫害、虐殺の加へられたのは即ち此の露西亞であつた。然し此の大迫害は猶太人をして彼等の祖先の土地に對する思慕を愈々強くならしめ、其の處に於て安全と平和の裡に住居せん事を熱望せしむるに至つた。神が預言者を通じて、何日かは彼等猶太人をその故郷の土地に連れ歸らんと約束して置かれるこの一事は、即ち彼等の苦難が其の時に於て終結を見る事を明瞭に示してゐるのである。それ等預言中には「時と期」に關するものも含まれてゐるが、今我等の眼前に發生しつゝある諸々の諸事象の光輝によつて見るに今日が猶太人の苦難が終了する時に相當してゐる事を明確に立證してゐる。之等の事は後段に研究する事として、我等は先づイスラエルの故郷歸還に關する神の御約束は絶對確實なる事を研究する事とする。

神がアブラハムに示して、彼とその子孫にパレスチナの土地を永遠に所有せしむべしと約束されし此の一事は、猶太人が其の地に再び集合されて此の地を永遠に所有する事を立證する最も明確なる證據である。(創世記十七章八節)。然し神はその預言者等を通じて幾多の預言を以てイスラエル人に示し、猶太人の苦難は神の豫定の時至るに及びて必ず止む事、彼等は再びその故郷の地に集合されて永遠に其地を所有すべき事を明かに約束されてゐる。其等預言の幾つかを擧げて見ると左の如くなる。

「イスラエルの神エホバ斯く云ふ、我わが此の處よりカルデア人(異邦人)の地に逐ひやりしユダの俘囚人を此の佳き無花果の如くに顧みて恵まん。我彼等に目をかけて之を恵み、彼等を此の地に歸し、彼等を建て、休まず、植ゑて抜かじ。我彼等に我のエホバなるを識るの心を與へん。彼等我が民となり、我彼等の神とならん。彼等は一心をもて我に歸るべし」(エレミヤ記廿四章四一七節)。

「視よ、我わが震怒と憤怒と大なる怒をもて彼等を逐ひやりし諸々の國より彼等を集め、此處に導き歸りて安然に居らしめん。彼等は我が民となり、我は彼等の神とならん。我彼等に一の心と一の途を與へて常に我を畏れしめん。こは彼等と其の子孫とに幸福を得しめん爲なり、我彼等を捨てずして恵みを施すべしと云ふ永遠の契約を彼等に立て、我を畏るゝの畏を

彼等の心に置きて我を離れざらしめん。我喜びて彼等に恩恵を施し、心を盡し、精神を盡して誠に彼等を此の地に植うべし。エホバ斯く云ひ給ふ、我この諸々の大なる災禍を此の民に降せし如く、我彼等に言ひし諸々の幸福を彼等に降さん。人々此の地に田野を買はん。之汝等が荒れて人も畜も無きに至り、カルデア人の手に付されしと言へる地なり。人々ベニヤミンの地とエルサレムの四周と、ユダの邑々と山の邑々と平地の邑々と南の方の邑々に於て、銀をもて田野を買ひ、契券を書きて之に封印し、又證人を立てん。そは我かの俘囚者を歸らしむればなりとエホバ言ひ給ふ(エレミヤ記卅二章卅七一四十四節)。

「此の故に汝言ふべし、エホバ斯く言ひ給ふ。我彼等を遠く逐ひやりて國々に散らしたればその行ける國々に於て暫時の間彼等の聖所となると。是故に言ふべし、主エホバ斯く云ひ給ふ、我汝等を諸々の民の中より集へ、汝等をその散らされたる國々より集めてイスラエルの地を汝等に與へん(エゼキエル書十一章十六、十七節)。

「我エホバ彼等の神とならん。我が僕ダビデ彼等の中に君たるべし。我エホバ之を言ふ。我彼等と平和の契約を結び、國の中より悪しき獸を滅ほし絶つべし。彼等即ち安然に野に住み森に眠らん。我彼等及び我が山の周圍の處々に福祉を下し、時に從ひて雨を降らしめん。是即ち福祉の雨なるべし。野の樹はその實を結び、地はその産物を出さん。彼等は安然に其の

國に在るべし。我が彼等の鞭を碎き、彼等をその僕となせる人の手より救ひ出す時に彼等は
 我のエホバなるを知るべし。彼等は重ねて國々の民に掠めらるゝ事なく、野の獸も彼等を食
 ふことなかるべし。彼等は安然に住まはん。彼等を懼れしむる者なかるべし。我彼等の爲に
 一の栽植處を起して其の名を聞こえしめん。彼等は重ねて國の饑饉に滅ぶることなく、再び
 異邦人の凌辱を蒙ることなかるべし。彼等はその神なる我エホバが己と共にあるを知り、自
 己イスラエルの家は我が民なるを知るべし。主エホバ之を言ふ」(エゼキエル書卅四章卅四節)。

「是を以て我イスラエルの家がその至れる國々にて潰せし我が聖き名を惜めり。此の故に汝
 イスラエルの家に言ふべし、主エホバ斯く言ひ給ふ、イスラエルの家よ、我汝等の爲にこれ
 を爲すに非ず、汝等が其の至れる國々にて汚せし我が聖き名の爲になすなり。我國々の民の
 中に汚されたる我が大なる名即ち汝等が彼等の中にありて汚したる所のものを聖くせん。國
 々の民は我が汝等に由りて我の聖き事を其の目の前に顯はさん時に我がエホバなるを知らん
 我汝等を諸々の民の中より導き出し、諸々の國より集めて汝等の國に携き至らん」(エゼキエ
 ル書卅六章廿一―廿四節)。

此のイスラエル人をパレスチナの地に再び集めて、彼等を其の地に植ゑて抜かじとの此の

約束は猶太人がバビロンから歸還した時の事に適用する事は出来ない。何故なれば彼等はバ
 ビロンより歸還後もその地より抜かれて全地に散り、苦難の長夜を経験したからである。斯
 く神が繰り返しては彼等に示し、彼等を故郷パレスチナの地に再び集めて永遠に祝福せんと
 約束されし此の約束は、彼等が紀元七三年に羅馬人の軍隊によつて故郷から追ひ散らされし
 「後」に於て成就さるべきである。之等の預言はイスラエルの長い苦難が終結する時に適用
 されるのである。而して視よ、其の時は遂に今至れり矣。

第六章 光 明

エホバは預言者をして左の如き言を猶太人の口に置かれた。「我はエホバを仰ぎ望み、我を救ひ給ふ神を望み待つ。我が神我を救ひ給ふべし。我が敵人よ、我に就て喜ぶなかれ。我仕るれば起き上る、幽暗に居ればエホバ我の光となり給ふ。エホバ我が訴訟を理し、我が爲に審判を行ひ給ふまで我は忍びて其の忿怒を蒙らん。其は我これに罪を得たればなり。エホバ遂に我を光明に携へ出し給はん、而して我エホバの正義を見ん」(ミカ書七章七—九節)。

「幽暗」は死を表象す。光は生命の象徴である。彼等はその望む處の光を受けんとするならば、先づ神の言を諒解しなければならぬ。「聖言うち開ければ光を放ちて愚なる者を慧からしむ」(詩篇百十九篇百卅節)。イスラエル人が神の言の中に光を認め知つてそれを感受し始める時

に、彼等はその頭を擧げて希望を有するに至るのである。イスラエル人の歩み來りし道は長く暗き苦難の道であつた。此の暗き苦難の道も豫定の時に終結せねばならぬ。之ぞ神が預言者を通じて示し給ふ所の確實なる御言である。「汝等の神云ひ給はく、慰めよ、汝等我が民を慰めよ。懇ろにエルサレムに語り、之に呼はり告げよ。その服役の期既に終りその咎既に赦されたり。その諸々の罪によりてエホバの手より受けし所は倍したり」(イザヤ書四十章一、二節)。

結 語

此の預言を読む者よ、汝等喜べ。之の成就する時既に至れり矣。我等は後章に於て此處に預言者の示せる「倍」に就て研究する事とする。本章に於て我等が宣べんとする所は幾多の實證が此の預言の成就を示しつゝある事と、イスラエル人の慰められる時が遂に到來せるを立證せんとするのである。嘗に猶太人が喜ぶ時のみならず、亦異邦人全部の歡ぶべき時である。若しイスラエル人の再建され、彼等の慰められる時が到來したならば、之は同時に地上全人類に對する救ひの時が到來せるを意味せるものである。之ぞ即ち地上全人類に對する祝福の時の開始されたるを意味するものにして、人々が之によつて慰められ、歡喜と讚頌の歌を高らかに歌ひ出すべき時である。

神がモーセを通じてイスラエル人に與へられし律法の中には、イスラエル人が受ける「苦

難」の期間の長さが指定されてゐた。之は隠語を以て示されてゐたが、今それを諒解すべき時となつた。何故なればその豫定の時が到來したからである。神は猶太人に示して、彼等が若し神に服従するならば斯く々々の祝福を受けんと告げ給ひし後、亦若し彼等が服従せざる場合には斯く々々の災難に遭ふべき旨を告げられた。即ち記さる、

「然れど汝等若し我に聽き従ふ事をなさず、此の諸々の誠命を守らず、我が法度を蔑如にしまた心に我が律法を忌み嫌ひて我が諸々の誠命を行はず、却て我が契約を破ることをなさば我も斯く汝等になさん、即ち我汝等に驚惶を蒙らしむべし。癆瘵と熱病ありて目を壞ぼし、靈魂を慮れ果てしめん。汝等の種播く事は徒勞なり。汝等の敵これを食はん。我わが面を汝等に向けて攻めん。汝等は其の敵に殺されん。また汝等の惡む者汝等を治めん。汝らはまた追ふ者なきに逃げん」(レビ記廿六章十四―十七節)。

イスラエル人は其の後神より背く事を屢々なし、神はその都度彼等が敵の手に陥るを許し置かれた。其の都度彼等は亦神に救ひを祈り求むる時に神はその度毎に彼等の罪を忘れて彼等を敵の手より救ひ出し、彼等に恩恵を復歸されたのである。詩篇記者は彼等イスラエル人の行狀を叙して云ふ、「彼等はエホバの命じ給へる事に遵はずして諸々の民を滅ぼさず、反りて國人と雜り居りて其の行爲に倣ひ、己が蹄となりし其の偶像に事へたり。彼等はその子

女を鬼に献ぐ」(詩篇百六篇卅四―卅七節)。彼等が悪魔に誘はれたる事實が此處に明示されてゐる。然る後、詩篇記者は續く、「エホバは屢々助け給ひしかき、彼等は謀略を設けて逆き、その邪曲に卑くせられたり。然どエホバは彼等の哭く聲を聞き給ひし時その艱難を顧み、その契約を彼等の爲に想ひ起し、その憐憫の豊なるにより聖意を變へさせ給ひたり」(詩篇百六篇四十三―四十五節)。

神は斯くイスラエル人に教訓を示して、彼等が神に服従して其の契約の條件を守るに忠實なる場合には神より祝福を受くべきも、不従順なる場合には必ず悲歎と苦難の到來する事を學び知るの機會を彼等に與へられたのである。「汝等若し斯くの如くなるも猶ほ我に聽き従はずば我汝等の罪を罰する事を七つの時(七倍……は誤譯)重くすべし」(レビ記廿六章十八節)。我等は此の律法の示す處によつて、神の聖旨は若しイスラエル人が彼等の受ける教訓に従はずして依然惡しき道を固執するならば、彼等の上に「七つの時」と豫定されし期間の懲罰を加へらるゝにありし事と、彼等の上に臨みし此の罰の期間が既に終了せるを諒解し得るのである。

猶太人の不従順なりし爲に神は預言者エゼキエルを通じて示し、イスラエルに對して最後の宣告を下された、(エゼキエル書卅一章廿四―廿七節)。此の宣告の執行さるゝ時が一方に「七

「七つの時」なる懲罰期間の開始期に該當するは當然である。此の神の宣告はイスラエルの最後の王ゼデキヤが敵に捕はれ、イスラエルの居民と共にバビロンの地に捕虜として連れ行かれたる時に成就した。(歴代志略下卅六章十一—廿一節)。爾後イスラエルはダビデの位に在る王を一人も有しなかつた。此のイスラエル王朝の顛覆は紀元前六〇六年であつた。其の時より後世界を支配するに至つた異邦人帝國の最初はバビロンであつた。神はイスラエルの王權を顛覆し、異邦人をして全地に統治の權を行使するを許された。即ち異邦人は斯くエホバの許しを受けて「七つの時」の期間を通じて全地を支配する事となつたのである。

預言者ダニエルがバビロン王ネブカデネザル及び此の世の諸國に關して告げた預言は此の異邦人の支配する期間が「七つの時」に相當するを明示してゐる。(ダニエル書四章十六節)。此の「七つの時」の期間は亦猶太人の「苦難」の期間にも相當するのであつて、此の期間を通じて猶太人は全地に散り、其の至る國々に於て迫害と艱難に遭つたのである。

猶太人の實際的「時」は一年の事であつて、此の一年は三十日を以て成る一ヶ月が十二ヶ月集つて成る一年(三百六十日)である。若し「時」が象徴的ならば一日は一年に相當する事となる。故に象徴的「七つの時」を年數に換算すると二千五百二十年となる。「一日を一年として」計算する象徴的計算方法に對する神の元則は民數紀略十四章卅三—卅四節とエ

ゼキエル書四章六節に示されてある。此の故にイスラエル人の受くべき苦難の期間は實際的「七つの時」か若くは象徴的「七つの時」の何れかの一つでなければならぬが、之等「七つの時」は實際的の七年でない事は明かである。何故なればイスラエル人は七年どころか七十年の長きをバビロンに囚はれたのみならず、爾後彼等の受けた刑罰は過去幾千年間を繼續してゐるからである。此の理由に基いて之等「七つの時」が象徴的である事は一點の疑ひなき所である。象徴的「一時」が三百六十年でありとするならば象徴的「七つの時」は合計二千五百二十年となる。此の二千五百二十年は紀元前六〇六年、即ちゼデキヤ王顛覆の時から始まつたが、その終結の時を求めると當然一九一四年(606+1314=2320)。若くは2320-606=1914。大正三年)となる。猶太人の「時」と、ヨベルの年のラツバが鳴り響いた贖罪の日を心に留めて考察する時に、此の二千五百二十年の期間は一九一四年(大正三年)八月一日に終結したのである。若し此の計算方法にして確實ならば、神の異邦人に對する恵みの時の終結した此の一九一四年の年に於て神の恩恵が再び猶太人の上に復歸した事を示す何等かの出来事を期待し得る筈である。而して我等はそれを明瞭に發見す。

一九一四年(大正三年)の八月一日、全地の異邦人諸國が怒を發して彼の世界大戰が勃發したるは主イエスの預言されし通りである。此の時猶太人の有力者、特にカイム・ワイズマン

博士等がパレスチナに於ける猶太人の利害問題を提げて活動を始めた事は一般に熟知されてゐる所である。其の當時パレスチナの地は土耳其の支配下にあつた。故に猶太人が同地に何等かの地歩を占むる前に先づ土耳其人をパレスチナから追ひ拂はなければならぬ。一九一七年(大正六年)の末頃英國のアレンビー將軍に率ひられたる聯合軍は土耳其軍を撃破して聖都エルサレムを奪取した。大英帝國は過去久しきに亘つて異邦人の最大世界強國であつた。之より少しく前に英國政府はバルフォア氏を通じてパレスチナに於ける猶太人再建事業に對して援助の意志ある旨を發表した。今は既に歴史的事實として史上に記録される事となりしバルフォア氏聲明書は聯合軍が土耳其軍をパレスチナから追ひ出す一ヶ月前に發せられた。之は猶太人がパレスチナの地を所有してそれを再建復興せんと試みたる最初の努力ではなかつたにしても、然し之は猶太人の故郷を再建して其處に彼等の權利を樹立すべく異邦人強國によつて與へられたる最初の公式承認であつた。而して注意すべきは此の最初の承認が異邦人間に於ける最大強國によつてなされた事である。

「七つの時」の終結したる丁度一九一四年の確定せる時に世界大戰が勃發し、此の大戦は猶太人をパレスチナに復歸さして其處に彼等を再建すると云ふ善き結果を到來せしめたのである。

それから間もなく北米合衆國及び其の他の異邦人諸國は猶太人をパレスチナの地に再建させんと云ふ大英帝國の意志に同意を表明した。英國政府はパレスチナの監理を委任され、國際聯盟は一九二二年七月廿二日に此の監理委任を批准した。

此の一九二二年(大正十一年)七月に於ける監理委任批准問題が考慮されてゐる最中に頗る興味ある出来事が起つた。若し其の時、國際聯盟の理事會議に於て何等かの反對があつたらば此の監理委任は批准されざる形勢にあつた。其の時にカーゾン卿が英帝國を代表してゐた。カーゾン卿は此の監理委任の批准を喜ばず、それと共にパレスチナに於て猶太人を再建すると云ふ問題に對して不賛成であつた。此の批准問題が聯盟理事會に於て決定されやうとする少しく前になつてカーゾン卿は突然急病にて重態に陥り、理事會に列する事が不可能となつた。然る時にバルフォア氏は突如選ばれて英帝國代表として國際聯盟理事會に出席する事となつた。此の時まで猶太人の有力者達は非常に失望してゐたが、バルフォア氏が任命されたと聞くや熱心なる猶太人は皆之を以て「神よりの奇蹟である」と叫び喜んだ。バルフォア氏は無論此の批准に賛成であつたのである。

一九一八年(大正七年)の春、即ちイスラエルの子孫が埃及から救ひ出されたる記念日に相當する頃、カイク・ワイズマン博士は其の隨員と共に大英帝國よりの全權を帯びてエルサレ

ムに赴き、パレスチナ國家の基礎を据ゑる仕事を開始した。之等の時期に就ては後章にあるイスラエル人の「重復」問題に於て研究する事とする。

一九二五年(大正十四年)にパレスチナ基礎財團より發表されたる報告に基きて各種の事實を蒐集すると左の如くなる。

- ▼一九一七年(大正六年)十一月二日、英國政府はパルフォーア聲明によつてパレスチナに於て猶太人の故郷再建の意圖あるを發表した。
- ▼一九二二年(大正十一年)七月廿四日、瑞西國シエネバに開催されし聯盟理事會に於てパレスチナに於ける監理委任が批准され、大英帝國が國際聯盟のパレスチナに於ける統治を委任された。
- ▼一九二〇年六月、英國ロンドンに於て開催されたるシオン年會に於てパレスチナ移殖民基金ケレン・ヘイソド財團が組織され、パレスチナ復興事業に對する財政機關とされた。此の財團は翌一九二一年(大正十年)三月ロンドンに於て一株式会社として登記され、その活動を開始した。
- ▼一九一七年(大正六年)以後、パレスチナに於て爲された諸種の事業に就て此の公報は報ず
- ▼廣大なる農業的セトルメントが數ヶ所に設立された。
- ▼多數の現代的郊外部市や田園都市が設立された。
- ▼猶太人の所有地として廣大なる面積が購入された。

- ▼猶太人の移住は秩序的に其の數を制定されると共に益々獎勵される事となつた。
- ▼現代的衛生設備が採用された。
- ▼大仕掛けの教育制度が發達した。
- ▼ヘアル語が日常語として使用さるゝに至つた。
- ▼猶太人の自治的政府建設の基礎が置かれた。
- ▼若し一年の移住猶太人數の最低が三萬人と決定し、ケレン・ヘイソド財團の之に對する豫算一百万磅(約千萬圓)が成立するならば之は今日の移住數の倍に相當する事となる。三萬人の移住民に職業を備へて彼等を安住せしむると共に、此の外に多數の自費移住者あり、之に伴ふて醫師教師役人も正比例的に増加してそれ〴〵職業を得る事となる。斯くしてパレスチナに於ける猶太人の數は急速に激増して今後十年間には少くも五十萬より百萬の猶太人が己の故郷に復歸して再建さるゝに至るであらう。
- ▼自己犠牲の精神に燃えて復興事業の爲に己が全生命を献げんとする猶太人は幾萬幾十萬の多數ありと雖も、今日の財源は其の事業の上に制限を加ふるの餘儀なきを示してゐる。

一九二五年(大正十四年)八月十八日、埃太利のウキナ市に開催された第十四回シオン運動會議に於てワイズマン博士が其の議長たり、同會議より發表された處によると其の時パレ

スチナに於ける猶太人の人口は十三萬五千人であつて、其の移住數も一ヶ月六百名より三千名への激増を見たのである。

パレスチナ再建事業に直接携はりつゝある人々は「コロンボ」と呼ばれてゐるが之は「開拓者」と云ふを意味してゐる。彼等の多數は高級の教育と訓練を受けた人々であるに拘らず自ら劇しき労働に従事してゐる。

和蘭、獨逸、澳太利、波蘭、露西亞及び歐洲諸國に在る猶太人の間には多くの青年男女があつて、彼等は何れもパレスチナに於ける仕事に必要な資格を備へる爲に訓練を受けてゐる。一九二〇年（大正九年）以後パレスチナに移住したる猶太人は何れも或る期間此の種の訓練を受けたのである。彼等の多くは特に鍵屋、機械工、大工、指物師、電気技師、石工、時計工等としての訓練を受けてゐる。

シオン制度は移民收容の設備を整へ、移民到着と共に登録して彼等の特殊技能の記録を作成する。彼等の到着する以前に豫めその就職口を調査し置き、到着と共にその適當なる方面に振り向ける事となつてゐる。

パレスチナに於ける最初の定期國勢調査は一九二二年（大正十一年）十月舉行されたが、其の時の猶太人居住數は八萬三千七百九十四人であつた。爾後猶太人の人口は漸次増加して一

九二九年（昭和四年）の春には十六萬五千人に達し、堅實なる増加の跡を示してゐる。

道路建設は組織的に行はれてゐて、一九一八年（大正七年）以前には道路不完全なりし爲に國內には自動車の數が極めて少なかつたが、今日に於てはタンからベエルシバまで自動車で旅行する事が容易となつた程である。電話其の他の通信網は國內に張り詰められた。過去數年間に於ける猶太人の商工業に於ける進展頗る目覚ましく、製粉、製油、石鹼、人造バターの諸會社は續々と建てられ、機械工場、織造工場、織物工場、皮革工場、帽子工場及び印刷所等が盛んに開設されてゐる。

一九二一年（大正十年）九月、パレスチナ政府とピンハス・ルツテンブルグとの間に契約が成立したが、其の契約の條件中にはケラクに於けるヨルダン河の堰建築の件、テペリオ湖（ガリヤ湖）の水を一水力發電所に引く運河開設の件、それに伴ふ水管敷設の件等が含まれてゐる。此の水力に依る電力はパレスチナ主要都市に於ける會社工場や家庭に供給され、尙ほ高架線を通じて遠隔地方に送られる事となつてゐる。同時に此の契約の中にはテペリオ湖の水を堰工事によつて引き上げる仕事も含まれ、又ヤルマク河と其の支流の流域轉換、之に必要なる諸設備建築の権利等が抱含されてゐる。之を要するに此の契約によつてパレスチナ一帯に大水利事業を起して耕地に化せんとするのである。更に之のみならずパレスチナの地域

中今日迄沼澤地として耕作不能たりし地は乾燥され、其の水は灌溉の爲に貯蔵される事となつた。

ヨルダン河を「ガリラヤの海」より半時間南に行くと其處には水力の大發電所が建築中であつて、頓て聖地一帯に新時代の原動力を供給する事となる。斯くて聖書の中で有名であつた此の河は三十萬馬力の大電力をパレスチナの農園、家庭、工場に供給する豫定となつてゐる。

一九二五年(大正十四年)の春、米國ニューヨーク市在住の猶太人の間に一汽船會社が組織され、紐育とパレスチナ間の直航々路を開いた。一九二五年三月十二日に汽船ブレンデン・ト・アーサー號が其の第一船として紐育港を出帆した。埠頭には十二萬五千の熱狂せる猶太人が參集して同船の出帆に大歡呼した。同船の一乗客にして、後パレスチナ着後エルサレム大學の開校式に列席したる某氏は左の如く報告した、

「一九二五年三月卅一日の正午近く、乗船ブレンデン・ト・アーサー號は我等の上陸すべき港灣に到着致し候。船内には三百五十名の乗客あり、その大部分は猶太人に御座候ひき。カルメル山の我等の眼界に入りし時、彼等は皆甲板に出で來り、預言者エリヤがエホバの神命に従ひてバアルの預言者を壓殺せる所、彼等の先祖等の土地を望見して感激の餘り絶叫し、老弱共に圓陣を作つて歌ひ、踊り、叫

び申候……

午後三時(一九二五年四月一日)開校式はスコープス山の東方山腹に於て舉行され申し候。其の周圍に約八千の座席が準備されあり候ひしも満員となり、數千の人々は山腹の要所に群がり立つの大盛況にて、高壇上にはバルフォア卿、ハルベルト・サムエル卿、アレンビー將軍、ソイズマン博士、マグナス博士、キツシユ大佐、ルツピン博士、レビー博士其の他知名の士を見受け申し候。

高壇上、辯士の座席よりは、ヨシユアがイスラエルの子孫を約束の地に導き入るべく渡渉せるヨルダン河の淺瀬を望み得られ候。亦その處よりは、羅馬の征服者がエルサレム崩壞當時に本營を築きたるスコープス山上を望見し得られ、イスラエル民族最後の分散當時の大悲劇を想起せしめ申し候。一辯士は此の點に就て特に力説し、パレスチナに於ける猶太民族復興事業の端緒が以上歴史的に最も意義ある兩地點を望見し得る地點に於て行はれ、然かも猶太人が永らくの間その設立を希望しつゝありし學府が遂に豫定の時至りて開設さるゝ事となり、全世界に甚大なる影響を與ふるは實に感慨無量なりと述べ候。

我等はアイルブの新殖民地を観察仕候。之はウクライナより移住せる猶太人の殖民地にて有名なる牧場あり、其の牛乳はエルサレムにて販賣され、既に多數の樹木は植ゑ附けられ、小生訪問の際は同地方最も繁忙の季節にて人々皆劇しく勞動致し居り候ひき。古代の高嶽は修葺され、多くの糸杉と松

は植を附けられ、五十種類以上の葡萄樹も既に植を附け済みに御座候。
我等はフルダの殖民地を通過仕り候。此の殖民地は既に數百エーカーの地に橄欖の樹及び各種の樹木七萬本の植を附けを終り候。此の地には混合耕作行はれ居り候。

我等は又リシヨン・レ・シオンを訪問仕り候。此の殖民地はエドモンド・ド・ロスチャイルド男爵によりて數年前に開設されたるものにて最も美はしき地點に御座候。ヤツファ(ヨツパ)とエルサレム兩地間を連絡する道路は小砂利を敷き詰めたる美事なるものにして、沿道兩側には美しき果樹園、葡萄園オレンジ園あり、此の殖民地の街路そのものも優雅なる棕櫚樹を以て兩側を裝飾しあり候。此處に世界第二のシヨン・レ・シオン葡萄酒大醸造場ありて各種葡萄酒の年産百廿二萬ガロンに達する由に御座候。

我等は此處より、猶太人によつて建設されたる最も進歩せる殖民地の一なるテル・アビブに向ひ候之れぞ二萬五千の人口を有する現代的都市にしてヤツファの附近にこれ有り候。ヤツファの狭く汚らしき街路を通り過ぎてテル・アビブの第廿世紀式現代都市に入る時に我等は猶太人のパレスチナに於て爲しつゝある仕事の何なるかを痛切に感得仕候。テル・アビブ市は一九〇九年、ヤツファ市の北東なる砂上に築かれたるものにて、僅か六十家族を以て始められたるものが今日にては既に美事なる都市に發達せるものに御座候。其の主なる貫通街路はアレンビー街と呼ばれ、全市の商業的中心に之あ

り候。街路は現代的交通機關に適するやうに廣きものにて兩側に舗装せる歩道あり、家屋は赤褐色の石材と漆喰を以て建てられ、又目下新たに建築中の家屋は同市にて生産する煉瓦を建築材料に使用致し居り候。

街路の或るものは棕櫚樹を兩側に植を附けて今カリホルニア州に見る現代的都市のそれを髣髴致させ居り候。尙ほテル・アビブ市には農業試験所之れ有り候。

此の市には亦アルファイナー生糸工場、レーテンベルグ發電所及び好個の建築材料を生産するシロカ煉瓦製造工場御座候。此の外に一の大工場と數個の小工場あり、開拓者等にとつて甚しく邪魔物扱ひにされ居たりし之等の砂丘よりは今、美はしき現代都市を建築するに必要な材料が得られ居り候。テル・アビブは繁華なる都市にてヤツファのアラビヤ人より羨望され居り、彼等はその繁榮の恩澤に浴する爲にヤツファとテル・アビブを合同せん事を希望致し居り候。

尙ほ小生はヘター・ナクバ、バルフォリア、ナハラ及び其の他の諸殖民地を歴訪仕り候。ナハラはマラリヤ熱病等疫病流行の地に建てられし殖民地にして土地は柔かく泥濘の地に御座候ひき。猶太人が此の地を買収せんとせる時にアラビヤ人は猶太人を嘲笑し、鳥すらもその水を飲めば死すべしと稱し居り候ひき。一九二一年(大正十年)に猶太人は此の沼澤地の乾燥事業に着手し、延長十四哩の運河を開鑿すると共に地下に多くの土管を敷設致し候。而して水を貯水池に集中したる後、コンクリ

トの土管を直立せしめ、ポンプを以て水を吸ひ上げて之を灌漑用水の必要なる地域に供給致し候。ナハラには今三萬本のユーカリ樹植を附けられ居り候。農民は現代的農具を使用して耕作致し居り、彼等の小綺麗な住宅は花園に包まれて建てられ居り候。

アイン・ハロアの殖民地は一九二一年（大正十年）に同じく沼澤地に建てられたるものにて、土地は乾燥するゝと共に一方水は灌漑用水として貯蔵されあり、葡萄、橄欖、バナナの果樹は多く植を附けらるゝと共に、糸杉、松、アカシア其他の樹木も多く植をられ居り候。小生は又多くの他の諸殖民地を巡訪致し候。ケネレット殖民地はヨルダン河がガリヤの地を去らんとする地點に在り、此の地も乾燥事業行はると共に六萬本の樹木は既に植を附け済みと相成り居り候。ヨルダン河上にはケネレットとダガニヤの兩地を連絡する爲に現代的橋梁架せられ居り候。此のダガニヤは多量の果物、野菜、鶏卵を産出するを以て有名なる殖民地に御座候。

聖書は示して、七十年荒廢期間（紀元前五三六年）の終了すると共に猶太人の「遺残者」と呼ばるゝ少數者が大なる熱心を以てバビロンより故郷に歸り來り、己が故郷再建を始めたこと教へてゐる。之と同一の運動が「異邦人の時」の終結せる今日に於ても進展中であつて、猶太人の「遺残者」はパレスチナに復歸して彼等の故郷を再建しつゝあるのである。之等の出

來事は單なる偶發事であるのであらうか。猶太人の歴史を知り、特に神が如何に同民族を取扱はれたかを知る猶太人は、今パレスチナに於て行はれつゝある事に對して些の疑點を挾まざる筈である。猶太人の故郷復歸、家屋と道路の建設、水道の敷設、葡萄園、果樹園の植を附け、土地の改良の總ては皆之れ預言の成就に過ぎないのである。今日我等の眼前に行はれつゝある此の事實に對して、神の預言が幾千年の大昔に何と告げてゐるかに注意せよ。紀元七三年に於ける最後の離散以後、猶太人のパレスチナ復歸の問題に就て神は預言者エレミヤを通じて斯く示し給ふ。

「我等等に目をかけて之を恵み、彼等を此の地に返し、彼等を建て、休まず、植をて扱かじ我彼等に我のエホバなるを識るの心を與へん。彼等は我が民となり、我彼等の神とならん。彼等は一心をもて我に歸るべし」(エレミヤ記廿四章六、七節)。

「視よ、我わが震怒と憤懣と大なる怒をもて彼等を逐ひやりし諸々の國より彼等を集め、此の處に導き歸りて安然に居らしめん。彼等は我が民となり、我は彼等の神とならん。我彼等に一つの心と一つの途を與へて常に我を畏れしめん。こは彼等と其の子孫とに幸福を得せしめん爲なり」(エレミヤ記卅二章卅七、卅九節)。

我等の眼前の諸實證は此の預言の絶對確實なるを立證してゐるのであつて、十六萬五千の

猶太人がその逐ひやられし諸國より故郷パレスチナに連れ歸らされしは、之れ隙かに之等預言の成就せるを立證してゐるのである。七三年に於ける最後の分散以後約束の地なるパレスチナは永らくの間、荒廢に歸してゐた。預言者エレミヤは猶太人が故郷に復歸して土地を買ひ取る事を預言して云ふ、

「人々此の地に田野を買はん。これ汝等が荒れて人も畜も無きに至り、カルデヤ人の手に付されしと言へる地なり。人々ベニヤミンの地とエルサレムの四圍とユダの邑々と、山々の邑々と平地の邑々と南の方の邑々に於て銀をもて田野を買ひ、契券を書きて之に封印し、又證人を立てん。そは我がの俘囚者を歸らしむればなりとエホバ言ひ給ふ」(エレミヤ記卅二章四十三―四十四節)。

上記ケレン・ヘイソド財團發表の公報に見るも數萬エーカーの土地が猶太人に買ひ取られたる事は事實であつて即ち神の預言と確實に一致するものである。

パレスチナの土地に灌溉水利事業が行はれて沼澤の濕地が乾かされ、貯水池が設けられたが之また預言の成就であつて、即ち記さる、

「我河を禿の山に開き、泉を谷の中に出だし、また荒野を池となし、乾ける地を水の源となさん。我荒野に香柏、合歡樹、もちの樹及び油の樹を植ゑ、沙漠に松、杉及び黄楊をともし

置かん。斯くて彼等これを見てエホバの作し給ふ處、イスラエルの聖者の造り給ふ處なるを知り、且つ心をとめ、且つともく悟らん」(イザヤ書四十一章十八―廿節)。

此の預言を読む時に、我等は故郷に歸る猶太人の爲に食糧を生産すべくパレスチナの地が耕作され、多くの菜園や果樹園が開かれある事實を學び知つて歡喜す。之に就て神は又斯く示し置き給ふ、「我が民イスラエルの俘囚を返さん。彼等は荒れたる邑々を建て直して其處に住み、葡萄園を作りてその酒を飲み、園圃を作りて其の果を食はん。我彼等をその地に植ゑつけん。彼等は我が與ふる地より重ねて抜き取らるゝ事あらず、汝の神エホバこれを言ふ」(アモス書九章十四、十五節)。

パレスチナの地に數百萬の樹木が植ゑ附けられたる此の實證と今後更に行はれんとする植林事業に就て神の預言者は預言して云ふ、「我荒野に香柏、合歡樹、もちの樹及び油の樹を植ゑ、沙漠に松、杉及び黄楊をともし置かん」(イザヤ書四十一章十九節)。

パレスチナには今一百以上の殖民地がある。之等は何れも現代的設備を以て建設されたるものであつて、其の住宅も人々の永久的住所として造られ、彼等は家主の暴利下に苦しめられる事なきに至る。彼等は又己自身の所有する葡萄園より其の果を食ふ。之ぞ即ち預言の成就する最初に過ぎないのである。即ち云ふ、

「彼等家を建て、之に住み、葡萄園をつくりてその果を食ふべし。彼等が建つる所に他の人住まず、彼等が造る處の果は他の人食はず、そは我が民の生命は樹の生命の如く、我が選びたる者は其の手の工ふるび失するとも存うべければなり。彼等の勤勞は空しからず、その生む所のものは災禍にかゝらず。彼等はエホバの福祉を賜ひし者の裔にしてその子等も相共に居るべければなり」(イザヤ書六十五章廿一—廿三節)。

神エホバより斯くも恵みと慈愛を受けたる國民は猶太人以外に絶無である。又神エホバに對して猶太人が有すべき信仰の理由を有し得る國民は他に絶無である。然し敵なるサタンは聖書に示しある大眞理をヤコブの子孫なる猶太人より隠してゐた。今此の大眞理を知るべき豫定の時は遂に到来した。神の御慈愛を學び知るの知識はその人に幸福を齎らす。此の故に慰めの福音は今猶太人に傳へらるべき時である。神エホバを愛し、其の聖旨を知つて之を爲さん事を願ふ人々は宜しく此の福音を猶太人に傳達すべきである。

預言者

我等は今迄へブル聖書(舊約書)の中に記録されあるへブル人(猶太人)の預言者の權威ある言を引用した。之等預言の多くは今やその成就の途上であり、然かも其の成就は如何なる人にも容易に識別し得られる程に明白なるものである。之等の成就は猶太人に對して非常なる

慰めとなるのみならず、彼等をして歡喜せしむる事となる。猶太人の歴史に見るに、彼等が神の言に對する信仰を實行し、共に服従せんと努めたる時に神は常に彼等を嘉納されし事實が明白に示されてゐる。神は絶對不變に在し給ふ。故に猶太人たる者は皆神の言に信頼すべきである。その信仰に従つて彼等の受くる慰めと歡喜と祝福の量は決定せらるべし。

今より千幾百年以前、ベテレヘムの小さき市に一個の猶太人が生れた。その少年の頃より彼は珍らしき聰明を示した。彼は成人すると共に國內を行き巡り、特にエルサレムと其の附近にあつて人々を教へた。彼の名をイエスと呼んだ。此のイエスの名はヨシユアと同じであつた。ヨシユアとイエスと共に同じ意味である。當時多くの猶太人はベテレヘムに生れたる此のナザレのイエスを信じて彼を一個の預言者なりとした。猶太人は所謂キリスト教徒と呼ぶ人々の言ふ所に禍ひされて、此のイエスと彼の爲したる證言に對して反感を懷いてゐる。敵なるサタンはクリスチャンと自稱する連中を使用してイエスの名を猶太人の前に憎惡すべきものとして了つた。

我等が今イエスの證言を此處に紹介せんとする唯一の目的は即ち彼の預言が今日の實證と如何に一致し、又之までに引用したる他の預言者等の預言と如何に完全に一致を示してゐるかを立證せんが爲である。猶太人がベテレヘムより生れしイエスに對して如何に反感を懷い

てるやうとも、彼等がイエスを以て特に優れたる偉大な教師として認めてゐる事は事實である。此の故に我等は、公平なる猶太人が古代の預言者等の預言と共に此のイエスの言をも公平に考慮すべき事を信じて今、此處にイエスの言を紹介せんとするのである。イエスが所謂クリスチャンの主張するが如き者であるか無いかと云ふ點に就て我等は今それを論じやうとするのではない。事實イエスは一個の猶太人にして、ダビデの家より生れ出で、偉大なる教師であつて多くの弟子を有し、彼の言は古代の預言者等の言と完全に一致してゐると云ふ等の事實は、一個の證者としてのイエスの言を精細に吟味し、今日我等の眼前に在る各種の實證に照らして彼の言は果して信頼すべきか否かを決定するの必要を生ずる譯である。イエスは猶太人にとつて最大の危機と目されるべき時代に此の地上に在つた。而して今、讀者はイエスが一個の猶太人であり、且つ一個の猶太人として證言を爲したる一事を心に留めて置いて研究を進めるべきである。

イエスがエルサレムに於て教へてゐた當時の猶太人は永らくの間異邦人の世界強國の桎梏下に在つた。彼等はバビロン帝國の崩壊、メディア・ベルシャ、ギリシヤの世界的諸帝國の崩壊に次いで今、羅馬が地上を支配してゐる事を知つてゐた。猶太人の大多數は彼等の預言者等の言を熟知してゐた。何故なればモーセの律法は彼等に向つて其等預言を學ぶべきやうに

命じてゐるからであつた。神を信頼した猶太人等は神が豫定の時に於て異邦人諸國を顛覆して其の恩恵を猶太人に復歸せしめんとする御約束を興へて置かれる事をよく知つてゐた。故に彼等は神がイスラエルの王權を復興し、アブラハムに約束されし如く其の王國を通じて地上全人類を祝福するゝ時の到來するを待ち受けてゐた。イエスの弟子等がイエスに向つて、此の王國建設の事、即ち異邦人の時の終結に就て質問せる事は極めて當然である。

イエスや其の弟子等は異邦人の時が何時の日かには終結する事を知つてゐた。何故なれば神は異邦人の支配期間を制限して置かれる事を知つてゐたからである。彼等は「異邦人の時の終結が即ち此の世の終結の時である事と諒解してゐた。」「世」と云ふ字は地球と云ふ意味するに非ずして、或る君主の統治下に於て一の政府制度に組織されある民衆を意味してゐるのである。猶太人は此の世が終結して神が新しき世即ち新政府を建設されん事を切に望んでゐた。此の理由に基いてイエスの弟子等はイエスに行つて斯う尋ねた。「此の世の終結時に於ける實證として如何なるものあるべきや、我等に告げ給へ」と。

而して今、此の質問に對するイエスの答を見る時に我等は本書の前章で詳述したる如く「異邦人の時」が一九一四年に公式の終結を告げ、其の時に何事が發生したかと云ふ事を心に留めてイエスの答を見なければならぬ。

イエスは此の質問に對して斯く答へた、「民起りて民を攻め、國は國を攻めん」と、即ち世界大戰である。此の預言は一九一四年（大正三年）に成就した。其の以前に世界大戰は一回もなかつた。其の時迄にも幾多の戦争あり、一國對一國、或ひは數國對數國の戦争はあつたが然し一九一四年より一九一八年迄の世界大戰に於ては實に「民起りて民を攻め、國は國を攻むる」の全地的大動亂であつて、國の老弱男女を問はず何れも戦線か若くは後方に於て何等かの持場を負はせられて此の大戦に参加せざるを得なかつたのである。全く空前の舉國一致であつた。全く世界大戰であつた。此の大戦は「異邦人の時」の終り、即ち此の世の終つた其の正確なる年に發生したのである。

イエスは此の質問に答へて世界大戰の勃發を預言すると共に更に又饑饉、疫病、地震がそれに續くと示してゐる。世界大戰に續いて露西亞、獨逸、埃太利其の他世界各處に發生したる大饑饉は實に未曾有の慘狀を示した。更に又一九一八年（大正七年）には空前未曾有の大疫病が全地を襲つた事は之明かにイエスの預言の通りである。「スペイン感冒」と呼ばれたる此の疫病は寒帯と熱帯の何れを問はず全世界を襲ふて僅か六ヶ月間に、世界大戰が四年間かゝつて殺戮した死者のそれよりも尙ほ多數の人命を奪つたのである。

イエスは此の質問に答へて、世界大戰、饑饉、疫病、地震に續いて「地にては諸國の人數

き悲み」と示してゐるが、事實全地の諸國諸民は世界大戰以後甚大なる苦難と困惑に逢着し然かも現在の困難を切り抜け得る良策は今日に至るも未だ何人からも提供されてゐないのである。

イエスは弟子等の質問に答へて又斯く告げてゐる、「其の時猶太人は劍の刃に倒れ、地上諸國に囚はれ行きて、エルサレムは異邦人の時滿つるまでは異邦人に蹂躪さるべし」と（マタイ傳廿四章。ルカ傳廿一章）。

此の故にイエスの預言は既に引用したる古代の預言者等の預言や、今日我等の眼前に於て實現成就しつゝある各種の實證と完全なる一致を示してゐる。此の一事に見るも猶太人たる者はイエスが此の地上に於て爲せし事を慎重に研究して見る必要を生ずる譯である。後章に於て引用せんとするイエスの證言も又古代の預言者等の預言と完全に一致してゐるものであるが、之等の言は今此の時に進行中なる事實の光輝に基いて研究さるべきである。イエスが神エホバよりの權威を受けずしては預言者と呼ばれる事は出来ない。若しイエスが一個の預言者であるとするならば彼の證言は神エホバより來れる權威ある言として受け容れられなければならぬ。

ベテレヘムに於て生れしイエスに就て斯く記さる、「これに生命あり。此の生命は人の光な

り。光は暗に照り、暗は之を曉らざりき。それ凡ての人を照らす眞の光は世に來れり」(ヨハ
ネ傳一章四、五、九節)。

第七章 「倍」

以上或る種の預言の成就せるを學びし後に今、我等は預言者の言ひしイスラエル人に對する「倍」なる字が何を意味するかを確かめ、又之によつて神の恩恵が何時からイスラエル人に復歸するかと云ふ正確なる期日を決定する事が出来る。事實は示してイスラエル人の受くべき刑罰の期間は彼等が神より受けたる恩恵の期間と同じ長さとなる事を示してゐる。エホバはその預言者を通じて示し給ふ、「エホバ言ひ給ふ、然れば見よ、此の後イスラエルの民を埃及の地より導き出せしエホバは活くと云ふ事なくして、イスラエルの民を北の地とその凡て逐ひやられし地より導き出せしエホバは活くと云ふ日來らん。我かれ等を我が其の先祖に與へし彼等の地に導き歸るべし。エホバ言ひ給ふ、視よ、我多くの漁る者を呼び來りて彼等

を漁らせ、また其の後多くの獵人を呼び來りて彼等を諸々の山、諸々の岡及び岩の穴より獵り出さしめん。我が目は彼等のすべての道を鑿る。皆我に隠るゝ所なし。又その惡は我が目に匿れざるなり。我先づ倍して其の惡と其の罪に報いん、そは彼等その汚れたる者の屍もて我が地を汚し、その惡むべきものを以て我が産業に満たせばなり」(エレミヤ記十六章十四—十八節)。

此の離散は紀元七三年ニサンの月に於ける猶太人の最後の顛覆を示したるは無論である。彼等が囚はれてバビロンに連れ行かれたる時には未だエホバの猶太人に對する恩惠の御手は彼等の上より離れる事なくして、豫定の時至るに及びて彼等は再び己が故郷に連れ歸された。而して神の恩惠は彼等が羅馬人に依て顛覆される時まで引き續き彼等の上に止まつてゐた。然る後に彼等は地上諸國に逐ひ遣られ、特に預言者エレミヤの言ふ所の「北の國」なる露西亞に多く逐ひ遣られた。而して實證は、過去數年間にパレスチナに復歸したる猶太人の多數は「北の國」なる露西亞より來れる事を示してゐる。

預言者エレミヤに依つて使用されたる「倍」の字はヘブル語の mishneh であつて、之は「重復」、「反覆」、「二重」若くは「倍」と云ふを意味す。故に結論は告げて、猶太人に對する神の懲罰の期間は、その恩惠の期間に匹敵するのであつて、即ち「倍」に相當してゐる事を示してゐる。

してゐる。

史家の全部はイスラエルの最後の顛覆が紀元七三年のニサンの月に起り、彼等の苦難が其より丁度十四年以前即ち紀元三三年のニサンの月より始まつたと云ふ意見に一致してゐる。

此の三三年より前に遡つて、ヤコブの臨終に際して彼の子孫が一の民族に組織された時までの上と、我等は其處に一千八百四十五年の期間があつた事を發見す。之ぞ即ちイスラエル人に對する神の恩惠の期間である。而して懲罰の期間が之と同じ期間である時に始めて「倍」の意義が成立して之を成就する事となる。此の預言の成就せるを立證せる事實を示す前に、我等は先づ之に關聯して他の預言を考慮し、其の期間の問題に就て研究する事とする。

預言者ゼカリヤは猶太人に向つて告ぐ、「シオンの女よ、大いに喜べ。エルサレムの女よ、呼はれ、視よ、汝の王汝に來る。彼は正義して救拯を賜はり、柔和にして驢馬に乗る。即ち驢馬の子なる駒に乗るなり。望を懐く俘囚人よ、汝等城に歸れ。我今日も尙ほ告げて言ふ我必ず倍して汝等にたまふべし」(ゼカリヤ書九章九、十二節)。

「我今日も尙ほ告げて言ふ、我必ず倍して汝等にたまふべし」の辭句は明かに此の預言者ゼカリヤの預言が成就すべき期日を指示してゐるのであつて、此の時から即ち「倍」が始まることとなる。我等は今、之に關してイエスの證言を紹介する事とする、そして若し既に發

生せる實證が示して此のゼカリヤの預言（同時に之はイザヤの預言と一致す）が成就せるを立證するならば、此の事實は本問題に對する重要な證據の一として受け容れられなければならぬ。猶太人の全部はイエスを以て充分に資格ある證者として受け容るべきである。

三三年ニサンの月の十日にイエスが驢馬に乗つてエルサレムに入城し自身を以て猶太人の王なりとして彼等に提供された事は歴史上著明なる一事實である。彼等猶太人がイエスを王として受け容れたか、それとも拒絶したかと云ふ事は別に問題とならぬ。イエスが一個の猶太人にして、弟子を有する偉大なる教師であつたと云ふ此の事實はイエスが王として自らを彼等に提供するに必要な充分の資格を備へられてゐた事を明かにしてゐる。之に關して歴史的記録は斯く示す、

「彼等橄欖山のベテバゲに至り、エルサレムに近づける時、イエス二人の弟子を遣はさんとして彼等に言ひけるは、汝等向ふの村に行け、やがて繋きたる驢馬の其の子と厩にあるに遇はん。それを解きて我にひき來れ。若し汝等に何とか言ふものあらば主の用なりと云へ、さらば直ちに之を遣はすべし。預言者の言に、視よ、汝の王は柔和にして驢馬即ち驢馬の子に乗りて汝に來るとシオンの女に告げよ、と言へるに應せん爲に斯くなせるなり。弟子行きてイエスの命ぜし如くなし、驢馬と其の子をひき來り、己の衣を其の上に置きければイエス之

に乘れり。人々多くは其の衣を途に布き、或ひは樹の枝を伐りて途に布きぬ。且つ前に行き後に從ふ人々呼び言ひけるは、ダビデの裔、ホザナよ、主の名によりて來る者は幸福なり、至高き處にホザナよ（マタイ傳廿一章一九節）。

ゼカリヤの預言は紀元三三年の此の時に成就したと記されてある。之ぞ即ち轉換期である。此の時より以前に遡つてヤコブ臨終の時にイスラエルの民が組織されし時迄に上ると此の期間は一千八百四十五年間であつて、一方此の日より丁度四十年後にはイスラエル民族が完全に顛覆された時が來た。 Jewish Encyclopedia (猶太百科辭典) は「紀元七三年ニサンの月の十日、マサダ城の陥落と共に戦争は終結した」と記してゐるが、他の歴史家も此の時日と一致してゐる。

此の故に「倍」は三三年の春から始まつたのであつて、イスラエル人に對する神の恩恵の期間が一千八百四十五年であつた以上、神の恩恵がイスラエル人に對して如何なる形式にても復歸の徴候を見せるまでに先づ一千八百四十五年間が経過しなければならぬ事となる。三年より起算して一千八百四十五年間の終結期日を求めると一八七八年となる。斯くて一八七八年の年は神の恩恵がイスラエル人に復歸を始める時であり、一方それより四十年後の一九一八年は、イスラエル民族最後の顛覆なる紀元七三年より一千八百四十五年後に相當する。

故に此の年にはパレスチナに於て猶太人が再建復興される事を公式に決定されなければならぬ事となる。此の點に基いて我等は今「倍」の問題を研究する事とする。

而して發生せる實證と以上の期日が如何によく一致せるかを以下の事實に就て見よ。

土耳其は統治者として永らくの間パレスチナの地を支配してゐた。一八七八年には露西亞と土耳其との間に戦争が進行中であつた。露西亞は土耳其に勝つてサン・ステファワノ條約に對する土耳其の署名を強要した。此の條約は甚だ不當なものであつたが故に大英帝國は干渉する事となつた。當時の英國の宰相はベーコンスフキールド卿と公稱されるたるデイスラエリと呼ぶ猶太人であつた。露西亞が英國の提議に對して商議する事を承諾した時に、英國は一八七八年六月十三日獨逸の柏林に於て同會議を開催するに決定したが、此の會議は三十日間繼續して行はれた。ベーコンスフキールド卿は自ら此の會議に列し、又條約文案をも起草した。彼は猶太人として大英帝國の大宰相となつた最初にして然も唯一の人であつた。以下は猶太百科辭典より抄録したるものである。

「露西亞は土耳其に戦ひ勝ち、サン・ステファワノ條約に依つて土耳其を事實上歐洲より驅逐し終りた。一猶太人なるベーコンスフキールド卿は一八七四年に大英帝國の宰相となりしが、彼は英國艦隊をダーダネルス海峡に急派すると共に、印度人軍隊をマルタに遣りて露國に對する示威運動を開始せ

り。而して英國は干渉の結果柏林にて全問題を解決するに決し、一八七八年六月十三日より七月十三日迄の期間柏林會議は開催さるゝ事となれり。同會議に於てベーコンスフキールド卿は露西亞を壓迫し對土耳其要求を緩和せしめたり。斯くして土耳其は解放されて獨立する事を許されたるも、之は同國の支配下にある猶太人に對して内政と宗教的權利を賦與する事を條件となせり。其の事實は猶太人の歴史に重要な事件と目さる。

正確の時なる一八七八年に於て猶太人に對する最初の恩恵が顯示された。それから暫らくして露西亞、羅馬尼、獨逸に於て猶太人に對する大迫害が始まつた。猶太人をしてパレスチナに復歸するの願望を抱かしむる爲に神は此の迫害の起きるを默許し置かれたるが明白である。

此の迫害に原因してシオン運動(猶太人を故郷パレスチナに復歸せしむる運動)が生れ出でた。一八九六年にテオドラ・ヘルズルは「猶太人國」なる題名下に於て一新聞を發行してゐた。彼は同紙上に於て猶太人の大義名分を熱心に主張した。彼が何故に猶太人の大義名分を正し彼等をしてパレスチナに再建せしむるの必要を主張するかに就て彼は斯く云つた、

「此の方法は現在實在する推進力を使用せんとするものである。總ては此の推進力に依らねばならぬ。

シオン運動の具體化

シオン運動は一八九七年に至りて公式に組織された。此の年瑞西のバーゼルに於て最初のシオン運動會議が開催され、世界各地より二百六名の代表者が列席した。シオン運動組織の目的に就て同會議は斯く聲明した。

シオン運動はパレスチナに於て猶太人の公安と權利と住居を創立せん事を目的となす。

此の目的を確保せんが爲に本會議は以下の諸方法を採用す、即ち、

- (一) 猶太人の農業者、工業家、産業者等特殊技能者のパレスチナ移住を奨励する事。
- (二) 所屬國家の法律に準據する地方的若しくは一般的團體を設立して、全世界の猶太人を糾合組織統一する事。
- (三) 猶太人としての氣魄と民族的良心とを鼓舞奨励する事。
- (四) シオン運動の目的を貫徹するに必要なものとして之等の事に對する政治的許可を獲得する事。

神の恩恵が猶太人に復歸すべき豫定の時至るに及びて神は猶太人の住居する諸國內に於て

彼等に對する迫害の起るを默許し置き、斯くして彼等の心をパレスチナに對する希望に向はしめられたのである。シオン運動の組織された時より以後、パレスチナを故郷として獲得せんとする猶太人の運動は引き続き熱心に行はれるやうになつた。然し世界大戰までは左程の進捗を見なかつたのである。

其處で我等は再び今、「倍」即ち重復の問題に還る。紀元三三三年より四十年後、即ち七三年にイスラエルの上に最後の艱難が到來して、彼等はパレスチナの地から追ひ拂はれて了つた、而して此の最後の分散に相當する「倍」の年は一八七八年より四十年後なる一九一八年（大正七年）となる。之等兩種の期日の間に、何れも一千八百四十五年間が介在してゐる。此の故にパレスチナに於ける猶太人再建問題に關して何等かの公式の承認が此の一九一八年に行はれなければならぬ事となる。猶太人の「贖罪の日」は毎年の秋頃となる。故に猶太人の年度は此の時から起算される事が屢々ある。一九一七年（大正六年）の秋、即ち一九一八年度開始の其の時に於てバルフォア氏は時の英國政府を代表して書をロスチャイルド卿に送り、パレスチナに於ける猶太人の故郷復興の承認を告知したのである。一九一八年の春、カイクワイスマン博士は英國政府よりの全權を帯びてパレスチナの監理者として同地に赴任し、エルサレムに於て事務所を開設し、新しき猶太政府の基礎を築いた。其の時、此處に最初の公

式承認が與へられたる譯であつて、然かもこれは預言によつて指示されある處の「倍」を成就する豫定の時に發生を見たのである。

斯くの如く猶太人に對する神の恩恵は急速に來たのではなくして、之が漸進的に顯はれて來た事は丁度一千八百四十五年以前に神の恩恵が漸次猶太人の上から離れ去つたと同様である。我等は實證を調べて見る時に一九二五年（大正十四年）が猶太人に對する恩恵復歸の上に甚だ重要な年である事を悟り知る事が出来る。偉大なる猶太大學がエルサレムに於て開校されたのは即ち此の一九二五年の年であつた。此の一九二五年に關聯して今、其の他の證據を調べて見る事とする。

ヨベール

神の預言者は神の嚮導を受けて斯く記した、「喜樂の音を知る民は幸福なり。エホバよ、彼等は聖顔の光の中を歩めり。彼等は聖名によりて終日喜び、汝の義によりて高く擧げられたり」（詩篇八十九篇十五、十六節）。此の預言はヨベールの年に適用さるべきである。猶太人は彼等の大ヨベルの時を樂まんと永らくの間切に待ち焦れてゐた。「喜樂の音」とは歡呼、喊聲、歡喜の音と云ふを意味す。ラツバが鳴つてヨベールの年を告知する事となつてゐた。

聖書は示して、アダムは己が不從順の故に死を宣告されてエデンから放逐され、神の恩恵

を失ひ、己自身と己が子孫に對する全部の者を失つて了つたと教へてゐる、（詩篇五十一篇五節）。此の理由に基いて全人類は罪に在りて生れたのであつて、之は別に全人類が罪人たる事を自ら欲したる譯でなくして己むを得ざる結果である。人間の切望する處は罪より脱して平和と幸福とを享樂せん事である。神と全く一致する者は斯かる善きものを得る事が出来る。

イスラエルの民は神が交渉を保たれたる唯一の國民であつた。即ち神は斯く明示し給ふた「地の諸々の族の中にて我ただ汝らのみを知れり」（アモス書三章二節）。此故にイスラエルの民は後地上全人類の上に来るべき幸福の爲に模型として神から使用されたるものなる事が明らかである。此の理由に基きて、神がイスラエル人に與へられた律法は未來に來らんとする更に善く、更に大なる事の前影であつて、即ち神がアブラハムの裔を通じて地上全人類を祝福せんと約束されたる其の善き時の到來を豫表したるものである。

神はアブラハムに向つて斯う約束された「汝の裔によりて天下の民皆福祉を得べし」（創世記廿二章十八節）。之ぞ即ち全人類に對し其の失ひし處のもの、全部を復興し、回復せんとする約束を意味するは瞭かにして、其の中の最も重要なものは生命と生存權の全き回復にあるは明白である。此の祝福の御約束の中には健康、平和、繁榮、幸福等も抱含されてゐる。此の故に神の律法の示す各點は先づ最初に猶太人に重要なものとなり、後には神の備へ給ふ

裔を通じて祝福を受くる全部の者に對して最も重要なものとなるのである。

モーセを通じてイスラエル人に與へられた律法の中の最も重要な條文の一にヨベルの律法がある。此のヨベルの律法は神がアブラハムの裔を通じて地上全人類を祝福するに適用するものを豫表してゐるは一點疑ひなき所であつて、此の祝福と云ふのは即ち人間がエデンに於て失つた處の全部を再び人類の上に回復される事を意味してゐる。

イスラエル人との間に律法の關係が始まつたのが過越節の時からであつた。其の時モーセはイスラエル人を埃及より救ひ出す者としての命令を既に神より受けてゐた。過越節を守り、それを準備する事に就て既に命令が發せられてゐた。其の時イスラエル人はモーセを彼等の指導者として受け容れた事によつて神エホバとの間に嚴肅なる契約を結び、神の律法に服従する事を表明してゐた。此の故に律法の契約は過越節の時から既に開始されたのである。而してシナイ山に於て起きた事は皆之れ埃及に於て作成された律法の契約を批准する爲であつた。

イスラエル人が埃及から救ひ出されて間もなく、神はマナを備へて彼等の爲に食糧とされた。之は彼等が尙ほ沙漠を旅行中にあつた事で、彼等は之以外に食糧を得る道を有してゐなかつたのである。律法は埃及からイスラエル人が救ひ出された事を記念する爲に安息日と安息の年に關する神命を守るべき事をイスラエル人に命じた。神は彼等に向つて斯く示し給ふた、「汝記憶ゆべし、汝曾つて埃及の地に奴隸たりしに汝の神エホバ強き手と伸べたる腕とを以て其處より汝を導き出し給へり。是をもて汝の神エホバ汝に安息日を守れと命じ給ふなり」

(申命記五章十五節)。

安息日の事の最初に示されあるはイスラエル人にマナを與へられし事に關聯しての時であつた。モーセは其の時に安息日とマナとに關してイスラエル人に示して云ふ、「エホバの言ひ給ふ所は斯くの如し、明日はエホバの聖安息日にして休息なり。今日汝等焼かんとするものを焼き、煮んとするものを煮よ。その残れるものは皆明朝まで藏め置くべし」(出埃及記十六章廿三節)。

斯くの如く「安息日」とは即ち休息を意味する事が明かにされた。安息日とヨベルとの間の區別は即ち、安息日は單なる休息に過ぎざるに對しヨベルは復興の故によりて得る大なる歡喜を意味してゐる。

ヨベルの制定

神はシナイ山に於てヨベルに關する律法を制定された。其の明文に曰く、

「エホバ、シナイ山にてモーセに告げて言ひ給はく、イスラエルの子孫に告げて之に言ふべ

し。我が汝等に與ふる地に汝等至らん時はその地にもエホバに向ひて安息を守らしむべし。六年の間汝その田野に種播き、また六年の間なんち其の果物園の物を刈り込みて其の果を集むべし。然ど第七年には地に安息をなさしむべし。之エホバに向ひてする安息なり。汝その田野に種播くべからず。またその果物園の物を刈り込むべからず。汝の穀物の自然生えたる物は穫るべからず。また汝の葡萄樹の修理なしに結べる葡萄は集むべからず。是地の安息の年なればなり。安息の年の産物は汝等の食となるべし。即ち汝と汝の僕と汝の婢と汝の傭人は人と汝の所に寄寓れる他國の人並びに汝の家畜と汝の國の中の獸みなその産物をもて食となすべし。

「汝安息の年を七次數ふべし。之即ち七年を七回数ふるなり。安息の年七次の間は即ち四十九年なり。七月の十日に汝ラツバの音を鳴り渡らしむべし。即ち贖罪の日に汝等國の中あまねくラツバを吹き鳴らさしめ、斯くして第五十年を聖め、國中の一切の人民に自由を宣れ示すべし。此の年は汝等にはヨベルの年なり。汝等各々その産業に歸り、各々の家に歸るべし。その第五十年は汝等にはヨベルなり。汝等種播くべからず、また自然生えたる物を穫るべからず、修理なしに生りたる葡萄を集むべからず。此の年はヨベルにして汝等に聖ければなり。汝等は田野の産物を食ふべし。」

「此のヨベルの年には汝等各々その産業に歸るべし。汝の隣に物を賣り、または汝の隣の手より物を買ふ時は汝等互ひに相欺くべからず。ヨベルの後の年の數に従ひて汝その隣より買ふことをなすべし。彼もまた其の果を得べき年の數に従ひて汝に賣ることを爲すべきなり。年の數多き時は汝其の値を増し、年の數少なき時は汝その値を減すべし。即ち彼その果の多少に従ひて之を汝に賣るべきなり。」

「汝等互ひに相欺くべからず。汝の神を畏るべし。我は汝等の神エホバなり。汝等わが法度を行ひ、また我が律法を守りて之を行ふべし。然せば汝等は安然に其の地に住む事を得ん。地は其の産物を出さん。汝等は飽くまでに食ひ、安泰に其處に住むことを得べし。汝等は我等若し第七年に種を播かず、またその産物を集めずば何を食はんやと言ふか、我命じて第六年に恩澤を汝等に降し、三年丈けの果を結ばしむべし。汝等第八年には種を播かん、然ど第九年まで其の舊き果を食ふことを得ん。即ち其の果の出で来るまで汝等は舊きものを食ふ事を得べし。地を賣るには限りなく賣るべからず。地は我が有なればなり。汝等は旅客、また寄寓者にして我と共に在るなり(レビ記廿五章一―廿三節)。」

神の爲し給ふ事には皆決定せる御目的がある。若し神がヨベルの或る度數を守れと命じられたるからには、我等は神がそれに對する何等かの御目的を有してゐられる事を確かに知る

事が出来る。其の御目的を確かめて之を知る事は即ち眞理の探求者に對して甚大なる慰めを與ふることとなる。而して我等は此のヨベルが何故に制定されたかを示す理由を聖書中に求め得る事が出来る筈である。

神はイスラエル人がバビロンに囚はれ行くを默許し、其の不在の七十年の囚はれの期間を通じてパレスチナの土地に安息を與へられた。之ぞ即ち預言者エレミヤの預言と完全に一致す。エレミヤは神の代辯者としてイスラエルの民に斯く示した、「此の地は皆空曠となり、詭異物とならん。又その諸國は七十年の間バビロンの王に事ふべし。エホバ言ひ給ふ、七十年の終りし後、我バビロンの王と其の民とカルデヤの地を其の罪の爲に罰し、永遠の空曠となさん」(エレミヤ記廿五章十一、十二節)。

預言者エレミヤは此處で示して彼等イスラエル人は七十年の間他の王に事へんと告げられある以上、此の七十年の終結すると共に彼等が此の奴役より解放される事が明瞭である。エレミヤは亦云ふ、「エホバ斯く言ひ給ふ、バビロンに於て七十年満ちなば我汝等を顧み、我嘉き言を汝等になして汝らを此の處に歸らしめん」(エレミヤ記廿九章十節)。

バビロンの王ネブカデネザルによつて彼等の土地が荒廢される事が始まつてから、彼等が再び己の故郷パレスチナに連れ歸られるまでの期間は丁度七十年であつた。

神はその預言者を通じて、何故に此の期間土地が荒廢されてゐるかと云ふの理由を示して置かれる。即ち云ふ、「ベルシャ王クロスの元年に當り、エホバ靈にエレミヤの口によりて傳へ給ひし其の御言を成さんとてベルシャ王クロスの心を感動し給ひければ、王即ち宣命を傳へ詔書を出して徧く國中に告げ示して曰く」(歴代志略下卅六章廿二節)。

神は斯く示して、猶太人が律法によつて制定される安息の年を守らざりしにより、彼等が外國に囚はれ行くを默許し、其の七十年間を通じて荒廢に歸せしめ、斯くして其の期間土地に充分の安息を與へられたのであつた。之は又他の預言者の言と完全に一致してゐる。即ち曰く、

「斯くその地荒れ果て、汝等が敵の國に居らんその間、地は安息を樂まん。即ち斯かる時は其の地休みて安息を樂しむべし、之は其の荒れて居る日の間息まん。汝等が其處に住みたる間は汝等の安息に此の休息を得ざりしなり。彼等その地を離るべければ地は彼等の之に居る者なくして荒れて居る間その安息を樂しまん。彼等はまた甘んじて其の罪の罰を受けん。是は彼等わが律法を蔑如にし、その心に我が法度を忌み嫌ひなればなり」(レビ記廿六章卅四、卅五、四十三節)。

律法は制定して第五十年目毎にヨベルの年が來ると示してゐる。此の年こそ休息と回復の

年である。荒廢期間（即ち土地に安息を樂しましむる爲の休息期間）は七十年となつてゐるが、之即ちヨベルの回数が七十回に制限されあるを明示す。此の數に制限されし神の聖旨は如何。即ち此の七十回のヨベルは時間の區劃であつて、年數の全部を區劃し、何等かの更に善き轉換の來る時まで此の七十回のヨベルが経過しなければならぬ事を示してゐるのである。神は此處で律法を以て示し、大ヨベルの期間が始まる豫定の時まで先づ七十回のヨベル（合計三千五百年間）が経過する事を告げて置かれたのである。

然らば神が唯七十回のヨベルのみに制限して置かれる理由は抑々何故か。律法は來らんとする更に善きものゝ豫影にして、模型なる以上、此の模型が終結する時に其處に律法によつて豫表されぬたる所の實體が始まらなければならぬのである。

神がアブラハムに與へられたる御約束には、「汝の裔によりて天下の民皆福祉を得べし」とあつた。然らば此の福祉とは何を意味するのか。アダムが其の罪の故によつて失ひ、エデンより放逐されし事によつて喪失せる所の全部のものを人間に回復し、復興される程人間にとつての福祉は他にないのである。

律法によつて制定されたるヨベル制度の目的は各人の失ひしものを各人に復興、回復するにあつた。此の故にヨベル制度の本來の目的は、神がアブラハムに示して地上全人類の上に

必ず到來せしむべしと約束されたる祝福を全人類に復興さるゝ事を豫表してゐた事は確實である。故に模型的のヨベルの年次の終結は即ち約束の祝福の開始さるゝ豫定の時であつて、之等の祝福は實體的大ヨベルの期間に於て必ず成就すべき善である。

此の故に實體的大ヨベルの期間が何時から開始されるかと云ふ事を決定する爲に、先づ此の七十回の模型的ヨベルが何時から始まつて、何時終結するかを確實に知るは最も必要なる事である。神は完全なる時間計算者に在す。エホバには過失は絶無である。神の律法は示して此の期間の起算はイスラエルの民が約束の地なるパレスチナに入る日より行へと命じてゐる。イスラエルの子孫はヨシユアに引率されてアダムより二五五三年後の春パレスチナの地に入つた。聖書は示して七年目毎の安息の年を七回数へて其の次ぎ即ち第五十年目毎に一年のヨベルの年あるべきを命じてゐる以上、七十回のヨベルとは即ち五十年を七十回重ねたる事となる。

之等のヨベルの年が五十年目毎に來て之を七十回を繰り返すと云ふ此の事實は即ちヨベルが未來に來らんとするものを豫表してゐる處の模型である事を立證してゐる。五十年を七十回重ねると合計三千五百年となる。此の三千五百年をアダム以後二五五三年に加へるとアダ

ム以後六〇五三年の年となる。今之を我等の近代式年數計算方法によつて換算すると、イスラエル人がパレスチナの土地に入つた年は紀元前一五七五年（キリスト誕生以前）であつて、今若し之に三千五百年を加へるとすると模型的ヨベル七十回の全期間は一九二五年（大正十四年）に終結する事となる。即ち今之を換言するとアダム以後六〇五三年の年と一九二五年（キリスト誕生後）の年は同一である云ふ事である。

然らば一九二五年の終りに於て我等は何を期待し得べきか。之は神がモーセを通じてイスラエル人に與へられた律法を參考として決定する事が出来る。即ちヨベルの年に關して律法は示して云ふ、「此のヨベルの年には汝等各々その産業（財産）に歸るべし」と。斯くの如く律法は示してヨベルの年は回復の年であると制定す。復興即ち回復なるものが神のアブラハムに與へられし御約束の目的を明示するものであり、又サムエルよりマラキ迄の預言者等が皆萬物の復興の偉大なる時の到來するを預言し居れる以上、實體的ヨベルは即ち祝福の時の開始を意味する事が明かである。

律法はヨベルの開始を如何に宣明すべきかを示してゐるが之の研究は今日の場合に於て甚だ興味あるものである。四十九年目の七月十日即ち贖罪の日の終りに於て左の如き方法によつてヨベルが宣布される事となつてゐる。

「七月の十日に汝ラツバの音を鳴り渡らすべし。即ち贖罪の日に汝等國の中にあまねくラツバを吹き鳴らさしめ、斯くしてその第五十年を聖め、國中の一切の人民に自由を宣れ示すべし。此の年は汝等にはヨベルの年なり。汝等各々その産業に歸り、各々其の家に歸るべし」

（レビ記廿五章九、十節）。

ラツバの音はヨベルの年の到來せる事を人々に告げ知らすべき爲にのみ發せられるのである。即ちヨベルの年の到來せるを民衆に知らしむると云ふ事は、先づ之を人々に知らしむる事の必要なる、彼等がその失ひしものを回復する以前に先づ此の事を知らなければならぬ爲である。

律法の示す處によるとヨベルの年の開始はラツバの音を以てするとなつてゐる。然らば此のヨベルのラツバは何を意味するか。ラツバは常に民衆に向つてヨベルに關して何事かの期待を促がし、彼等に歡喜と援助の到來せるを示す象徴として用ひられる。而して若し一九二五年（大正十四年）の年が最後の五十年の終結期に相當するとするならば、我等は人々が、復興に關する神エホバの雄大なる御目的に就て何等かの知識を得る事を期待し得る筈である。此の恩恵は先づ猶太人が受けて然る後に神に従ふ他の人々に及ぶ事となつてゐる。

何等知る事なくして復興される事の不可能なるは、恰も人に何をも知らさずして物を與ふ



枯骨の野

第一七六頁

イスラエル人復興の模圖

る事の不可能なると同様である。「賄物」とは一の契約であつて、これに對する知識はそれを與ふる者にも、又受くる者にも先づ必要とする處のものである。一九二五年以後、神エホバの政府に關する眞理の大宣明が全地に行き渡つた。此の政府は人類に對する復興の到來を意味してゐる。此の宣明は最も大任掛けに進展中であつて、此の宣明の仕事の終了すると共に、人類に對する復興事業が開始されるのである。

第八章 骨

エホバは古代の聖き人々を用ひて己が聖旨を完成し給ふ。そしてパレスチナに猶太人を再建する御目的の進展を豫示する模圖を作成し給ふた。神は預言者等の心の中に聖旨に關する異象を示し、彼等をしてそれを記述せしめ置かれた。之等の精神的異象は來らんとする事を豫表してゐるのである。

エゼキエルは神エホバが愛して用ひられたる人々の一人であつて彼も勵んで神の聖旨を行はんと務めた。彼は古代の聖き人々の一人であつて神は彼を預言者の一人とされた。エゼキエルは、或る時神の靈彼の上に止まり、彼を導いて「枯骨の滿ちたる野」の中に置かれたと記した。此場合エゼキエルは枯骨の野に自らを置かれたる異象を神より示されたる譯である。

然る後に神はエゼキエルをして野に行き巡らしめ、甚だ枯れたる多くの骨の野に満つるを示された。彼は生命の絶無なる之等枯骨の意義を悟り知る事が出来なかつた。他の神の預言者と同じく彼も又示された此の異象の意義を諒解する事能はず、唯漸くにして此の異象はイスラエルの全家に關するものなる事丈けを告げ知らされた。それが何うしてイスラエルの全家を代表してゐるかに就ては彼もそれを後に説明される迄諒解する事が出来なかつた。

神はその預言者等をして其の時には諒解し得ざる辭句を用ひて預言を記述せしめ置かれたが、之等の異象は神の御豫定の時至るに及びて聖旨を知りて之を爲さんとする者に諒解するを許される事となつてゐる。其の豫定の時至りて預言が成就する時に、研究者は己が眼前の實證と成就を適合して其の意義を諒解する事が出来るのである。

今、此の預言を精讀せよ、「茲にエホバの手我に臨み、エホバ我をして靈にて出で行かしめ、野(谷……は曠野)の中に我を置き給ふ。其處には骨充てり。彼その周圍に我を引き巡り給ふに野の表には骨甚だ多くあり、皆甚だ枯れたり。彼我に言ひ給ひけるは、人の子よ、之等の骨は生くるや。我言ふ、主エホバよ、汝知り給ふ。彼我に言ひ給ふ。之等の骨に預言し、之に言ふべし、枯れたる骨よ、エホバの言を聞け。主エホバ之等の骨に斯く言ひ給ふ。視よ、我汝等の中に氣息をいらしめて汝等を生かしめん。我筋を汝等の上に作り、肉を汝等の上に

生ぜしめ、皮をもて汝等を蔽ひ、氣息を汝等の中に與へて汝等を生かしめん。汝等は我がエホバなるを知らん。

「我命ぜられし如く預言しけるが、我が預言する時に音あり、骨動きて骨と骨相連なる。我見しに筋その上に出で來り、肉生じ、皮上より之を蔽ひしが氣息その中にあらず、彼また我に言ひ給ひけるは、人の子よ、氣息に預言せよ。人の子よ、預言して氣息に言へ、主エホバ斯く言ひ給ふ、氣息よ、汝四方の風より來り、此の殺されし者どもの上に息吹きて之を生かしめよ。我命ぜられし如く預言せしかば、氣息これに入りて皆生き、その足にて立ち、甚だ多くの群集となれり。

「斯くて彼我に言ひ給ふ、人の子よ、是等の骨はイスラエルの全家なり。彼等言ふ。我等の骨は枯れ、我等の望は竭く、我等は絶え果つるなりと。是故に預言して彼等に言へ、主エホバ斯く言ひ給ふ。我が民よ、我汝等の墓を開き、汝等を其の墓より出で來らしめてイスラエルの地に至らしむべし。我が民よ、我汝等の墓を開きて汝等を其の墓より出で來らしむる時汝等は我のエホバなるを知らん。我わが靈を汝等の中に置きて汝等を生かしめ、汝等を其の地に安んぜしめん。汝等即ち我エホバが之を言ひ、これを爲したるを知るに至るべし」(エゼキエル書卅七章一—十四節)。

神はエゼキエルに向つて『之等の骨は生くるや』と尋ねられた。無論彼は之に答へる事が出来なかつた。故に斯う云つた『主エホバよ、汝知り給ふ』、『若し其處に何等かの望あるならば主エホバよ、汝は知り給ふ筈であります』と。其の時神はエゼキエルに示して、之等の骨はイスラエルの全家であると告げられた。此の野は七三年に民族的に死亡したイスラエルの民族の「墓」を表象してゐる。同民族を形成してゐた人々は全地に離れ散つた。彼等は永らくの間神に救援を叫び求めてゐた。『我等の骨は枯れ、我等の望は竭く。我等絶え果つるなり』と彼等は幾多か苦み叫んだ事であらう。千幾百年の長きに亘つて此の民族は祭壇なく、祭物なく、祭司なく、神なき處の全き絶望の境遇に彷徨ふたのである。『枯骨の野』は實にも善く彼等イスラエル人を表象してゐるのである。

然らば彼等の希望を呼び覚ますべき爲になさるゝ最初の事は何か。神はエゼキエルに示して、之等の「枯骨」に斯く告ぐるやう命じられた。『枯れたる骨よ、エホバの言を聞け』と。エホバはイスラエル人に向つて御自身が神なる事を示し、彼等がその聖言に聽いて希望を再び燃やさん事を欲し給ふ。神の言に聽きて其を信じて應ずる者は生きんとすの御約束である、預言するを命ぜられたるエゼキエルは斯く云つた、『我命ぜられし如く預言しけるが、我が預言する時に音あり、骨動きて骨と骨相連なる』と。

之は何を意味するか。此の言は無論象徴的辭句である。骨は人體の骨組を形成す。人體は一の組織制度を表象するに用ひられる事が屢々ある、(コリント前書十二章十二―廿七節。イザヤ書五十二章七節)。此の故に骨と骨を寄せて相連ねると云ふ事は一の組織制度の骨組を形成する事をよく表象してゐる。

而して今此の預言の成就せるを立證する處の實證に就て見よ。一八七八年頃露西亞、羅馬、獨逸其の他の諸國に於て猶太人に對する迫害が劇甚となつた。其の時猶太人の間に大震動と共に大音響が起つた。之れ即ち枯骨が動いた事によつて善く表象されてゐる。そして之は又猶太人の心の中に故郷復興の願望を生ぜしめた。神は何者かに聞かしめんとて其の御言を發してゐられた。其の時に神はテオドラ・ヘルズルを起用された。彼は猶太人の一人であつて己が民を愛し、之に奉仕する事を喜んでゐた人であつた。

ヘルズル氏は「猶太人の慘狀」を呼んで、遂にシオン運動の方法を案出せしめたる「推進力」であると云つた。此の騷亂と迫害より來れる「震動」と「音響」は遂に「枯骨」即ち猶太人をしてバレスチナに復歸し、其處に彼等の故郷を復興せしむる爲の組織制度の骨組を組み立つる事となつたのである。人體を形成する骨片は二百六個を以て成つてゐる。シオン運動は一八九七年に瑞西のバーゼル市で開催された最初の協議會に於て一個の「體」に組織された

そして此の協議會に列したる代表者の數は人體を構成する骨片の數の如く丁度二百六人であつた。之は決して偶然の出來事ではなくして、神が豫め準備し置かれたる處の實證であつて神がイスラサル人を御自身の恩恵に復歸せしむる爲に如何に細心周到なる注意を拂つてゐられるかと云ふ事が之に見るも極めて明瞭である。之ぞ全く猶太人に希望と慰めを與ふる處の事實である。

骸骨そのものは餘り見よい物ではない。骸骨が生きて動く前に先づ筋と肉とによつてそれが覆はれ、其の上を皮膚で包まれて見よくされなければならぬ。シオン運動が活動を開始する前に先づ人間の精力と金(即ち肉と筋によつて表象さる)とを必要とし、而して世界の猶太人の前に彼等の眼を惹き附けるものとされなければならぬ。シオン運動の當事者は此の呼吸を善く諒解し、多數の人々を仲間引き込み、更に他の人々に奨めて出資を促がし、彼等をして多くの宣傳と廣告とをなさしめて、此の運動を猶太人の前に善く見ゆるものとなして彼等の眼を惹きつけるのである。斯く眺め見る時に、我等は神が猶太人をその故郷パレスチナに再建する爲に如何に巧妙なる方法を執り、之を模圖にて示し置かれたるかを悟り知る事が出来るのである。その時に預言者エゼキエルは又云ふ「我見しに筋その上に出で來り、肉生じ皮上より之を蔽ひしが氣息その中にあらず」と。

過去數年間に亘りて猶太人が非常なる努力をなせる結果、多數の人々を糾合して多額の金を集め、それによつてその故郷再建事業の上に甚だ良好なる効果を收め得た。然し其處には何か未だ不足してゐるものがあつた。レオン・シモン氏はパレスチナに於ける猶太人再建問題に就て斯う書いた、「パレスチナは未だ猶太人に回復されてはゐない。何故なれば猶太人は一の國家を興へられる程には未だ纏つて統一されてゐないからである」と。

猶太人は今、その頭腦と金力を以て其の故郷を回復する爲に不屈不撓の大努力を示してゐるが、彼等は其の運動中に尙ほ何かの缺けたるものあるを自覺してゐる。然らばそれは何であるか、神は其の預言の中に於て此の間に答へ置き給ふ。其處には骨あり、肉あり、筋あり、皮あるも未だ「氣息その中にあらず」と示さる。即ち彼等は未だ正しき精神を有してゐない之はパレスチナ再建の完成さるゝ以前に於て先づ自覺されなければならぬ。然ど猶太人よ、汝等失望する勿れ。何故なれば此の預言には「氣息」が此の組織制度の中に入つて神は猶太人をその故郷なるパレスチナの地に全く再興されんとする旨が明示され、又其の豫定の時が來たからである。

「彼また我に言ひ給ひけるは、人の子よ、氣息に預言せよ。人の子よ、預言して氣息に言へ主エホバ斯く言ひ給ふ。氣息よ、汝四方の風より來り、此の殺されし者どもの上に息吹きて

之を生かしめよ。我命ぜられし如く預言せしかば氣息之に入り、皆生きてその足にて立ち、甚だ多くの群衆となれり」(エゼキエル書卅七章九、十節)。

此處にある「氣息」も「風」も共にヘブル語の רוּחַ の字より譯されてゐる、(創世記六章十七節)。呼吸にしても風にしても肉眼には見えないが共に力の強きものである。人間が創造されし時、神が彼に生命の呼吸を吹き込まれるまでは生きて動かなかつた。人間を生かしめたのは即ち神の見えざる力であつた、(創世記二章七節)。エゼキエルの此の預言中の風即ち呼吸は活動を開始せしむる力であるが、此の力は猶太人をして其の全希望を全く自覺せしむる處のものである。彼等の精神即ち動機は神と一致和合しなければならぬ。

シオン運動の發企者ヘルズルはシオン運動成立の「推進力」は「猶太人の慘狀」なりと聲明した。而して今、彼等猶太人がパレスチナに復歸して其處に己が住所を求めんとする現在の動機は平和に安住せんが爲である。之が我利私慾的の動機なる事は萬人の首肯する處である。彼等現在の行動は之皆我慾に基くものである。猶太人はパレスチナに於ける諸々の權利と約束の祝福とを得るべく成功する前に彼等は先づ神の靈を有さなければならぬ。即ち彼等の全行爲の精神、動機をして神の全行爲の動機たる絶対無私なるその如きものとなさなければならぬ。絶対無私とは即ち愛と云ふ事である。

神がイスラエル人に對して與へられたる誠命の首に云ふ、「然ればイスラエルよ、聽きて謹んで之を行へ、然せば汝は福祉を得、汝の先祖の神エホバの汝に言ひ給ひし如く、乳と蜜の流るゝ國にて汝の數大いに増さん。イスラエルよ、聽け、我等の神エホバは唯一のエホバなり。汝心を盡し、精神を盡し、力を盡して汝の神エホバを愛すべし。今日我が汝に命する之等の言は汝これをその心にあらしめよ」(申命記六章三―六節)。

今、猶太人がパレスチナを再建するに際して最も必要なるものは何かと云ふと其れは即ち新しき精神である。即ち彼等はパレスチナを再建するに際して、彼等の爲に常に善を與へ給ひし神エホバを愛するの愛をその動機としなければならぬ。神を信じ、其の御言に信頼し、神を愛する事は最も大切な事である。神を愛する事なくして神を信する事は不可能である而して神を愛する者は何れも皆神を信じ、其の聖言に信頼す。神は告げ給ふ、「汝心を盡してエホバに依り頼め。己の聰明に倚ることなかれ。汝すべての途にてエホバを認めよ、さらば汝の途を直くし給ふべし」(箴言三章五、六節)。

今之を言を換へて云ふならば、強大富裕なる猶太國を建設する事を以てシオン運動の動機となす事なく、唯猶太人たるものは宜しく信仰を以てパレスチナに復歸して其處に己が故郷を再建せよ、何故なれば此の事は彼等自身と彼等の先祖等にとつて神聖なる事であり、神が

アブラハムに此の地を與へんと約束されし所であり、先祖等は何れも神を信賴し、神が此の御約束をアブラハムになされたる以上は必ず此の地をアブラハムの子孫に與へ給ふ事を固く信じてゐたる處であるからである。猶太人たる者は宜しく神エホバと其の御約束を信じ、その道を全部神に委ね奉り、その歩む道にて常にエホバの指導を認め知り、斯くする時に其處には過失の絶無なるべきを明かに覺り知るべきである。斯くする時に敵なるサタンは猶太人に對して何等の害をも加ふる事能はざるに至る。其の時彼等は勝に乗りて進み行き、總ての反對と障害を征服し、その豫定の時至るに及びて己が故郷パレスチナの地に固く建てられ、彼等を愛し給ふ神に全光榮を歸し奉る事が出来るのである。

今日まで猶太人は不信の裡にパレスチナの地に復歸集合して來た。神はその御慈愛の御手を彼等の上に置きて、彼等に對してその恩恵が復歸すべき豫定の時の到來せる事を顯はし示された。而して今、彼等猶太人は神を信じて己が信仰を實行し、其の御約束の上に固く縋るべきである。今日地上にある猶太人はその先祖等の過失に對して何等の責任を負はないのである。而して今日、地上にある正直なる猶太人は、己が智慧を頼みて然かもその智慧の滅ぶる事を預言者イザヤに依つて既に預言されある處の彼等ラビ(猶太人の教職者)等の誤謬に對して何等の責任を負はないのである。(イザヤ書廿九章十一、十四節。五十六章十、十一節)。

今日までに神は多くの猶太人をパレスチナに連れ來られた、そして今、彼等に神の愛を示して彼等の中に新しき精神と新しき靈とを置かれるのである。

「是の故に言ふべし。主エホバ斯く言ひ給ふ、我汝等を諸々の民の中より集へ、汝等を其の散らされたる國々より聚めてイスラエルの地を汝等に與へん。彼等は彼處に到り、その諸々の汚れたる者とその諸々の憎むべき者を彼處より取り除かん。我彼等に唯一の心を與へ新しき靈を汝等の衷に授けん。我彼等の身の中より石の心を取り去りて肉の心を與へ、彼等をして我が法憲に遵はしめ、我が律法を守りて之を行はしむべし。彼等は我が民となり、我は彼等の神とならん」(エゼキエル書十一、十七、廿七節)。

アブラハム、イサク、ヤコブ及び其の他の忠信なる預言者等は皆神の靈を有してゐた。彼等は神を愛して神に服従した。彼等は神に忠信であつた。そして神は彼等の忠信を嘉納された。神はアブラハムに約束して彼と其の子孫はパレスチナの地を所有すべしと告げられた。神は確實に其の御約束を守り給ふ。之等の忠信者は何れも墓より出て來りてパレスチナの地に立てられるのである。彼等の全ては何れも先祖アブラハムの精神を有して神に對し絶對無私の愛を獻ぐ、斯くて神は豊かなる祝福を彼等の上に加へられるのである。

「此の故に預言して彼等に言へ、主エホバ斯く言ひ給ふ、我が民よ、我汝等の墓を開き、汝

等を其の墓より出で來らしめてイスラエルの地に至らしむべし。我が民よ、我汝等の墓を開きて汝等を其の墓より出で來らしむる時、汝等は我のエホバなるを知らん。我わが靈を汝等の中に置いて汝等を活かしめ、汝等を其の地に安んぜしめん。汝等即ち我エホバが是を言ひこれを爲したるを知るに至るべし（エゼキエル書卅七章二十四節）。

神は單にパレスチナに於てイスラエル人に住所を與ふる爲に今日迄の長年月を費されたのであらうか。否、然らず、それが全部の目的では決してない。神の御目的はイスラエル人をパレスチナの地に再建する事によつてその榮光を聖名に歸すると共に、彼等を通じて地上全人類を神との調和一致に入れ、アブラハムに約束されし如く其の「裔」を通じて全人類を祝福する事にあつたのである。其の爲に神は猶太人との間に新約即ち新しき契約を結ばんと約束されたのである。

新約

神がイスラエル人との間に埃及に於て結び、後シナイ山に於て批准されたる律法の契約はイスラエル人の利益の爲であつた。十誡中の最も重要な部分は「汝我が面の前に我の外何物をも神とすべからず」と云ふ事であつた。若しイスラエル人が此の誠命に忠實であり、エホバに絶對の信頼を爲してゐたならば神は彼等を保護し、敵なるサタン即ち惡魔の兇惡なる

感化の手より離れしめられた筈である。

神はイスラエル人に律法を與へられた時に、彼等がその契約に服従する場合に受ける諸々の祝福と、又彼等がそれに服従せざる場合に於て受ける刑罰とを併せ示された。申命記第廿八章を讀む時に、其處にイスラエル人の歴史が豫示されあると共に、一方其の御約束を如何に固く嚴守されるかと云ふの事實を教へられる。猶太人は彼等の契約を破つた、其の結果として彼等は散らされて了つた。そして彼等は苦難の長夜を悩み過ごして來た。斯くして今、其の苦難の期間は終結した、神は彼等を其の故郷の地に復歸せしめてゐられるのであつて、その御約束の如くに彼等との間に新約を結ばれんとするのである。即ち記さる、

「視よ、我わが震怒と憤恚と大なる怒をもて彼等を逐ひやりて諸々の國より彼等を集め、此の處に導き歸りて安然に居らしめん。彼等は我が民となり、我は彼等の神とならん。我彼等に一つの心と一つの道を與へて常に我を畏れしめん。こは彼等と其の子孫とに幸福を得せしめん爲なり。我かれ等を捨てずして恩を施すべしと云ふ永遠の契約を彼等に立て、我を畏るゝの畏れを彼等の心に置いて我を離れざらしめん。我は喜びて彼等に恩を施し、心を盡し、精神を盡して誠に彼等を此の地に植うべし。エホバ斯く言ひ給ふ、我は此の諸々の大なる災禍を此の民に降せし如く我が彼等に言ひし諸々の祝福を彼等に降さん」（エレミヤ書卅二章卅七

一四十二節。

「智慧」とは知識を神の標準に善く適用する事である。智慧は聞く事と経験とにて教へらる。彼等イスラエル人は既に多くの経験をえた。智慧として最も初めに必要なる事は神を畏れ敬ふ事である。「エホバを畏るゝは智慧の始めなり、之らを行ふものは皆瞭かなる聰明ある人なり、エホバの頌美は永遠に失することなし(詩篇百十一篇十節)。神の御目的は永らくの間人間に對して秘密とされてゐた。そして之は唯神を愛して之に奉仕する者に對してのみ知らされる。「エホバの親愛はエホバを畏るゝ者と偕に在り。エホバは其の契約を彼等に示し給はん」(詩篇廿五篇十四節)。

神は今多くの猶太人をバレスチナの地に集められた。彼等が神の言を學び、神を畏れ敬ひて之に奉仕する事によつて智慧に育つ時に、神は彼等を己に接近せしめて其の御約束に基き彼等に新約を與へ給ふのである。即ち記さる、

「エホバ言ひ給ふ、視よ、我がイスラエルの家とユダの家とに新しき契約を立つるの日來らん。この契約は我が彼等の先祖の手をとりて埃及の地よりこれを導き出せし日に立てし所の如きに非ず、我かれ等を娶りたれども彼等は其の我が契約を破れりとエホバ言ひ給ふ。然ど彼の日の後に我がイスラエルの家に立てん所の契約はこれなり。即ちわれ我が律法を彼等の

中に置き、其の心の上に録さん。我は彼等の神となり、彼等は我が民となるべしとエホバ言ひ給ふ。人各々その隣とその兄弟に教へて汝エホバを知れと復言はじ、そは少より大に至るまで悉く我を知るべければなりとエホバ言ひ給ふ。我彼等の不義を赦し、その罪をまた思はざるべし(エレミヤ記卅一章卅一―卅四節)。

神がその手を以てイスラエル人を埃及より導き出し、シナイ山に於て批准されたる律法の契約に就ては神は其の各部分を忠實に守られた。若しもイスラエル人が其の契約の各部を守る事が出来、又それを守つたならば彼等は其の御約束に基き諸々の祝福を神より受けた筈である。此の律法の契約は終つた、何故なれば彼等がこれを守る事が出来なかつたからである。而して彼等は之に失敗すると共に不従順なりし故を以て打ち棄てられて了つた。

而して今、神はイスラエル人を其の故郷の地に導き歸し、イスラエルの家とユダの家(即ち猶太人全部)との間に新約を作成せんと約束された。之即ちアングロサクソン人種(英國民)が神の選民なりと稱する馬鹿氣な主張を永遠に否定するものである。神は「イスラエルの家とユダの家」とに新約を結ぶと約束された。之即ち猶太人である。何故なれば彼等猶太人はイスラエルとユダとの肉の子孫であり、ユダの家を通じて大救済者が出現し來らんと神の御約束に固き信仰を有する者であつて、神は之等の者との間に新約を結ばれる事となるので

ある。

然らば神は何の目的を以てイスラエルとの間に新約を結ばれるのか。即ちイスラエル人は其の御約束の祝福を受ける前に先づ彼等にとつて必要なる條件を學ばなければならぬのであつて、然る後に彼等が此の新しき契約を守る時にその約束の祝福を受ける事となる。而して嘗にイスラエル人のみならず地上全人類も亦此の祝福を得るの一機會を與へられるのである猶太人が何故に律法の契約を守る事が出来なかつたかと云ふ一の理由は彼等が常に我利的であつて、己に都合のよい我慾の道のみを求めたからであつた。敵サタンは此の點を利用し、常に彼等の我慾心を煽動してその心を神エホバより離れしめ、斯くて他の神々を崇拜せしめてその契約を破らしめたのである。

然らばサタン即ち悪魔は之と同様に新約にも禍ひし、其の運用期間中に人々の心を神エホバより離反せしむるの方法を執るのであらうか。否、然らず、何故なれば新約の運用期間中にはサタンは制縛されて、其の時諸國の民を惑はす事なきに至るからである。彼の惡しき感化と影響は地上の諸國を非常に弱らした。預言者は今、彼に就て斯く示す、

「汝正しからざる交易をなして犯したる多くの罪を以て汝の聖き所を汚したれば、我汝の中より火を出して汝を焼き、凡て汝を見る者の目の前にて汝を地に灰となさん。國々の中にて

汝を知る者は皆汝に驚かん。汝は人の戒懼となり、限りなく失せ果てん」(エゼキエル書廿八章

十八、十九節。イザヤ書十四章十二―十五節)。

神は更に又預言者エレミヤを通じて斯く宣ふ、「我はわが律法を彼等の中に置き、その心の上に録さん」と。神は此の御言をエゼキエルの口を通じて更に確めて斯く告げ給ふ、

「我新しき心を汝等に賜ひ、新しき靈(靈魂……は曲譯)を汝等の中に授け、汝等の肉より石の心を除きて肉の心を汝等に與へ、我が靈を汝等のうちに置き、汝等をして我が法度に歩ましめ、我が律法を守りて之を行はしむべし。汝等は我が汝等の先祖等に與へし地に住みて我が民とならん。我は汝等の神となるべし」(エゼキエル書卅六章廿六―廿八節)。

此處に「心」と譯されある字は「精神」の事であつて之は感情の基座若しくは行爲の動機を意味す。人の動機は其の人の精神によつて決せらる。若しイスラエル人が純なる精神を以て神を愛してゐたならば彼等はサタンの奸策に陥らなかつた筈である。彼等は其の長い經驗によつて教訓を學び知らされた。猶太人は神を愛する事を學び知るのであつて、斯くて彼等の心は喜んで神に服従し、其の聖旨を爲すに至る。彼等が正直なる努力を示し、純なる精神を以て新約の條件を守らんとする時に神は彼等に必要なる援助を與へて、彼等をしてそれを守る事を得せしめられるのである。彼等はそれを單なる形式や義務、利慾の爲になすに非ず

して喜んで神の聖旨をなすに至る。神の律法が人間の心の上に録さるゝ時に人は喜んで神の聖旨をなす。即ち記さる、「我が神よ、我は聖意に従ふ事を樂しむ、汝の法は我が心の中に在り」(詩篇四十篇八節)。

神はパレスチナの地をアブラハムとイサクとヤコブとに與へんと約束された。彼等は皆死んだ。彼等は其の土地の如何なる部分も所有しなかつた。然らば此の約束は彼等に對して何の役に立つか。若し彼等が永久に死に打ち棄て置かれたならば此の約束は絶対に無効となる。然し神は約束して彼等の墓を開きて彼等を其處より引き出さんと告げられた。即ち記さる、

「是故に預言して彼等に言へ、主エホバ斯く言ひ給ふ、我が民よ、我汝等の墓を開き、汝等を其の墓より出で來らしめてイスラエルの地に至らしむべし。我が民よ、我汝等の墓を開きて汝等を其の墓より出で來らしむる時、汝等は我のエホバなるを知らん」(エゼキエル書卅七章十二、十三節)。

死者は絶滅、歸無、消失の状態に在つて絶対に無意識である。即ち斯く記し置かる、「生ける者は其の死なん事を知る。然ど死ねる者は何事をも知らず、また應報を受くる事も重ねてあらず。其の記憶えらるゝ事も遂に忘れらるゝに至る。凡て汝の手に堪ふる事は力を盡して之を爲せ、そは汝の往かん所の墓(陰府……は曲譯)には工作も計謀も知識も智慧もあ

ることなければなり」(傳道書九章五、十節)。「死ねる人も幽寂ところに下れる者もヤハを讃め稱ふることなし」(詩篇百五篇十七節)。

ヨブは復活を信じて斯く證言した、「願はくは汝我を墓(陰府……は曲譯)に藏し、汝の震怒の息むまで我を掩ひ、我が爲に期を定め、而して我を念ひ給へ。人若し死なばまた生きんや。我は我がいくさの諸日の間望み居りて我が變更の來るを待たん。汝我を呼び給はん、而して我答へん。汝必ず汝の手のわざを顧み給はん」(ヨブ記十四章十三、十五節)。

猶太人はイスラエル人の父即ち先祖としてアブラハム、イサク、ヤコブの名を口にしている。而して之等の「列祖」がメシヤの統治下に於て死より復活せしめられる時に「汝の子等は列祖に代りて立ち、汝は之を全地に君となさん」(詩篇四十五篇十六節)。アブラハム、イサク、ヤコブ、ダビデ及び其の他の預言者等は何れも死より復活せしめられて民の指導者とされるのである。我等は彼等の復活の近きを知る、何故なれば神の恩恵がイスラエル人に復歸し始めたからである。之ぞ即ち預言者ダニエルの言ひし所の「終末の時」であつて即ち「地の下に睡り居る者の中多くの者眼を醒さん」の預言の成就せんとする時である、(ダニエル書十章一、四節)。神がアブラハムに向つてパレスチナの土地を與へんと約束されし事は絶対確